

# 岩井戸岩陰遺跡

2003

財団法人 岐阜県文化財保護センター

いわ い ど いわ かげ  
岩 井 戸 岩 陰 遺 跡

2003

財團法人 岐阜県文化財保護センター

## 序

岐阜県のほぼ中央に位置する武芸川町は、丘陵に開まれた武芸谷筋下流の町です。町内を武儀川が北西から南東に貫流し古くから美濃和紙の生産地として栄えてきました。

このたび、一般国道418号道路改良工事に伴い、武儀川左岸に位置する岩井戸岩陰遺跡の発掘調査を実施しました。

この遺跡は、崩壊した礫の重なりによってできた空間を利用した遺跡で、天井からの崩壊礫が少なく、岩陰を良好に残しているため、古くから遺跡の存在が知られていました。このたびの調査により、縄文時代から現代にかけての多くの遺物を確認しました。その結果、岩陰が縄文時代から長期間にわたって利用されていたことが明らかとなりました。出土した遺物の変遷を辿ることで、先人が、この岩陰をどのように利用していたかを考える貴重な成果が得られたといえます。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めると共に、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、武芸川町教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申しあげます。

平成15年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 服 部 卓 郎

## 例　　言

- 1 本書は、岐阜県武儀郡武芸川町谷口、小知野に所在する岩井戸岩陰遺跡（岐阜県遺跡番号21463-01203）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、一般国道418号道路改良に伴うもので、岐阜県基盤整備部美濃建設事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査及び整理作業は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成13年度に、整理作業は平成14年度に実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当などは、本章第1章第2節に一括掲載した。
- 5 本書の編集及び執筆は、第7章を除いて三島が行った。
- 6 発掘調査における作業員雇用・現場管理・掘削・地形測量・空中写真測量などの業務は、国際航業株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 自然科学分析（放射性炭素年代測定・テフラ分析・貝種同定）については（株）パレオ・ラボに委託して行った。その結果は、第7章に掲載した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、五十音順）  
石黒立人　伊藤正人　大下明　後藤信幸　綾瀬茂　齊藤基生　白石浩之　長尾幸二　野口哲也  
早川正一　藤根久　古田正雄　松井朗　水野祐之　矢野健一　吉田英敏
- 武芸川町教育委員会　武芸川町郷土史研究会
- 10 本文中の方位は、国土座標第4系の座標北を示している。
- 11 土層及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1998『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

## 本文目次

序	
例言	
目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経過と方法	2
第2章 遺跡の立地と環境	5
第1節 遺跡周辺の立地と環境	5
第2節 周辺の遺跡	7
第3章 基本層序と遺構・遺物の概要	9
第1節 基本層序	9
第2節 遺構・遺物の概要	13
第4章 検出遺構	19
第1節 II層基底面検出の遺構	19
第2節 III層上面の遺構	20
第5章 出土遺物	21
第1節 トレンチ出土の遺物	21
第2節 層位別の出土遺物	21
第6章 岩陰北側の遺構と遺物	39
遺物観察表	41
第7章 自然科学分析	50
第1節 岩井戸岩陰遺跡の自然科学分析	50
第2節 テフラ分析	50
第3節 放射性炭素年代測定	55
第4節 貝殻片化石	57
第8章 まとめ	58
参考文献	77
図版	
報告書抄録	

## 挿 図 目 次

図1 岩井戸岩陰遺跡位置図	1	図31 岩陰北側の遺構と遺物	40
図2 調査前現況地形図	2	図32 岩陰遺跡における柱状図	51
図3 岩井戸岩陰遺跡周辺の地形と地質	5	図33 火山ガラスの形態分類	51
図4 岩井戸岩陰遺跡断面模式図	6	図34 岩陰遺跡における堆積物中の動植物組成	
図5 調査地周辺の遺跡地図	8		52
図6 東西方向南壁土層図	10	図35 火山ガラスの屈折率測定結果	53
図7 岩陰内の地形測量図（調査前）	11	図36 岩陰遺跡における火山ガラスの顕微鏡写真	
図8 岩陰内の地形測量図（調査後）	12		54
図9 遺構位置図	19	図37 岩井戸岩陰遺跡の貝殻片化石	57
図10 土坑・集石遺構	20	図38 土器組成図（破片数）	58
図11 トレンチ出土の遺物	21	図39 上器組成図（質量）	58
図12 II層出土の遺物①（II～IV期）	23	図40 押型文土器胎土中の岩片	59
図13 II層出土の遺物②（III～IV期）	24	図41 中世の上器組成図	61
図14 II層出土の遺物③（V期）	25	図42 近世の土器組成図	61
図15 III層出土の遺物①（I期）	27	図43 石器種組成図	62
図16 III層出土の遺物②（II期）	27	図44 土器の層位別出土状況	64
図17 III層出土の遺物③（III期）	27	図45 石器の層位別出土状況	64
図18 III層出土の遺物④（I期）	28	図46 調査前と調査後の地形図	65
図19 III層出土の遺物⑤（I期）	28	図47 時代別土器出土状況図①	66
図20 V層出土の遺物①（I期）	30	図48 時代別上器出土状況図②	67
図21 V層出土の遺物②（II期）	30	図49 時代別上器出土状況図③	68
図22 VII層出土の遺物（I期）	30	図50 石器種別出土状況図①	69
図23 IV～VI層出土の遺物（I期）	31	図51 石器種別出土状況図②	70
図24 VI層出土の遺物①	33	図52 石器種別出土状況図③	71
図25 IX～X層出土の遺物①	33	図53 早期前半の石器組成図1 (石核・剥片を含む)	73
図26 VII層出土の遺物②	34	図54 早期前半の石器組成図2 (石核・剥片を含まず)	73
図27 VI層出土の遺物③	35	図55 長良川流域周辺の地質図	74
図28 VI層出土の遺物④	36	図56 早期前半の石材組成図	75
図29 IX～X層出土の遺物②	37		
図30 IX～X層出土の遺物③	38		

## 表 目 次

表1 調査地周辺の遺跡一覧表	8	表26 堆積物の鉱物分析結果一覧	52
表2 岩井戸岩陰遺跡時期区分	13	表27 火山ガラスの屈折率測定結果	53
表3 石器石材識別表	18	表28 放射性炭素年代測定および歴年代 較正の結果	55
表4 トレンチ出土の土器	41	表29 土器類器種別集計表	58
表5 II層出土の土器①	41	表30 繩文土器集計表	60
表6 II層出土の土器②	42	表31 弥生土器集計表	60
表7 II層出土の土器③	43	表32 須恵器集計表	60
表8 II層出土の土器④	44	表33 古代土師器集計表	60
表9 III層出土の土器①	44	表34 灰釉陶器集計表	60
表10 III層出土の土器②	45	表35 山茶碗(北部系)碗類集計表	60
表11 V層出土の土器①	45	表36 山茶碗(北部系)皿類集計表	60
表12 V層出土の土器②	46	表37 山茶碗(南部系)碗類集計表	60
表13 VII-X層出土の土器①	46	表38 山茶碗(南部系)皿類集計表	60
表14 VII-X層出土の土器②	47	表39 中世陶器集計表	60
表15 岩陰北側の遺物	47	表40 中世土師器皿類集計表	60
表16 玉類觀察表	47	表41 中世土師器鍋類集計表	61
表17 II層出土の石器	48	表42 その他の土器集計表	61
表18 III層出土の石器	48	表43 古漸戸集計表	61
表19 IV層出土の石器	48	表44 青磁集計表	61
表20 V層出土の石器	48	表45 陶器類集計表	61
表21 VII層出土の石器	48	表46 磁器類集計表	61
表22 VIII層出土の石器①	48	表47 石器器種別集計表	62
表23 VIII層出土の石器②	49	表48 岩井戸岩陰遺跡層位別土器出土量 (点数)	63
表24 IX層出土の石器	49	表49 層位別石器出土点数集計表	63
表25 X層出土の石器	49		

## 写真図版

- 図版 1 1 岩井戸岩陰遺跡遠景（西から）、2 岩井戸岩陰遺跡全景（西から）  
図版 2 1 遺跡遠景（西から）、2 遺跡近景、3 テフラ分析部分土層、4 土層堆積状況、  
5 第1号集石造構、6 第2号集石造構、7 岩陰の様子、8 岩陰北側のトレンチ  
図版 3 1 トレンチ出土上の遺物、2 II層出土上の遺物①（II期）、3 II層出土の遺物②（IV期）  
図版 4 II層出土の遺物③（IV期）  
図版 5 II層出土の遺物④（III～IV期）  
図版 6 II層出土の遺物⑤（IV期）  
図版 7 II層出土上の遺物⑥（V期）  
図版 8 1 III層出土の遺物①（I期）、2 III層出土の遺物②（II期）  
図版 9 1 III層出土の遺物③（III期）と岩陰北側の遺物、2 III層出土上の遺物④（I期）  
図版10 1 V層出土上の遺物（I期）、2 褐層出土の遺物（I期）  
図版11 1 IV～VII層出土の遺物①（I期）、2 IV～VII層出土の遺物②（I期）  
図版12 1 褐層出土の遺物①（I期）、2 褐層出土の遺物②（I期）  
図版13 1 褐層出土の遺物③（I期）、2 褐層出土の遺物④（I期）  
図版14 IX～X層出土の遺物①（I期）  
図版15 IX～X層出土の遺物②（I期）  
図版16 1 石材識別表の石材 1、2 石材識別表の石材 2

## 挿図写真図版

- 写真 1 調査前近景  
写真 2 調査区伐採作業風景  
写真 3 発掘調査作業風景  
写真 4 現地説明会の様子  
写真 5 S-1群  
写真 6 S-2群  
写真 7 S-4群  
写真 8 Z-1群  
写真 9 Z-3群  
写真10 C-1群  
写真11 石器  
写真12 刀器  
写真13 粗製刀器  
写真14 碓器 1  
写真15 碓器 2  
写真16 磨石  
写真17 火打ち石

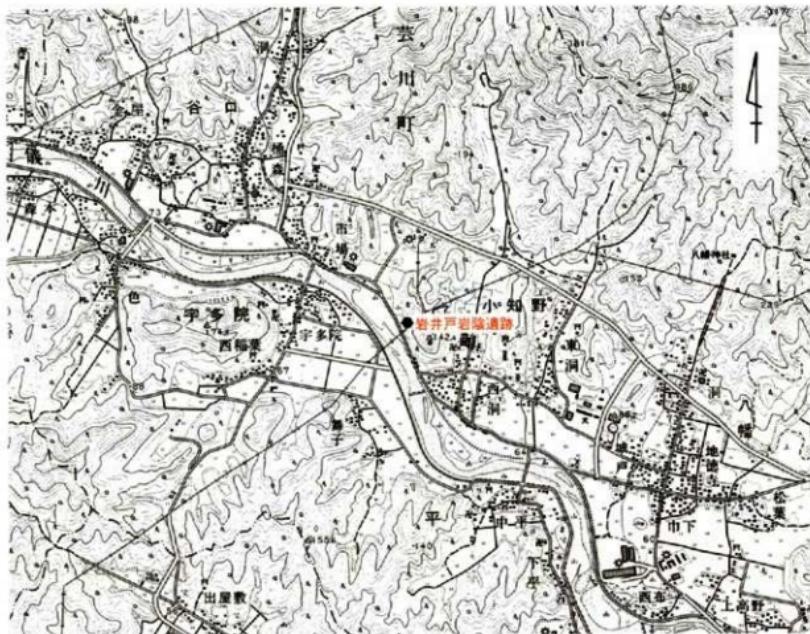
## 第1章 調査の経緯

### 第1節 調査に至る経緯

岩井戸岩陰遺跡は、岐阜県武儀郡武芸川町谷口字岩井戸、小知野字西屋敷地内に所在する。武儀川の左岸に面した部分にチャート質山塊があり、ここに崩壊疊によって形成された岩陰および前面の平坦面が形成されている。岐阜県基盤整備部美濃建設事務所では、この地に道路拡張のための一般国道418号道路改良工事を計画した。

この改良工事に先立って、岐阜県基盤整備部建設管理局美濃建設事務所から岐阜県教育委員会に工事計画等が示された。このことから、道路建設区域内に周知の埋蔵文化財包蔵地として「改訂版岐阜県遺跡地図」(岐阜県教育委員会1990)に登録されている岩井戸岩陰遺跡が所在することが判明した<sup>1)</sup>。その後、岐阜県基盤整備部建設管理局美濃建設事務所と岐阜県教育委員会との協議を経て、2001(平成13)年に発掘調査、2002(平成14)年に整理作業を実施することとなった。

1) 岩井戸岩陰遺跡は、昭和45年南山大学によって2度の発掘調査が行われ、成果が報告されている(早川・梶山他 1973)。



国土地理院発行の2万5千分の1地形図「岩佐」を使用

図1 岩井戸岩陰遺跡位置図 (S=1/25,000)

## 第2節 発掘調査の経過と方法

### 1 調査期間

平成13年10月3日～平成14年1月31日

### 2 調査の経過

平成13年10月3日から調査区周辺の雑木の伐採を行い、平成13年10月5日に委託業者によって調査区及びその周辺1,100m<sup>2</sup>の現況地形測量を行った。南山大学の発掘調査部分（図7のAトレンチからEトレンチが相当する）は埋め戻されていたため、この土の除去を人力で行った<sup>3</sup>。その後層位を確認し、層位ごとに岩陰及びテラス部の掘削を進めた。この部分は表土層から遺物を包含していることが南山大学の調査<sup>2)</sup>から分かっていたため、表土層（I層）から人力掘削を行った。包含層は、5cmを丁寧に徐々に掘り下げた。

遺物の取り上げは、南山大学の発掘調査結果から出土量が少ないことが予想されたため、トータルステーションを用いた。最後に完掘状況地形測量を行い、作業を終了した。

以下、発掘調査日誌から抜粋して、調査経過を記述する。

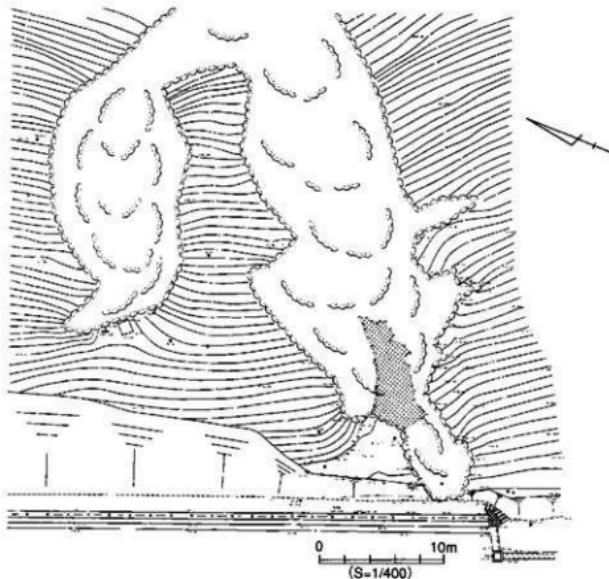


図2 調査前現況地形図 (S=1/400)

**調査日誌抄**

平成13年度

- 10月3日 調査区周辺の雑木の伐採作業。
- 10月5日 地形測量実施。調査区までの仮設道、調査区の防護柵設置。基準点測量。
- 10月15日 ベルトコンベア設置。
- 10月16日 人力による埋め戻し土除去作業開始。
- 10月30日 中央に土層観察用あぜ<sup>ロ</sup>を残してテラス部分および岩陰奥壁部分の掘削開始。
- 11月15日 愛知学院大学白石浩之教授現場指導。
- 12月3日 VI層とVII層の間層のテフラ分析を実施。
- 12月6日 霧層を中心に連続サンプリングを行い、テフラ分析を実施。
- 12月15日 現地説明会開催。
- 12月18日 愛知学院大学白石浩之教授現場指導。
- 12月21日 霧層・IX層（縄文早期包含層）の掘削開始。
- 1月15日 Xa層～Xi層まで掘削開始。
- 1月24日 土層観察用あぜの撤去。
- 1月28日 掘削終了。
- 1月29日 岩陰部分穴掘状況地形測量実施。
- 1月30日 ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影実施。
- 1月31日 発掘調査終了。

**3 遺跡・遺物公開**

平成13年12月15日に現地説明会を開催し、79名の参加を得た。

**4 遺物・調査記録の整理作業**

平成14年度に出土遺物・調査記録の整理作業を行った。作業の基本的な流れは次のとおりである。

遺物の洗浄→土器の硬化剤処理→遺物の注記→土器の接合→遺物の実測・観察表の作成→

造構・遺物実測図の製図→遺物の写真撮影→図版作成→遺物・調査記録の収納・保管

なお、本報告書本文の執筆は、上記の作業と並行して行った。

**5 発掘調査及び整理作業の体制**

	平成13年度	平成14年度
理事長	服部 卓郎	服部 卓郎
専務理事兼事務局長	成戸 宏二	成戸 宏二
常務理事兼経営部長	福田 安昭	福田 安昭
経営部次長兼経営課長	福田 照行	福田 照行
調査部長	武藤 貞昭	武藤 貞昭
調査次長	片桐 隆彦	片桐 隆彦
担当調査課長	柘植 卓伸	高木 徳彦
担当調査員	三島 誠	三島 誠
整理作業従事者	岩田のり子、春日井典子、高田桂子、広瀬みどり	

#### 4 第1章 調査の経緯

- 1) 調査区入り口は道路際のフェンスによって狭く、重機を搬入できなかったため、埋め戻し土の除去は人力で行った。なお、埋め戻し土は遺物が混入している可能性があったため、廃土処理の過程で遺物の有無を細かくチェックしている。第48・49中のトレーナ資料がこれに該当する。
- 2) 今回の調査に際し、南山大学調査の担当者であった南山大学早川正一教授に試掘箇所及び当時確認した層位の堆積状況を御教示していただいた。
- 3) 調査は、南山大学調査時の土層確認ライン（南山大学報告（早川・桝山他 1973）までは、A・B・C区南壁通しセクション図）をベルト状に残すかたちで掘削を進めていたが、崩落の危険性が生じたため、土層図作成後、壁面より上は撤去した。



写真1 調査前近景



写真2 調査区伐採作業風景



写真3 発掘調査作業風景



写真4 現地説明会の様子

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡周辺の立地と環境

武芸川町の北部は汾陽寺山、権現山、天王山といった500mを越す山々が連ね、南は200m以下の丘陵で囲まれる。街の中央部には、西北から南東にかけて武儀川が流れている(図3)。地質的には、武儀川河川沿い及び支流には沖積堆積物、それ以外の部分は中生代のチャート・泥岩・砂岩類が大勢を占める。一部、武儀川上流域には、僅かに火成岩層が貫入する。岩井戸岩陰遺跡は、武儀川左岸にあるチャート質の山塊に位置し、岩が重なり合うように崩落した結果に生じた空間を利用している。

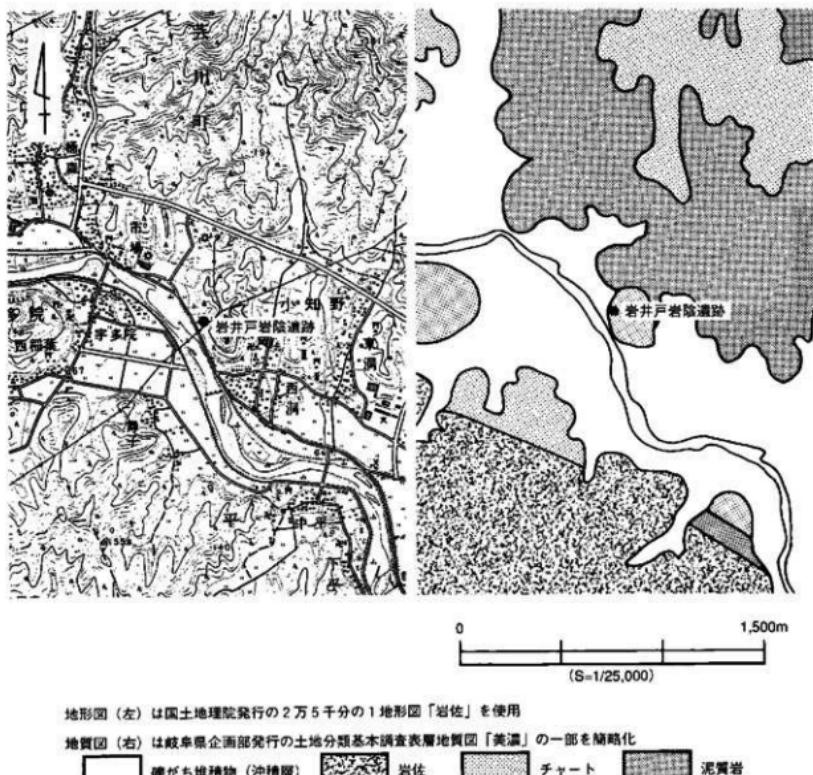


図3 岩井戸岩陰遺跡周辺の地形と地質

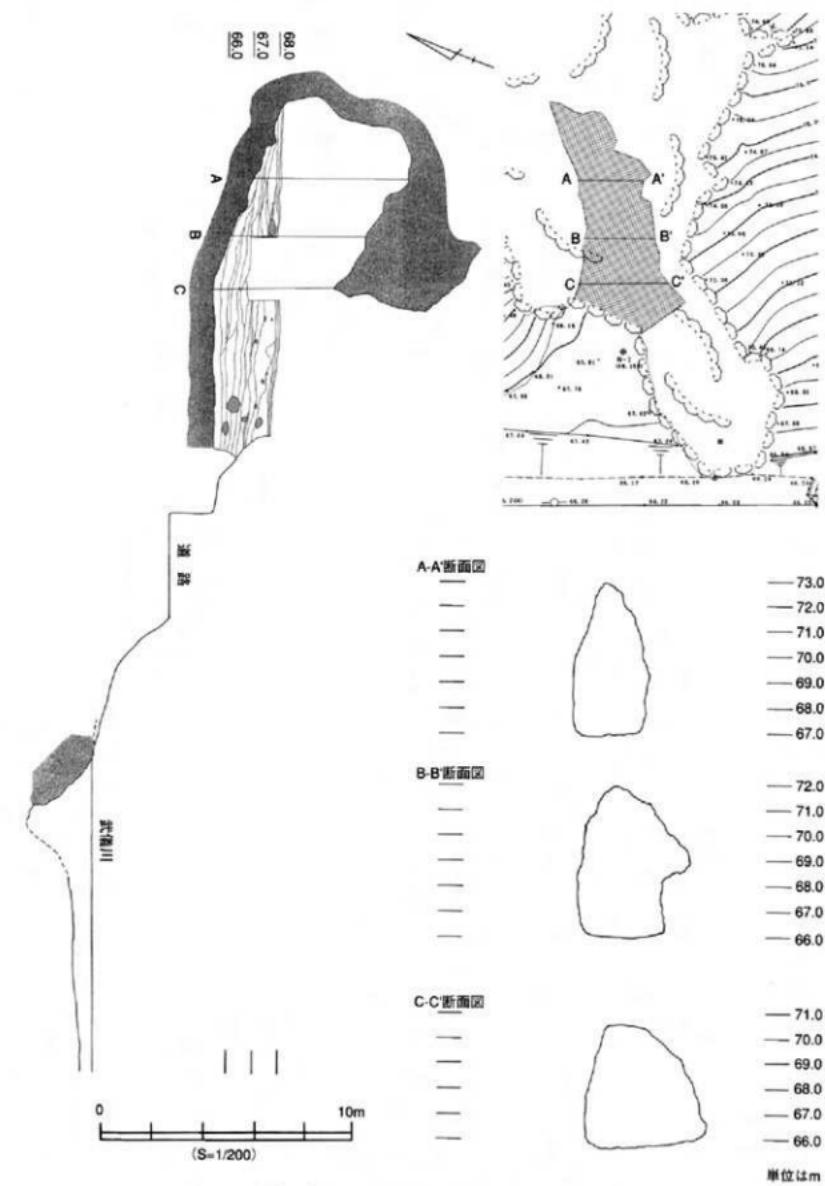


図4 岩井戸岩陰道路断面模式図 (S=1/200)

岩陰内の形状・規模をみるために、1/200の地形測量図をもとに岩陰を長軸方向に断ち割った図を作成した（図4）。

岩盤部分は、川に向かって徐々に下がることが理解できる。奥壁部分とテラス部分では、雨垂れラインで2mの比高差が生じている。武儀川沿いでは、チャートの岩盤が露呈した部分が確認でき、この岩盤に岩陰の基底面の岩が連なる可能性がある<sup>1)</sup>。天井部及び側壁の岩は、2つないし3つで構成されている。岩陰の短軸方向の断面の3ヶ所（雨垂れライン、中央付近、奥）の略測した図をみると、奥に入るほど幅が狭くなり、天井部が高くなることが分かる。

- 1) 岩陰の基底面上面には砂礫層が堆積していることから、岩盤が想定される。

## 第2節 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には、周知の遺跡が数多く点在しており、発掘調査によってその内容が明らかにされたものもある。ここでは、発掘調査によって内容が明らかになった町内の遺跡を中心に、時代順に概略を述べる。

旧石器時代の遺跡は、町内では発見されていない。

縄文時代では、西野田（八幡）遺跡、高野遺跡、西洞遺跡がある。西野田（八幡）遺跡は、縄文時代前期の北白川下層式の上器が主体で、若干量の諸模式の土器が伴う。石器は、石錐が製品の約60%近く占めることから、狩猟が主体をなしていたことが推測されている。この他には、採集資料ではあるが、本遺跡の東に隣接する西洞地区にある山の中腹で縄文時代前期・中期の遺物が土器・石器類が採集されたと報告されている（関高校社会研究部1959）。また、高野遺跡では中期の遺物が採集されたことが報告されている（関高校社会研究部1959）。

弥生時代では、本遺跡の他に西野田（八幡）遺跡・高野遺跡があるが、詳細は不明である。

古墳時代では、本遺跡の他、高野古墳、北屋敷古墳が報告されている。いずれも円墳で、埋葬主体部は横穴式石室である。出土遺物は、高野古墳では須恵器・土師器・鐵鏃、北屋敷古墳では直刀4本と6世紀から7世紀前半の須恵器、天神洞2号古墳は、鉄刀1本、6世紀から7世紀初頭の須恵器などが報告されている（武芸川町史編纂委員会1979）。この他に、数多くの古墳が存在し、現在でも地元の郷土史研究会の調査（武芸川町郷土史研究会1998）によって増加する傾向にある。

古代・中世の遺跡は、本遺跡の他、岩井・竹経塚のみであるが、「和名抄」にみえる武儀郡九郷のうち、跡部郷は当町跡部を遷称地としており、一部に条理造構が分布する。当町南部は皇室領宇田弘見庄に属し、中世からの由緒を伝える汾陽寺、恵利寺や八幡神社がある。また、地元研究者によって谷口・八幡地内で山茶碗等が採集されている。

近世の遺跡も本遺跡以外発見されていないが、近世以降、跡部・八幡村は旗本領、他は幕府領となり、元和五年（1615年）以後は尾張藩領となる。

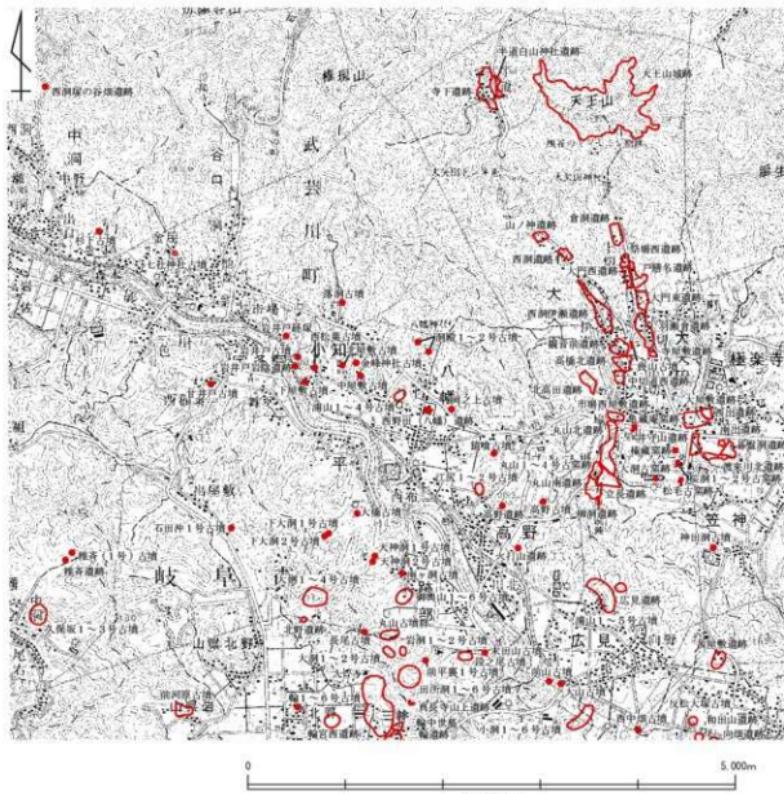


図5 調査地周辺の遺跡地図

表 1 線査地周辺の遺跡一覧表

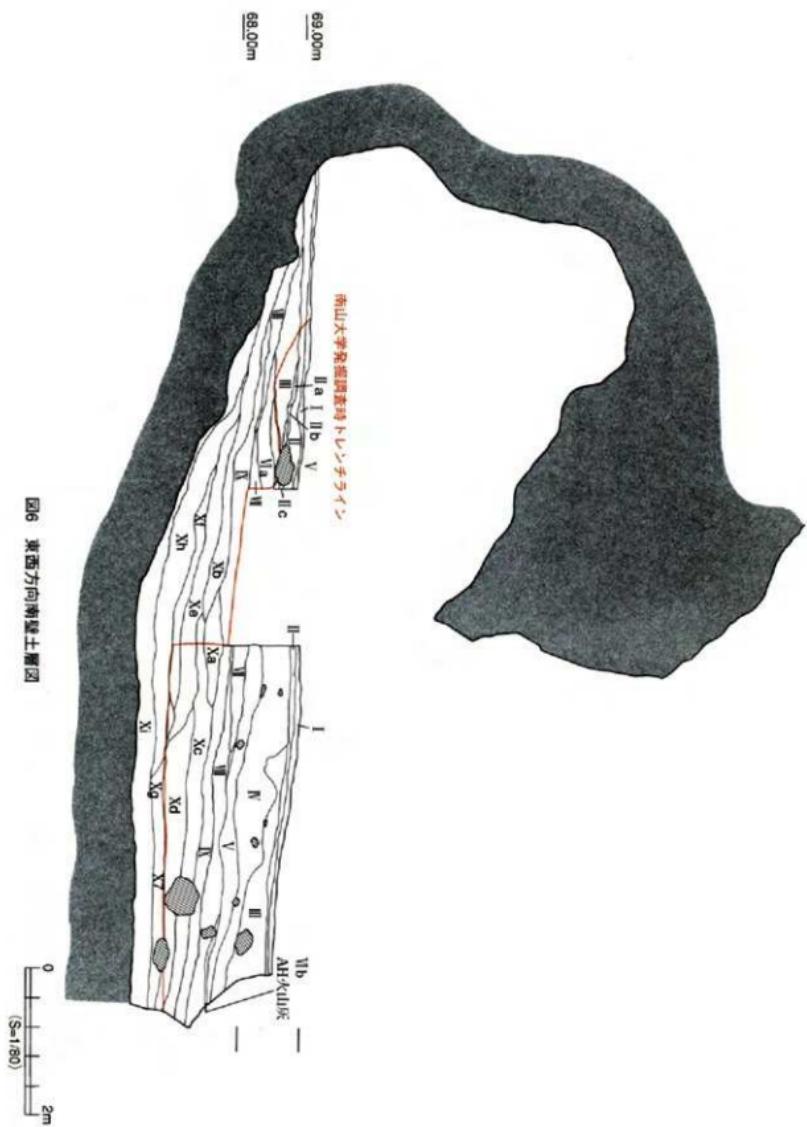
表1 調査地周辺の遺跡一覧表				
遺跡名	縄文時代	弥生時代	古墳時代	古代・中世
岩井戸岩陰遺跡	遺物あり	遺物あり	遺物あり	遺物あり
西野田（八幡）遺跡	遺物あり	遺物あり		
高野遺跡	遺物あり	遺物あり		
西洞遺跡	遺物あり			
高野古墳			遺構あり	
北星敷古墳			遺構あり	
天神洞古墳			遺構あり	
下星敷古墳			遺構あり	
中星敷古墳			遺構あり	
金峰神社古墳			遺構あり	
落洞古墳			遺構あり	
西松雲古墳			遺構あり	
甘井戸古墳			遺構あり	
岩井戸糸塚				遺構あり

## 第3章 基本層序と構造・遺物の概要

### 第1節 基本層序

調査はまず、南山大学発掘調査のトレンチ埋め戻し土を取り除き、その際に設定された土層観察用あぜを確認することから始めた。上層確認部分は、図7のA-A'ラインに相当するが、確認した結果、I～IV層までは南山大学が設定した層位と大きな違いは認められなかった。ただし、南山大学の発掘調査で掘削されなかった岩陰奥部分に厚くV層以下が堆積していることや、テラス部分で地山とした層が崩落疊を伴う層（X層）であり、疊下には1m近く黄褐色土層が堆積することなどの相違認められた。また、VI層とVII層の間には、赤褐色土の堆積が認められた。この層を中心にテフラ分析をした結果、アカホヤ火山灰の堆積であることが確認された（第7章第2節で詳しく述べる）。この結果をもとに上層から下層の順番に大きくI～X層に分層した。

- I層 : 7.5YR1.7/1 黒色シルト（粘りなし。直径20mm以下の亜角礫を多く含む。）表上であり、木根や植物根が多く混じる。
- II層 : 7.5YR3/2 黒褐色シルト（粘りややなし。しまりややあり。直径20mmから40mmの亜角礫を多く含む。）山茶碗・灰釉陶器を含む層である。
- III層 : 7.5YR4/4 褐色シルト（直径100mmから200mmの破碎礫を多く含む崩積性堆積物層。）テラス部分北側に厚く堆積する。
- IV層 : 7.5YR5/6 明褐色シルト（礫少なく、粘りなし。しまりあり。）
- V層 : 7.5YR3/2 暗褐色シルト（20mmから200mmの亜角礫を含む。）
- VI a層 : 7.5YR3/2 暗褐色シルト（20mmから200mmの亜角礫を含む。）V層よりやや暗い。
- VI b層 : 7.5YR4/4 褐色土（全体にばさばさした上で部分的に存在する。）アカホヤ火山灰を含む堆積層。
- VII層 : 10YR5/4 鈍い黄褐色シルト（粘りややあり。礫は少ない。）
- VIII層 : 7.5YR5/6 褐色土シルト（粘りあり。礫は少ない。）
- IX層 : 10YR4/6 褐色上シルト（粘りあり、しまりややあり。炭化物を少量含む。）
- X a層 : 10YR5/6 黄褐色シルト（粘り・しまりあり。直径10mmから100mmの角礫を少量含む。）
- X b層 : 10YR5/6 黄褐色シルト（粘り・しまりあり。直径100mmから1,000mmの角礫を多く含む。）
- X c層 : 10YR5/8 黄褐色シルト（粘りややあり。直径10mmから100mmの角礫を含む。）
- X d層 : 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト（斑状に10YR5/8が入る。）
- X e層 : 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト（斑状に10YR5/8が入る。直径10mmから100mmの角礫を多く含む。）
- X f層 : 7.5YR6/4 にぶい橙色シルト（直径10mmから1,000mmの角礫を多く含む。）
- X g層 : 10YR6/2 灰黃褐色粘土。
- X h層 : 10YR6/4 黄褐色粘土。斑状に10YR5/8が混じる。やや砂質。
- X i層 : 10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫土。10mmから1,000mmの円礫を多く含む。



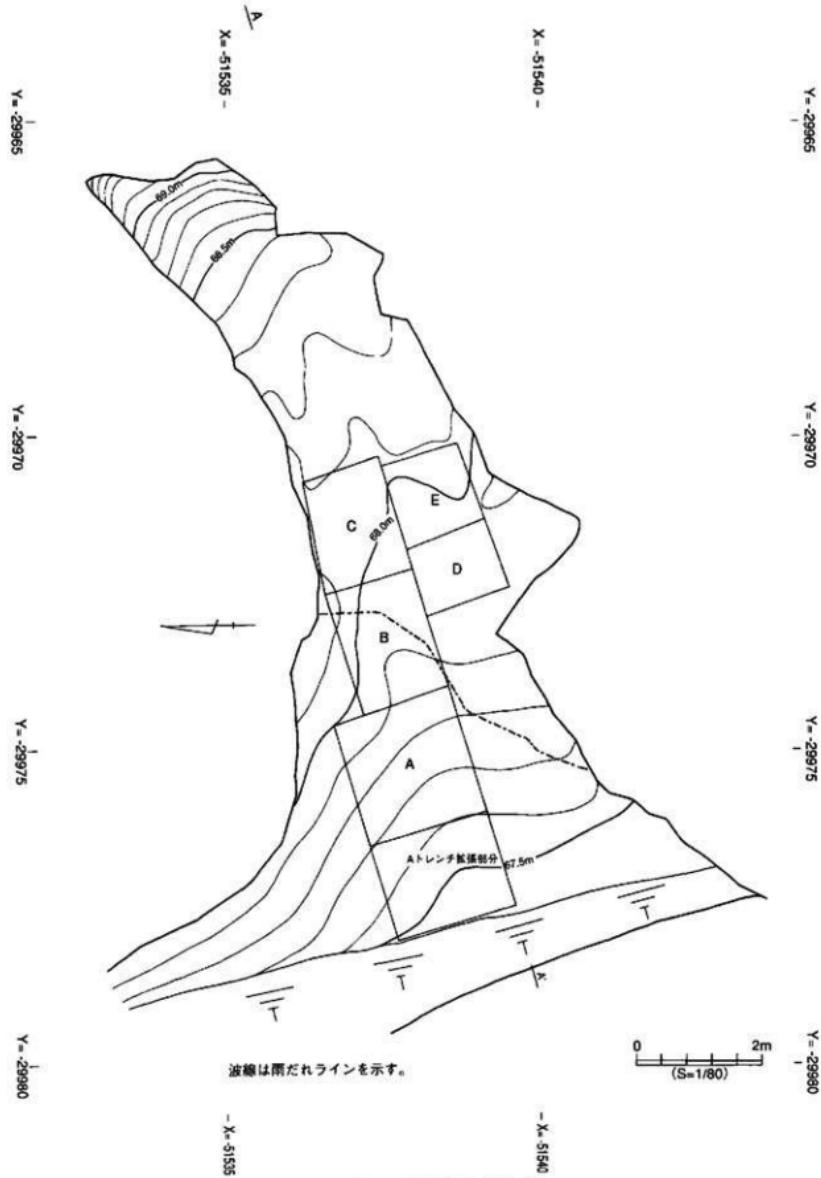


図7 岩陰内の地形測量図（調査前）

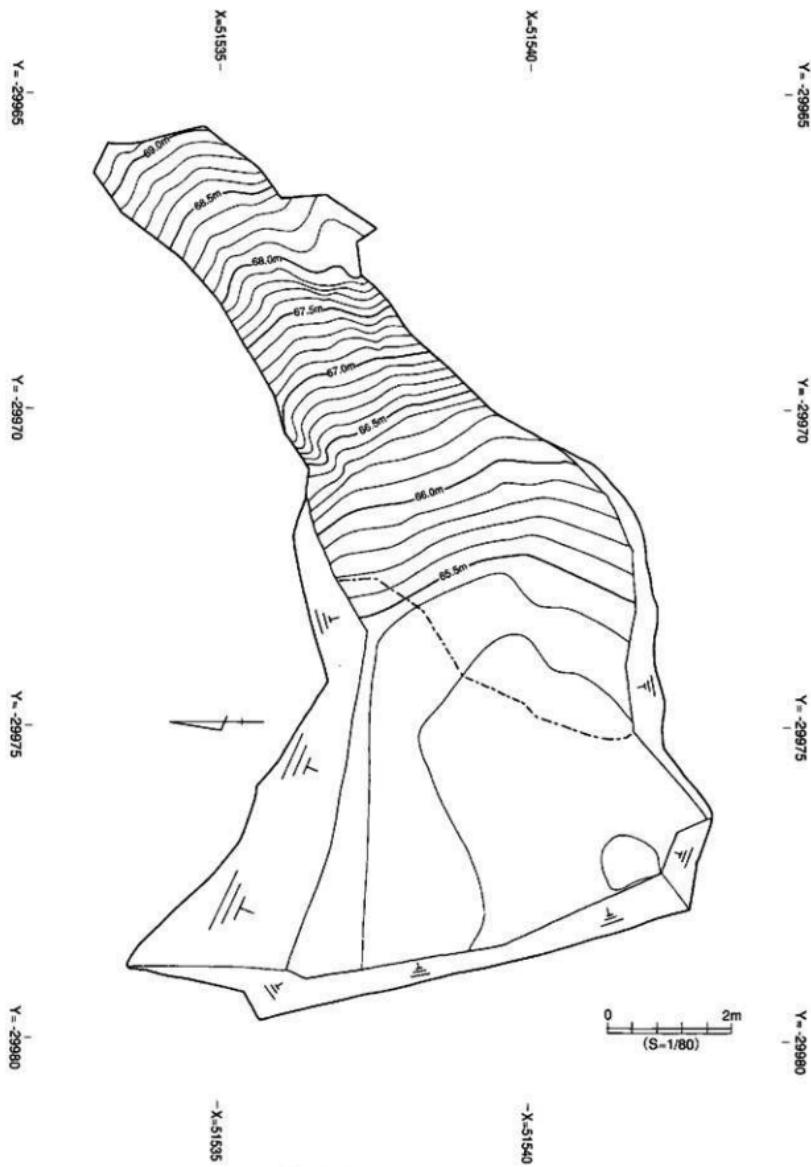


図8 岩陰内の地形測量図（調査後）

## 第2節 遺構・遺物の概要

### 1 遺構の概要

調査では集石遺構2基、土坑2基を確認した。なお報告書の遺構番号は、原則として発掘調査時のものを用いた。遺構の略号は、下記のものを用いた。

土坑・・・・S K

集石遺構・・・S I

### 2 岩井戸岩陰遺跡の時代区分について

出土した遺物の年代観に基づいて、Ⅰ期からⅤ期の5時期に大きく区別する。

縄文時代をⅠ期とした。この時期は、早期、前期、中期、後期、晚期の遺物が出土しているため、5期に細分した。

弥生時代をⅡ期とした。この時期の遺物は前期・中期・後期の遺物が出土している。

古墳時代をⅢ期とした。この時期の遺物は少ないが、須恵器のほか、玉類が見つかっており、比較的狭い範囲にまとまって出土している。

平安時代後期以降鎌倉時代までをⅣ期とした。

江戸時代以降をⅤ期とした。

表2 岩井戸岩陰遺跡時期区分<sup>1)</sup>

時期	小時期	時代区分・土器編年への対応	年代	層位別出土傾向 <sup>2)</sup>
Ⅰ期		縄文時代		
	第1期	早期前半（押型文）、早期後半（条痕文）	10000～6000年前	Ⅶ層、Ⅵ層
	第2期	前期	6000～5000年前	Ⅴ層
	第3期	中期	5000～4000年前	Ⅴ層
	第4期	後期	4000～3000年前	Ⅲ層、Ⅴ層
	第5期	晩期	3000～2400年前	Ⅱ層、Ⅴ層
Ⅱ期		弥生時代		
	第1期	I様式	紀元前5～4世紀ごろ から3世紀後半	Ⅲ層
	第2期	Ⅲ様式 貝田町期		
	第3期	Ⅳ様式 高藏期		
Ⅲ期		古墳時代から奈良時代	3世紀後半から8世紀末	Ⅱ層、Ⅲ層
Ⅳ期		平安時代（折戸53号窯式）から鎌倉時代（大洞東1号窯式）まで	10世紀前半～	Ⅱ層
Ⅴ期		江戸時代	16世紀前半以降	Ⅱ層

1) 上記表中の年代のうち、ⅠからⅢ期までは（日本第四紀学会1992）をもとに作成した。研究者によって見解が異なるので、目安として参照されたい。

2) 層位別出土傾向の欄には、各時期ごとに出土量が多い層を記した。詳しくは、第8章で述べているので参照されたい。

### 3 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、約6,078点である。このうち、土器類2,630点、石器類3,448点を数える。

土器類は、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、山茶碗、中世・近世陶器と広範な時期に及ぶ。各時期の遺物は、概ね層位的に出土している。

石器類は、弥生時代の有茎石錐、古墳時代の管玉・小玉、近世の火打ち石以外は、すべて縄文時代の遺物である。縄文時代の石器は、石錐、石錐、刃器、打製石斧、磨製石斧、石錐、連続的な剥離痕を有する剥片（略号をRFとする）、微細な剥離痕を有する剥片（略号をUFとする）、剥片・碎片類、石核、礫器、磨石、敲石、石皿が出土している。

遺物は、まず種類・器種ごとに分け、土器は接合作業・個体識別を行った。なお、各遺物の分類、名称、年代観は既存の報告・研究成果に依拠している。以下、時期別にその概要を記す。

#### ① I期の遺物（縄文時代）

縄文土器は、各小期（早期：S1～7群、前期：Z1～4群、中期：C1～3群、後期：K1～3群、晚期：B群）と型式不明（a～e類）に分け、分類した。

S-1群土器<sup>1)</sup>は、平行四辺形の押型文を有する土器で、大川式新段階から神宮寺式新段階に相当する。いわゆる萩平タイプといわれるもので、胎土中に石英・長石を多く含んでいる。

S-2群土器は、舟形状の押型文を有する土器で、いわゆる大川式に相当する。S-1群土器より粒は深い。S-1群土器と同様に胎土に長石・石英を多く含む。

S-3群土器は、山形の押型文を有する土器で、いわゆる樋沢式および細久保式に相当する。胎土は緻密でS-1群土器S-2群土器と比べ長石が少ない。

S-4群土器は、条痕地に爪形文を直線状に施すもので、柏畠式に相当する。胎土中に纖維を含み、器厚は約9mmと厚い。

S-5群土器<sup>2)</sup>は、明らかに早期に相当するが、型式不明のものをまとめた。a類は無文の胴部片で、胎土中に纖維を含まないもの、b類は無文のもので、胎土中に纖維を多く含むものとした。

Z-1群土器は、貝殻による条痕文のみを施している土器。

器厚は5mm～6mmと薄く、胎土に纖維を含まない。口縁部下には刺突を直線状に施す。

Z-2群土器は、器表面に指頭圧痕を多く残す土器。器壁は5mm～6mmと薄く、胎土中に纖維を含まない。口縁部下には刺突を直線状に施す。

Z-3群土器は、3字状および逆C字状の連続爪形文を施す土器。器壁は4mm～5mmと薄い。北



写真5 S-1群



写真6 S-2群



写真7 S-4群

白川下層Ⅰb式に相当する。a類を3字状の連続爪形文を有する土器、b類を逆C字状の連続爪形文を有する土器に細別した。

Z-4群土器は、突帯文と縄文を併用する土器で、突帯上に刻みを刻みをもつ。器壁は5mm~6mmと薄い。北白川下層Ⅱc式に相当する。

Z-5群土器は、縄文を地紋として逆C字状の連続爪形文を施す土器。器壁は6mm~8mmとやや厚い。

Z-6群土器は、北白川Ⅱa式からⅢ式にともなう縄文を密に施す土器。器壁は4mm~5mmと薄いもの(a類)と6mm~8mmとやや厚いもの(b類)がある。

C-1群土器は、口縁部に連続爪形文を加えた隆帯を巡らすもの。北裏C1式に相当する。

C-2群土器は、地文として粗い燃りの縄文を施すもの。船元Ⅱ式に相当する。

C-3群土器は、隆帯に刻みをいれ、区画した中に沈線を施すもの。

K-1群土器は、磨消縄文を施す土器で、中津式に類似するもの。

K-2群土器は、3本の沈線間に磨消縄文を施すもの。後期前葉の福田KII式から四池式に相当する。

K-3群土器は3本の沈線を施すもの。

B群土器は、馬見塚式に相当する土器。

型式不明の無文土器は、胎土・調整の特徴から細分した。

a類<sup>3</sup>は胎土に2mm以下の長石・石英を多く含む。外面ともに指頭圧痕を残す。b類は、胎土に1mm以下の長石・石英を多く含む。内面に指頭圧痕を残す。c類は、胎土に1mm以下のチャート礫を少し含む。外面にはミガキに近い調整を行うもの。d類は、胎土に1mm以下のチャート礫を少し含む。外面にはミガキに近い調整を行うもの。e類は、器表面が摩耗し、調整等が不明なもの。

石器は、V層からⅢ層にかけてまとまって出土した。縄文時代のものが大半だが、他に弥生時代の石器1点、近世のものと思われる火打ち石1点が出土した。

石器はすべてに対し、石材識別<sup>4</sup>を行った。識別の方法は、まず、石材ごとに分類作業を行い、さらに、チャートについては、色調、亀裂、クラックの入り方、線状・帶状・斑状の文様の入り方の違いによって細別した(表3)。

剥片石器の石材はチャートが大半を占め、下呂石(湯ヶ峰流紋岩<sup>5</sup>)、頁岩が若干量存在する。礫石器は、砂岩・流紋岩が主体である。



写真8 Z-1群



写真9 Z-3群



写真10 C-1群



写真11 石器

石器の分類は、以下のように分類した。

**石鎚**：両面加工によって一端が尖頭状を呈するもの。縄文時代早期の石鎚は、凹基無茎鎚で脚が長く、外反する。剥離は平行剥離を丁寧に行う。一方、弥生時代の石鎚は有茎石鎚で粗い調整を行う。

**石錐**：剥片の一端を錐状に調整するもの。先端部が摩耗しているほか、錐部側辺に微細な剥離痕を残すものを含めた。

**刃器**：剥片を素材とし、連続する二次加工により作出された刃部をもつもの。チャートを利用する小型ものと、泥岩を利用する大型で粗製のもの（粗製刃器とした）に分かれる。さらに前者は、片面加工で比較的幅の狭い急角度の刃部をもつタイプ（搔器）と、幅が広い直線的な刃部をもつタイプ（削器）に分けた。

連続的な剥離痕を有する剥片：刃器とするほど素材剥片を成形していないが、その縁辺に連続的な剥離調整を施している剥片をまとめた。

微細な剥離痕を有する剥片：剥片の縁辺に微細な剥離がある程度連続するもの、または、不規則であるが、ある範囲に多く認められる剥片をまとめた。

**剥片、碎片**：長幅とともに1cm未満のものを碎片、1cm以上のものを剥片と区別した。

**石核**：最終剥離面がネガティブな面であり、目的剥片を剥離していると考えられる石器。

**礫器**：円礫や分割礫などの一端あるいは一部に、粗い剥離を加えたものを一括した。

**磨石**：明確に擦痕が観察できる礫および、擦痕は観察できないが研磨行為によって形成したと想定しうる面が観察できる礫。

**敲石**：明確に敲打痕が観察できる礫。

**石皿**：擦痕が観察できる大型礫（手持ちではない）および擦痕は観察できないが研磨行為によって形成した想定しうる面が観察できる礫。

この他、磨製石斧・打製石斧・石錐については既存の分類（町田1993）に従った。

## ②II期の遺物（弥生時代）

弥生土器<sup>◎</sup>は、藤田英博氏による分類（藤田・高木2002）を参考にし、大別（Y-1～Y-3類）した。Y-1群土器は、



写真12 刀器



写真13 粗製刃器



写真14 磨器 1



写真15 磨器 2



写真16 磨石

胴部に貼付突帯と多条化した沈線をもつもの。胴部が張り、下半は左上がりの条痕となる。美濃I～3様式の亜流遠賀川式と思われる。Y-2群土器は美濃Ⅲ様式のもの。調整により、斜めの条痕（a類）、タタキ痕（b類）に分けた。Y-3群土器は美濃Ⅳ様式のもの。調整により、細ハケ（a類）、横位の羽状条痕（b類）に分けた。

#### ③Ⅲ期の遺物（古墳時代）

須恵器<sup>1</sup>は、28点出土した。この時期の資料は数片のみの出土であるので、細分は行わなかった。週間分類（赤塚1990）高坏A1類ないしA2類に相当する有稜高坏1点と松河戸式の二重口縁壺1点、器種不明の土師器壺13点が出土している。石器類は、管玉・丸玉が出土している。

#### ④Ⅳ期の遺物（中世）

灰釉陶器は、包含層出土のものを一括した。伊勢型鍋は、概ね北村分類（北村1996a）を参考に、大類を行った。伊勢型鍋は、大半が小破片のため、口縁部と胴部に分け、口縁部を優先して分類を行った。口縁部資料は、やや外傾した頸部から外反している。端部は内湾し、器壁が薄いことからA5類のものと判断した。羽付釜は、概ね北村分類（北村1996b）を参考に分類を行った。羽釜の分類は、鍋A1類から鍋A4まであるが、本遺跡では、A4類が出土している。中世土師皿は、前期は小野木分類（小野木1997）、後期については井川分類（井川1997）に参考に分類を行った。

山茶碗は、南部系は藤澤分類（藤澤1994）、北部系は田口分類（田口1983）を参考に大別した。

#### ⑤Ⅴ期の遺物（近世）

陶磁器類<sup>2</sup>は『瀬戸市史 陶磁器篇6』（瀬戸市史編纂委員会1998年）の分類を参考にした。

この他、石器類の中に火打ち石を1点確認したが、器種認定の基準については、水野裕之氏の論文（水野2001）に従った。

- 1 東海地方に多いタイプで愛知県衣平C遺跡や、美山町九合洞穴で出土している。
- 2 脱土、器厚から、a類は押型文、b類は条痕文の胴部と考えられる。
- 3 同一個体と思われるもののうち、1片のみであるが、隆帯の一部と貼り付けた部分が剥がれてしまった部分の観察でき、隆帯は本来は波状に貼り付けていたと推定できる。
- 4 石材の識別は、藤岡比呂志（当センター職員）の協力を得た。
- 5 湯ヶ峰流紋岩には、黒色のガラス質流紋岩溶岩と多孔質、青灰色～赤色の流紋岩質溶岩からなる。
- 6 弥生時代の土器については、石黒立人氏の助言を受けたほか、松岡千洋（当センター職員）の協力を得た。
- 7 須恵器、山茶碗（北部系）については、澤村進一郎（当センター職員）の協力を得た。
- 8 山茶碗（南部系）、土師器、陶器類については、小野木学（当センター職員）の協力を得た。



写真17 火打ち石

表3 石器石材識別表

番号	石材	石材の特徴	図版番号
1	安山岩	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつき、円錐状の自然面を残すものが多い。	16-1
2	安山岩質 火成岩	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつき、円錐状の自然面を残すものが多い。長石・石英が目立つ。	16-2
3	安山岩	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつき、円錐状の自然面を残すものが多い。多孔質。大きな斑点状の結晶が分かるものが多い。	16-3
4	ドレライト	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつき、円錐状の自然面を残すものが多い。	16-4
5	流紋岩質 溶結凝灰岩	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつき、円錐状の自然面を残すものが多い。幅1cm前後の縦つばいレンズ状のものが見られる。	16-5
6	砂岩	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつき、円錐状の自然面を残すものが多い。部分的に泥岩片を含む。	16-6
7	泥岩	表面は概ね、灰白色から黄灰色。板状に割れやすい。円錐状の自然面を残すものが多い。	16-7
8	下呂石（湯ヶ峰 流紋岩）	暗灰色でガラス質。	16-8
9	安山岩	表面は概ね、灰白色。石質はざらつき、縫が入る。	16-9
10	安山岩（サスカ イト）	表面は概ね、灰白色から黄灰色。石質は全体にざらつく。	16-10
11	細粒凝灰岩	白系。微ね灰白色。石質は塊があり、剥離しやすい。	16-11
12	頁岩	概ね、灰白色から黄灰色。石質は表面がやや粉っぽい。	16-12
13	チャート	赤色系。部分的に石英質の白い縫が入る。石質は緻密であるが、部分的にクラックが入るものが多い。	16-13
14	チャート	乳白色。微ね灰白色。部分的に黒い縫が入る。	16-14
15	チャート	墨系。微ね青黒色。部分的に白い縫が入るものと黒い縫が直行するかたちで入るものがある。石質は緻密であるが、部分的にクラックが入るものがある。	16-15

## 第4章 検出遺構

### 第1節 II層基底面<sup>1)</sup> 検出の遺構

集石遺構1基を確認した。

集石遺構2（図10、図版2-6） 雨垂れ付近テラス北側で検出した。層序通りに堆積しており、III層が欠如している。

このため、IV層上面で検出したが、II層基底面の遺構とした。疊は拳大の円碟で構成される。疊間はII層とほぼ同じ土で満たされていた。碟を取り除き、遺構の掘形の有無確認を行ったが、検出されなかった。また、取り除いた碟はすべて洗浄し、被熱・破損・接合の有無を観察を確認したが、いずれも認められなかった。時期は埋土より遺物が出土していないが、層位から中世～近世の遺構と思

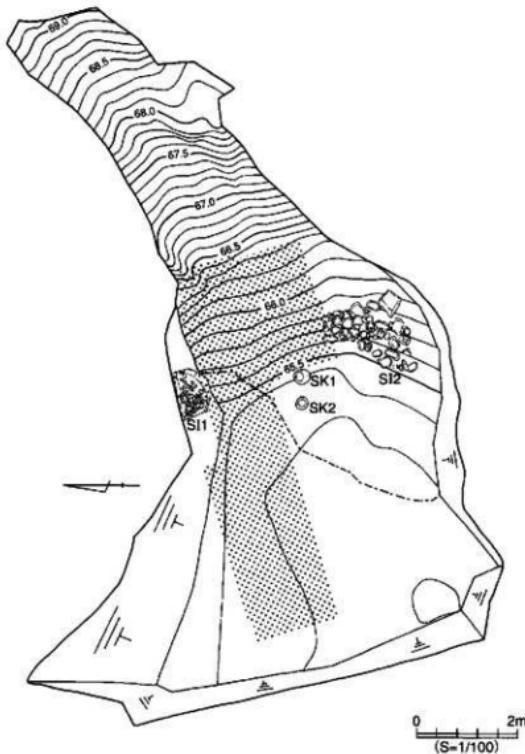


図9 遺構位置図

われる。

1)「基底面」の考え方については、趙哲済氏の定義（趙1983）に従った。

## 第2節 III層上面の遺構

集石遺構1基、土坑2基を検出した。

### 1 集石遺構1 (SI1) (図10)

岩陰内南部壁面に沿うように検出した。疊径は拳大の円碟から人頭大の円碟で構成される。疊間は、II層とほぼ同じ土で満たされていた。取り除いた疊は、すべて洗浄し、被熱・破損・接合の有無を確認したが、いずれも認められなかった。この遺構の上面では多くの山茶碗・伊勢型鍋が出土している。確實に伴うとは言い難いが、出土遺物から中世の遺構と思われる。

### 2 土坑1 (SK1) (図10)

雨垂れ付近岩陰内で検出した。遺物は出土しておらず、時期・性格は不明である。埋土の土質や堆積状態がSK2と同様の傾向を示す。SK2より伊勢型鍋が出土していることから、中世の遺構と思われる。

### 3 土坑2 (SK2) (図10)

雨垂れ付近岩陰内で検出した。遺構埋土から中世伊勢型鍋が14片出土した（図12-27）ことから中世の遺構と思われる。

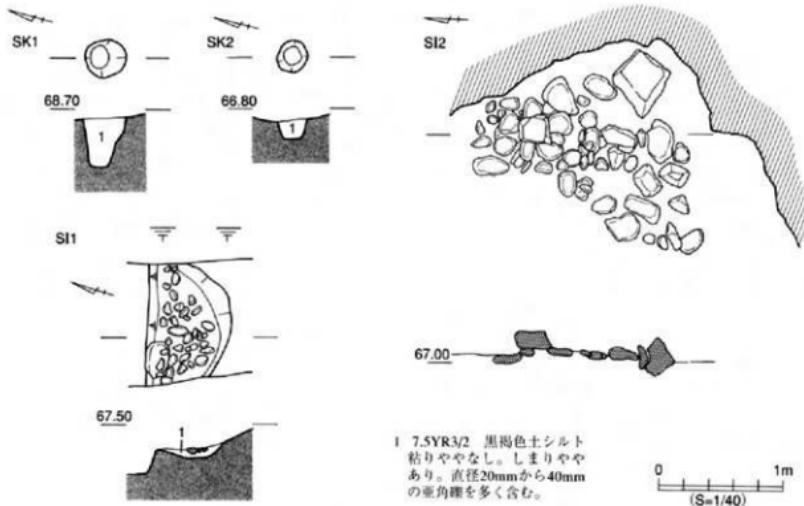


図10 土坑・集石遺構

## 第5章 出土遺物

### 第1節 トレンチ出土の遺物

#### (1) I期の遺物

##### 縄文土器 (図11-1~4)

1はS-3群土器。器片上方と下方に山形文を平行に転がす。2はZ-1群土器。器厚が6mm~7mmと若干厚めであるが、胎土中に纖維を含まないのでこの類とした。口縁端部、口縁部は横方向、口縁部下は斜方向に条痕調整がある。3はC-2群土器。底部が上げ底で、胴部外面に粗い燃りの繩文(RL)を施す。4はK-1群土器。口縁部内面に細かい繩文(LR)、その直下に円棒状工具の浅い平行沈線を施す。

#### (2) II期の遺物

##### 弥生土器 (図11-5~10)

5~10はY-3群土器。胸部上半資料で横位条痕、6から8は胸部下半資料で横位羽状条痕、9・10は底部付近資料で縦位条痕を施す。

#### (3) III期の遺物

##### 須恵器 (図11-11・12)

奈良時代のものと思われる須恵器の蓋(11・12)の他、壺、高坏の脚の細片が出土した。

#### (4) IV期の遺物

##### 青磁器 (図11-13)

13は、横田・森田分類(横田・森田 1978)の龍泉窯系青磁碗I-5頃で外表面部に綺麗弁文様を有する。13世紀中後半のものと思われる。

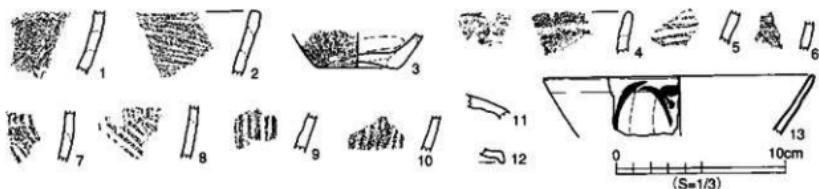


図11 トレンチ出土の遺物

## 第2節 層位別の出土遺物

### 1 II層出土の遺物

#### (1) II期の遺物

##### 弥生土器 (図12-14~21)

14~18はY-2群a類土器。外面を14~17は斜位に、18は縦位に条痕調整する。14は口縁部内面に円棒状工具による刺穴列を巡らす。19~21はY-3群b類土器。19は胸部下半資料で横位羽状条痕、20は胸部上半資料で横位条痕、21は底部付近資料で縦位条痕を施す。

## 石鏸（図12-22）

22は有茎の石鏸。比較的厚手の剥片を素材とし、粗雑に剥離調整を行う。先端部と基部を欠損する。

## （2）Ⅲ期の遺物

## 須恵器（図13-46～48）

5世紀末の杯蓋（46）と時期不明の高坏（47）、壺（48）が出土している。

玉類<sup>11</sup>（図13-43～45）

43は全体に淡緑色であるが、やや淡い乳白色の縞模様が入る碧玉製の管玉である。長さ36mm、太さ7mmとやや太身である。調整は全体的に丁寧に仕上げの研磨をしているが、作業方向の分かれる研磨痕<sup>12</sup>を残す。穿孔は両面で交点の貫通部分に段差が生じている。穿孔位置は上面・下面ともほぼ中心にある。44は全体に濃緑色の碧玉製の管玉である。長さ22mm、太さ9mmと太身である。よく仕上げの研磨をしているが、側面全体に作業方向の分かれる研磨痕を一部残す。また、下面の稜に残る調整による剥離を平滑にするため、研磨による面取りが一部されている。穿孔は片面で孔径の差は大きく、穿孔位置は上面・下面ともほぼ中心にある。45は濃緑色のガラス製の丸玉<sup>13</sup>である。側面に縦方向の筋状痕が入ることから管切り法<sup>14</sup>によって製作されたものと思われる。上下は研磨され、平坦で側面に丸みをもつ。

## （3）Ⅳ期の遺物

## 中世土師器（図12-23～40）

23～26・34～36は中世前期、37～40は中世後期の上師皿である。23<sup>15</sup>は柱状高台のあるロクロ成形の皿。高台は低く、体部は直線的に開き、浅い。調整は体部内外面に回転ナデを施し、底部には糸切り痕を残す。全体に焼が付着する。24<sup>16</sup>は手づくね成形の土師器皿。25・26<sup>17</sup>はロクロ成形の皿。いずれも底部には糸切り痕を残す。27～33は伊勢型鍋。いずれも器厚が薄く、外反する口縁をもつ。27の内面のハケ調整以外はすべて外面は指オサエ、指ナデ、内面は指ナデ調整がある。この他に内耳鍋（41）、羽釜（42）が出土している。

## 山茶碗（図13-46～68）

北部系山茶碗（46～60）、南部系山茶碗（61～68）が出土した。49・61・62は底部内面に摩耗した痕跡が観察できる。

## 陶器（図13-69）

69は挂ね鉢で、底部内面に摩耗した痕跡が観察できる。

## 青磁器（図14-71・72）

71・72ともいざれも龍泉窯系の椀。71は龍泉窯系青磁碗I-4類（横田・森田1978）で体部内面に飛雲文を、72は龍泉窯系青磁碗1-2a類で、体部内面に蓮華文を片彫りしている。

## （4）Ⅴ期の遺物

## 陶器（図14-73～81）

志野丸皿（73）、柳茶碗（74）、染め付け碗（75）、鉢茶碗（76）、瀬戸美濃上瓶蓋（77）、土瓶（78）、瀬戸美濃徳利（79）、瀬戸美濃鍋（80）、瀬戸美濃片口（81）などが出土した。

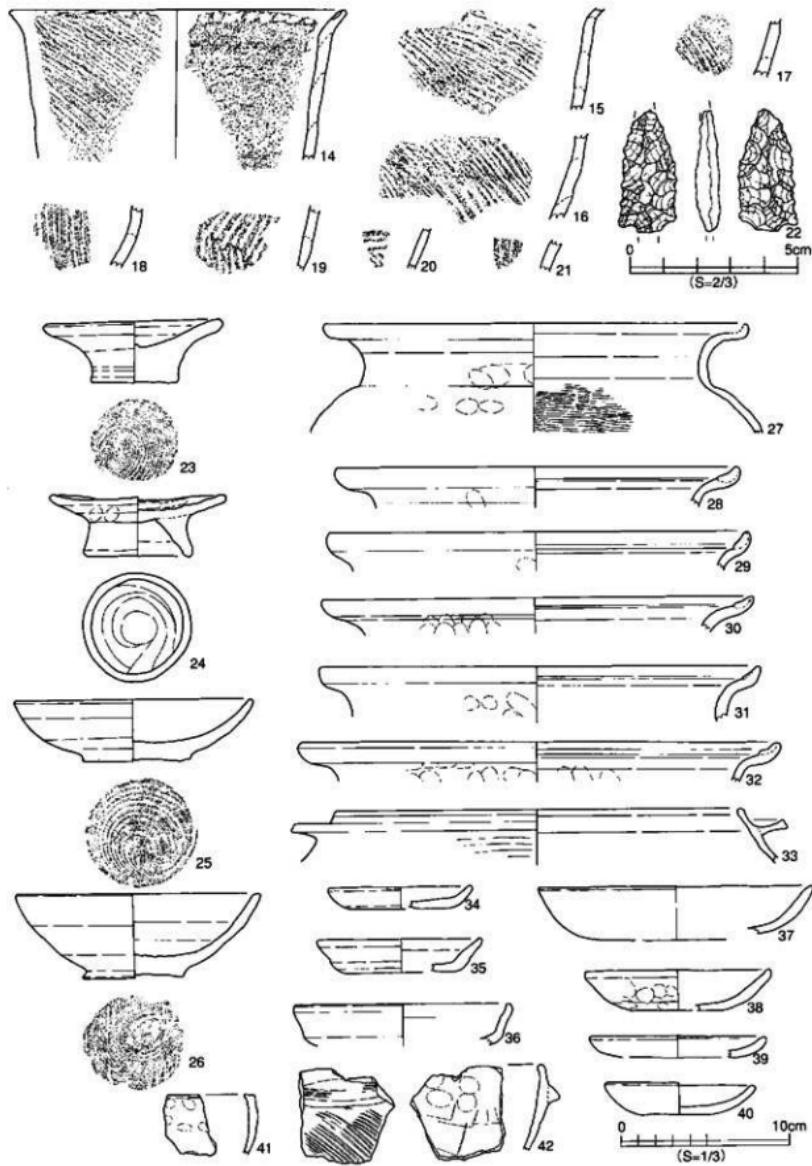


図12 II層出土の遺物① (II~IV期)

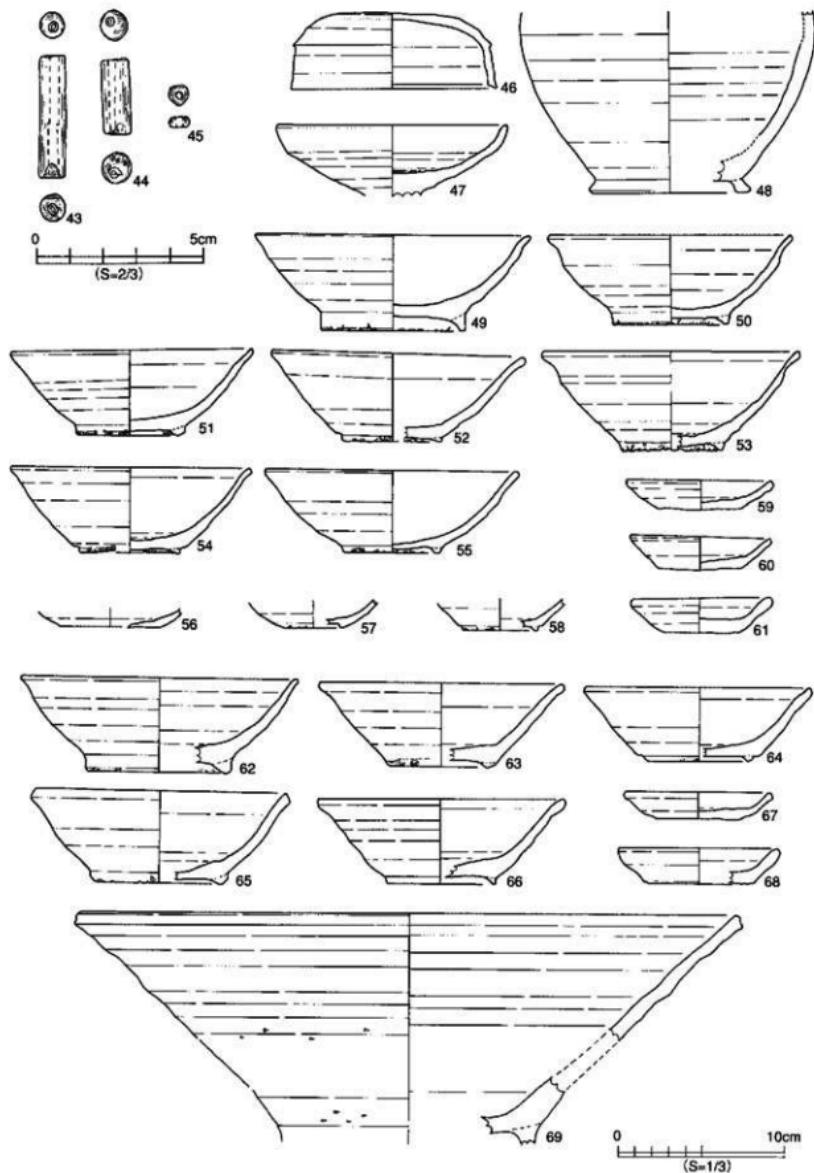


図13 II層出土の遺物② (III~IV期)

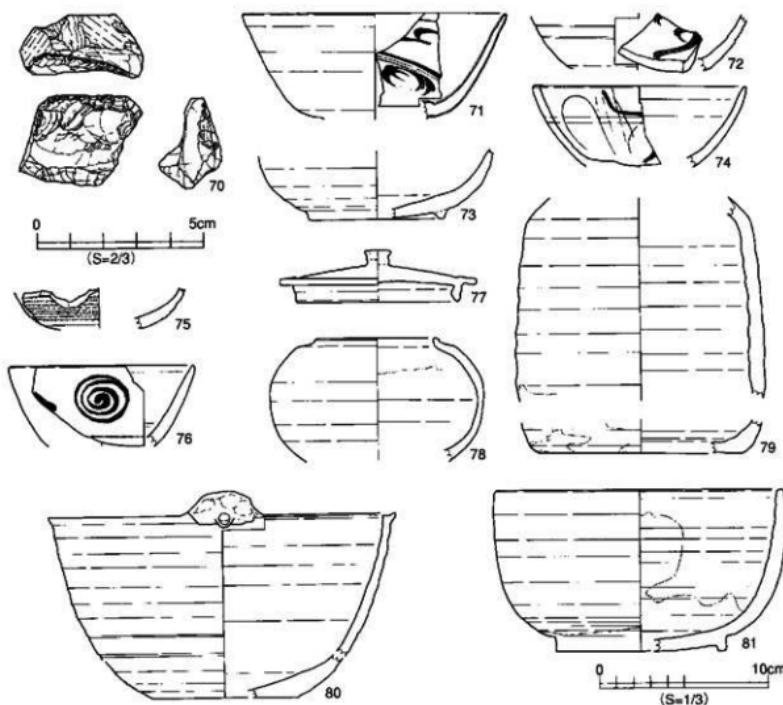


図14 II層出土の遺物③ (V期)

#### 火打ち石 (図14-70)

青灰色のチャートを利用している。縄文時代の石核と類似するが、鈍角の縁辺に微細な剥離痕を残すことから、火打ち石と判断した。

#### 2 III層出土の遺物

##### (1) I期の遺物

###### 縄文土器 (図15-82~93)

82はS-1群上器。器表面が荒れているため粒が分かりづらいが、原体を斜方向に施文する。胎土に長石を多く含む。83・84はS-3群土器。山形の押型文を有する土器で、いわゆる植沢式および細久保式に相当する。83は胎土が緻密である。口縁端部と口縁部に山形文を施す。84は胴部資料。横方向に転がす。85はZ-1群土器。貝殻による条痕調整を施す土器。器厚が6~7mmと若干厚く、胎土に纖維を含まない。半截竹管状工具で横位に刺突文を施す。86はZ-2群土器。器表面に指頭圧痕が多く残し、上方はやや外反する。器壁は5~6mmと薄く、胎土中に纖維を含まない。口縁部下には半截竹管状工具を縦に押しつけた刺突を直線状に施す。

87はZ-3群土器。3字状の連続爪形文を施す。器壁は4~5mmと薄い。88はZ-4群土器。突帯文と繩文(RL)を併用する上器で突帯上に刻みをもつ。突帯の一部は剥落している。器壁は5~6mmと薄く、北白川II式に相当する。89はZ-4群a類土器。器壁は4~5mmと薄く、羽状の繩文(RL)を横位に施す。90はC-2群土器。胴部外面に粗い捺りの繩文(RL)を施す。91はK-2群土器。胴部資料でややくびれる。3本の沈線間に磨消繩文(LR)を施す。92は型式不明無文土器c類。胎土に1mm以下のチャート礫を少し含む。口縁部を横方向に、胴部は縱方向にナデ調整を行う。93は型式不明無文土器d類。胎土に1mm以下のチャート礫を少し含む。外面にはミガキに近い調整を横方向に行う。

#### 石器(図18-119~133)

119は凹基無茎石鎌。120は背面に稜を持つ縱長剥片の長軸端を利用した石錐。121は縱長の石匙。122~124は刃器。刃部の形状は直刃(122)・弧状刃(123)・凹刃(125)のものが見られる。125~128は石鎌。紐掛け部分が打欠(125・126・128)のものと切目のもの(127)がある。129・130・132は敲石。130・131は長軸両端に、132は側辺に剥離痕・潰れ痕がある。131は粗製刃器。側辺に直線上の刃部を形成する。133は磨り石。表裏平坦面に敲打痕・磨面・側辺に磨面をもつ。

#### (2) II期の遺物

##### 弥生土器(図16-94~112)

94~96はY2群a類土器。94は横方向、95・96は斜めの条痕を施す。97・98はY2群b類土器。外面に細ハケ、タタキ痕を残す。99~111はY-3群a類土器。99~101は胴部上半資料で横位条痕、102~104、111は胴部下半資料で横位羽状條痕、105~110は底部付近資料で縱位条痕を施す。112はY-3群b類土器。底部外面に縱方向の細ハケで調整する。

#### (3) III期の遺物

##### 玉類(図17-113・114)

113は全体に濃緑色であるが、やや淡い緑色の縞模様が入る碧玉製の管玉である。長さ22mm、太さ7.1mmとやや太身である。調整は全体的に丁寧に仕上げの研磨をしているが、上面と側面全体に作業方向の分かる研磨痕<sup>2</sup>を残す。穿孔は片面で孔径の差は大きく、穿孔位置は上面・下面とも中心より外れる。114は全体に乳白色の緑色凝灰岩製の管玉である。長さ20mm、太さ5.7mmとやや細身である。よく仕上げの研磨をしているが、側面全体に作業方向の分かる研磨痕を一部残す。穿孔は片面で孔径の差は大きく、穿孔位置は上面・下面ともほぼ中心にある。

##### 土師器(図17-115)

115は壺口縁部が二重にあることから松河戸式と思われる。

##### 須恵器(図17-116・118)

116、118は杯身。116は7世紀前半のものと思われる。

##### 灰釉陶器(図17-117)

117は、碗。体部上半のみの資料であるが、口縁部がやや外反すること、釉薬は浸し掛けであることから折戸53窯式と思われる。

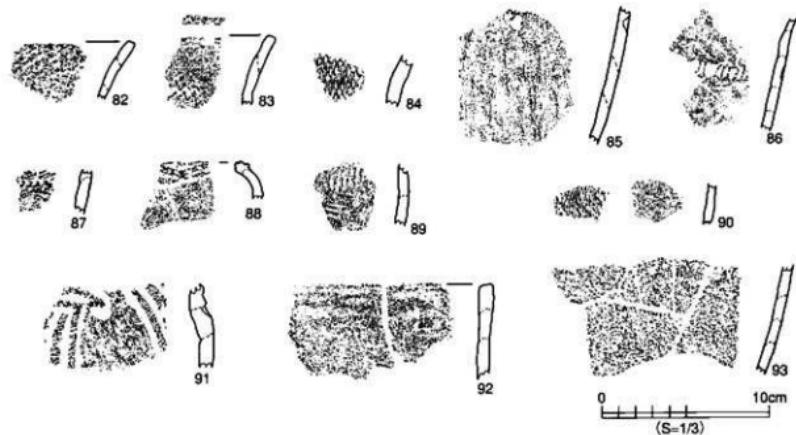


図15 目層出土の遺物① (I期)

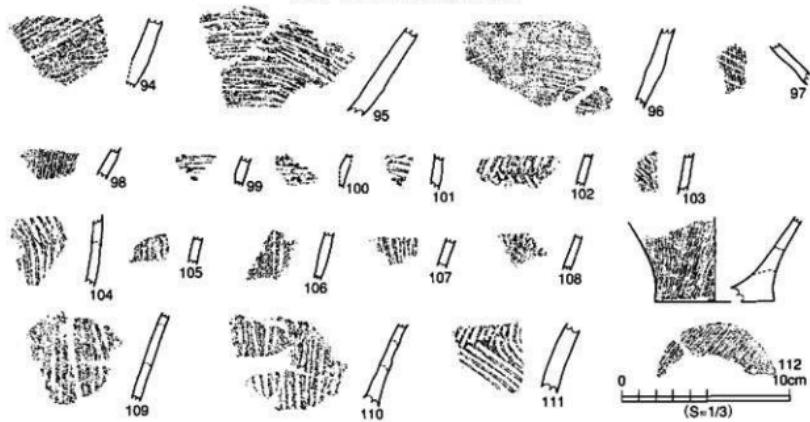


図16 Ⅲ層出土の遺物② (II期)

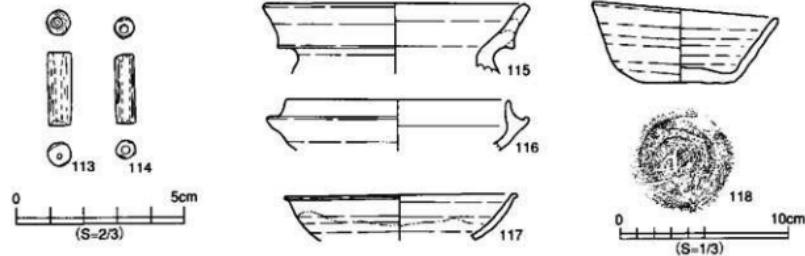


図17 Ⅲ層出土の遺物③ (III期)

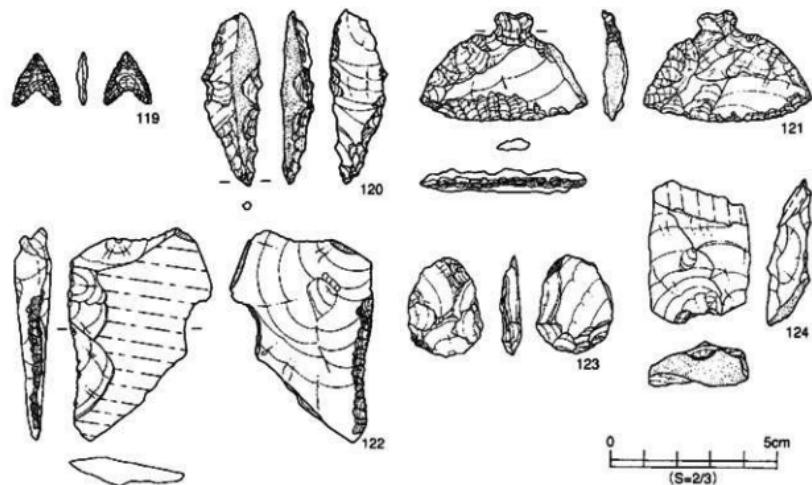


図18 Ⅲ層出土の遺物④（Ⅰ期）

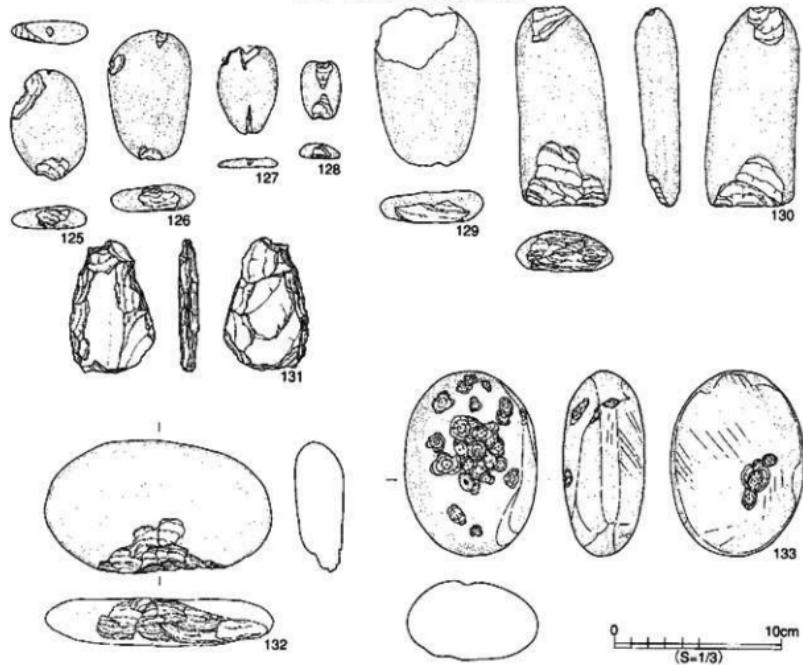


図19 Ⅲ層出土の遺物⑤（Ⅰ期）

### 3 IV層出土の遺物

#### (1) I期の遺物

石器（図23-160～162、164、166、167）

160・161は刃器。いずれも縦長の剥片の側辺に直線的な刀部を作る。162は右錐。横長剥片の末端に錐部を作る。164は粗製刃器。166は磨石で側辺に磨面を有する。167は打欠石錐。

### 4 V層出土の遺物

#### (1) I期の遺物

縄文土器（図20-134～147、149）

134・135はS-4群土器。条痕地に爪形を直線上に施すもので、柏畑式に相当する。134は口縁部資料。胎土中に纖維を含み、器厚は約9mmと厚い。口縁部は爪形文を横位に刻む。135は胴部資料。134と同様に口縁部は爪形文を横位に刻む。136～139、141はZ-1群土器。貝殻による条痕文を施す上器。136は口縁部資料。器厚が5mm～6mmと薄く、胎土中に纖維を含まない。外面は二枚貝による貝殻条痕で調整し、横位に半截竹管状の工具で刺突を施す。137～139は口縁部資料。139、141は口縁部下に、137・138は口縁端部と口縁下を半截竹管状の工具で刺突を施す。141は外面を赤彩する。140・142はZ-3群土器。140はa類。3字状の連続爪形文を施す。142はb類の口縁部資料で逆c字状の連続爪形文を施す。口縁端部を繩文（LR）を転がす。143はZ-5群土器。143は繩文（LR）の上に逆C字状の連続爪形文を施す土器。器壁は6mm～8mmとやや厚い。胎土や器厚などから前述のZ-3群b類土器と同一個体の可能性がある。144はZ-6群b類土器。144は器壁は6mm～8mmとやや厚く、繩文（LR）を密に施している。胎土や器厚などから、前述のZ-3群b類土器（142）と同一個体の可能性がある。

145・146はC-1群土器。145は口縁部に連続爪形文を加えた隆帯を巡らす。波状の突起を有し、頸部は屈曲する。胴部は隆帯で区画された中を繩文（RL）で充填している。146は口縁部に連続爪形文を加えた隆帯を巡らす。147はC-3群土器。147は隆帯に刻みをいれ、区画した中を斜めに沈線を施す。土器片錐の可能性がある。148はK-1群土器。波状の口縁部を有し、沈線間を繩文（RL）で充填する。149はK-3群土器。3本の沈線を施す。150はB-1群土器。晩期の馬見塚式に相当する。口縁部に円棒状工具によって平行沈線を3条引く。

石器（図23-163、165、168～170）

163は横長の石匙。165・172は敲石で表裏面・側面に敲打痕を残す。168から170は石錐。紐掛り部が打欠のもの（168・169）と切目のもの（170）がある。

#### (2) II期の遺物

弥生土器（図20-151～156）

151はY-1群土器。胴部に貼付突帯と多条化した沈線をもつ。胴部が張り、下半は左上がりの条痕となる。突帯状を指頭により刻む。美濃I-3様式の亜流速賀川式と思われる。

152～156はY-3群a類土器。152、155、156は、胴部下半資料で横位羽状条痕、153、154は底部付近資料で縦位条痕を施す。156は器厚、胎土、条痕幅などから111と同一個体の可能性がある。

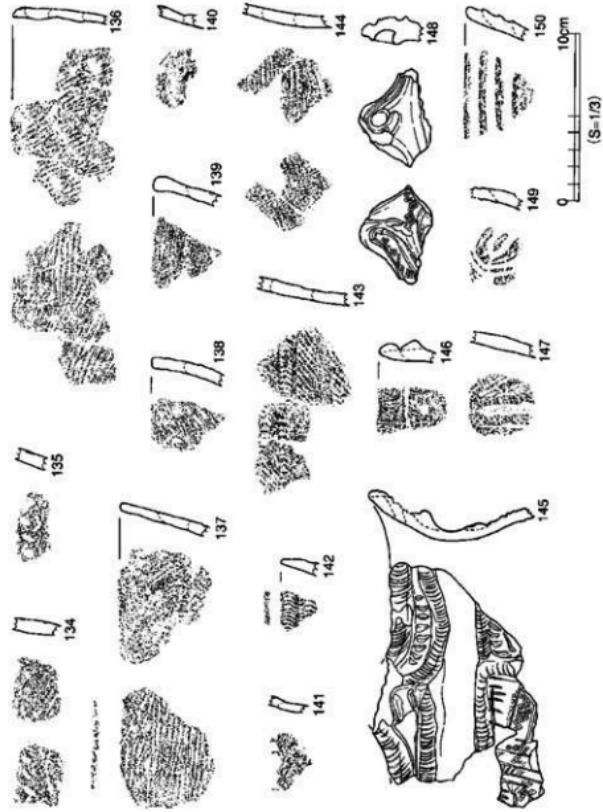


図20 V型出土の遺物①(Ⅰ期)

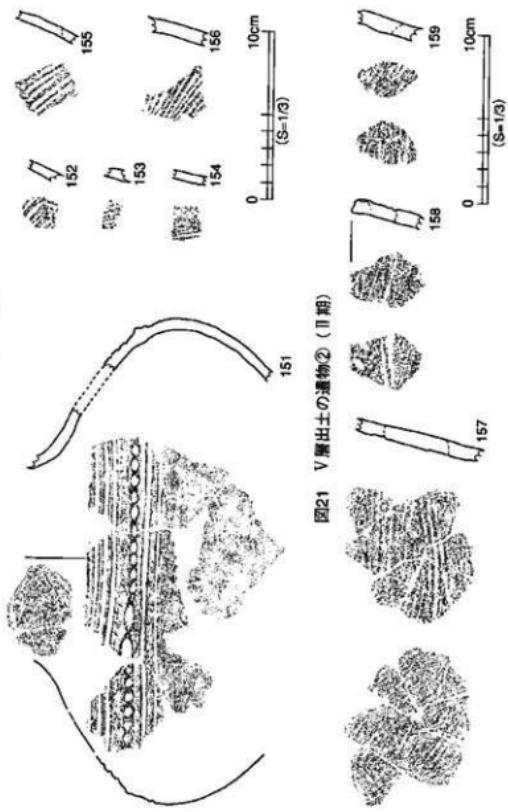


図21 V型出土②(Ⅰ期)

図22 W型出土の遺物(Ⅰ期)

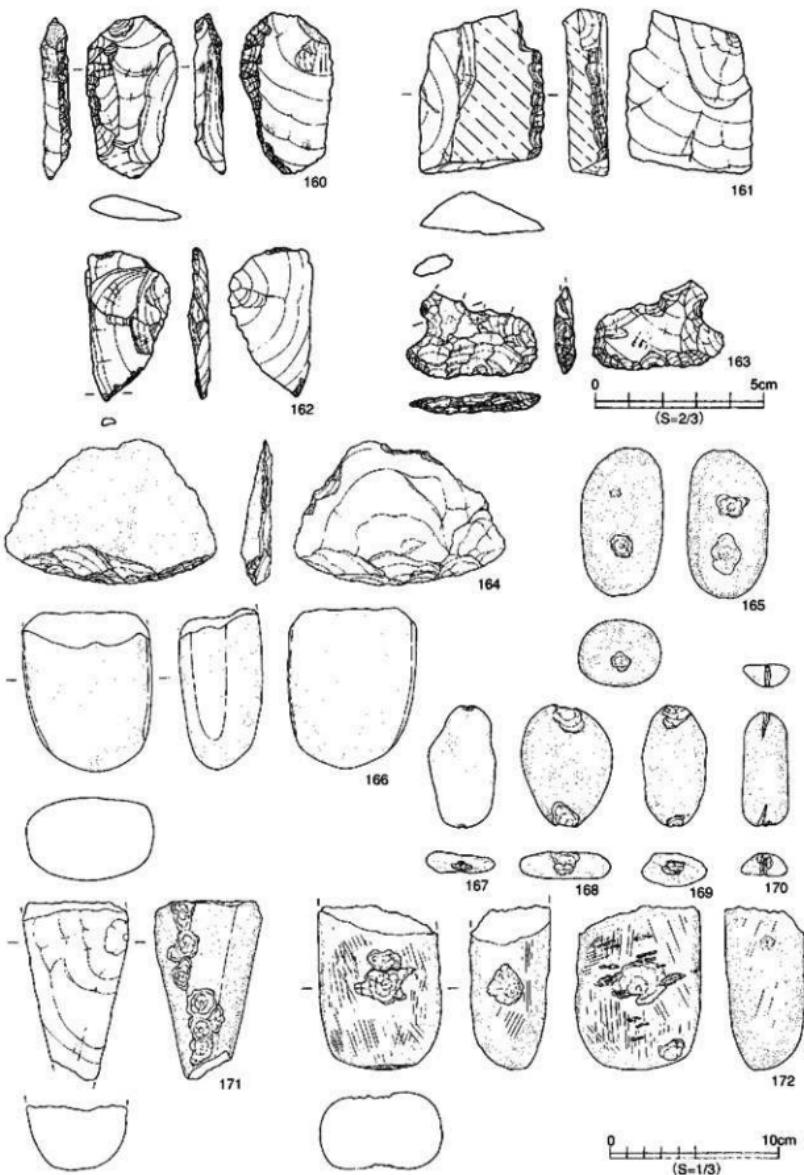


図23 IV～VII層出土の遺物（I期）

## 5 VI層出土の遺物

## (1) I期の遺物

## 縄文土器 (図22-157~159)

157~159はS-4群土器。条痕地に爪形を直線上に施すもので柏畠式に相当する。157は胴部資料。内面に横方向の条痕調整を行う。158は口縁部資料。胎土中に纖維を含み、器厚は約9mmと厚い。口縁部爪形文を横位に刻む。159は内面にヘラ状工具による水平な棱を残す。

## 6 VII層出土の遺物

## (1) I期の遺物

## 石器 (図23-171)

171は磨石。側辺に磨面を残す。

## 7 VIII層出土の遺物

## (1) I期の遺物

## 縄文土器 (図24-173~186)

173~179、181はS-1群土器。173~176、178、179は胴部資料。いずれも原体を斜めから縱方向に施文している。181は胴部上半の資料で縱方向に施文している。177は底部に近い部分で横方向に施文している。胎土が緻密で長石・石英を含む。175は器表面が荒れているため、粒が分かりづらいが、斜めから縱方向に施文する。胎土に長石を多く含む。180、182はS-2群土器。押型文の粒は深く、舟形状である。胎土に長石を多く含む。180は口縁部資料で口唇に刻みを入れる。横方向に施文する。182は胴部資料。縱方向に施文する。183~185はS-3群土器。山形の押型文を有する土器でいわゆる樋沢式および細久保式に相当する。183は口縁部資料。胎土が緻密で長石・石英を含む。口唇部と口縁部に山形文を転がす。184は胴部資料。横方向に転がす。185は底部資料。尖底部の一部に山形文を転がす。186はS-5群b類土器。尖底の底部片で胎土中に纖維を多く含む。

## 石器 (図26-190~199、図27-200・201、図28-202~207)

190~192は凹基無茎鎌。いずれも長身で脚はやや長めである。193、195~198は、刃器。刃部の形状は直刃 (195~197)・凹刃 (125) のものが見られる。199~201は石核。円盤を素材としている。199は縫面を打面とし、打面を固定しながら、剥片剥離作業を行う。剥離は作業面を左右にずらしながら作業をおこない、背面に長軸方向に沿った稜をもつ剥片を取る。200は並円碟を分割した面を作業面とする石核。199と同様に縫面を打面とし、打面を固定しながら、剥片剥離作業を行う。201は打面・作業面を転移しながら剥片剥離を作業を行う。202は打欠石錘。203は磨製石斧を転用した打製石斧。円盤素材の形状を変形することなく成形し磨製の刃部を作出し、刃部破損後、再度、基部に打製の刃部を作出している。204~206は磨石・敲石類。凹状のもの (204) と側辺に磨面を持つもの (205・206) がある。207は石皿。縫面をもつ。

## 8 IX層出土の遺物

## (1) I期の遺物

## 縄文土器 (図25-187)

187はS-2群土器。押型文の粒は深く、舟形状である。胴部資料で横方向に施文する。

## 石器（図29-208～209、図30-214～220）

208は石錐。剥片の一端に短い錐部を作り出すもの。209は刃器で直線的な刃部をもつ。214は磨製石斧。剥離・敲打・研磨を丁寧に行う。215・216は打製石斧。215は扁平な礫の側辺をあまり形を変えずに成形したもの。216は打製石斧としたが側辺にも刃部を形成することから刃器の可能性がある。217は叩石。218は礫器で左側辺に直線的な刃部を作る。219は磨石。表裏面に磨面を残す。220は粗製刃器。直線的な刃部には長軸方向に擦痕が残る。

## 9 X層出土の遺物

## (1) I期の遺物

## 繩文土器（図25-188・189）

188はS-2群上器口縁部資料で口唇に刻みを入れる。189は時期不明無文土器a類。底部資料で外面上に葉脈文を残す。胎土に2mm以下の長石・石英を多く含み内外面ともに指頭圧痕を残す。

## 石器（図30-210～213、221～225）

210は凹基無茎錐でやや脚が長い。211・212は刃器。薄手の剥片を素材とし、側辺に直線的な刃部を作出している。213は背面に稜を持つ縱長剥片の長軸端を利用した石錐で短い錐部をもつ。221は粗製刃器。形状は220とはほぼ同じであるが擦痕は残らない。222は打製石斧。扁平な礫の形状をあまり変えずに成形している。223は蔽石。224は小型の磨製石斧。225は側辺に磨面をもつ磨石である。

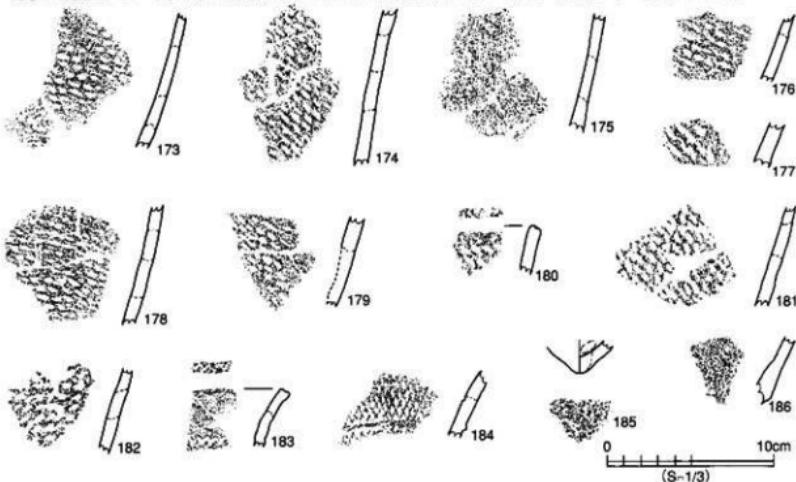


図24 X層出土の遺物①

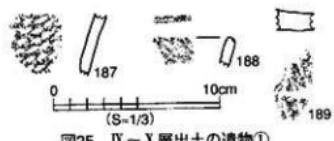


図25 IX-X層出土の遺物①

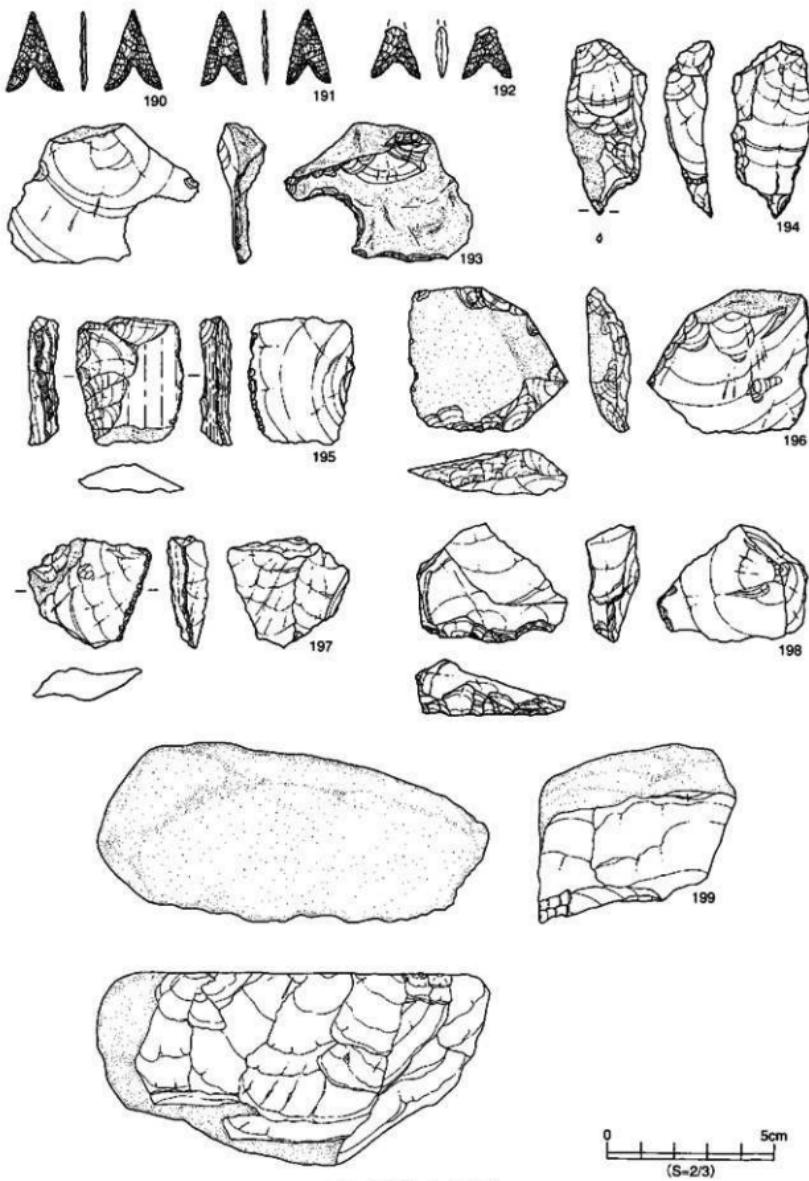
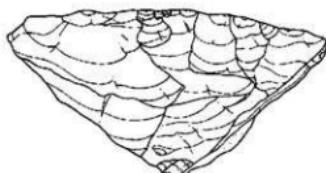
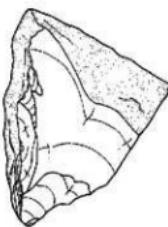
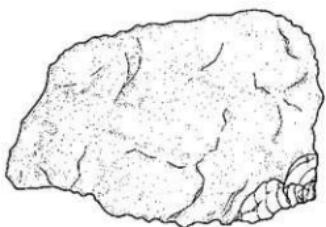
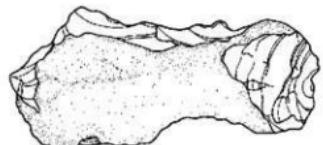
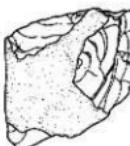
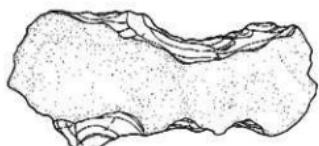


図26 2層出土の遺物②



200



201

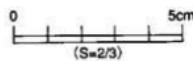


図27 墓層出土の遺物③

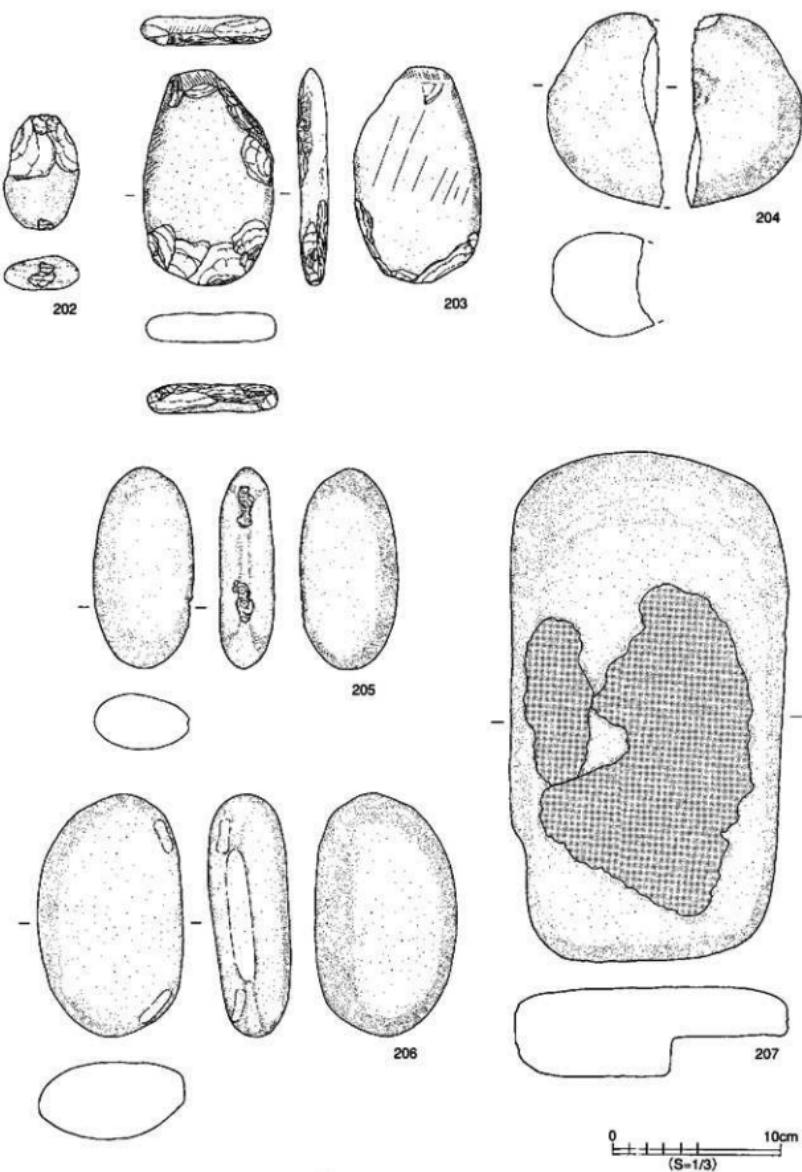


図28 4層出土の遺物④

## 注

- 1) 「調整」や「研磨」や「仕上げ」等の用語の定義については寺村氏の論文（寺村2001pp202～230）による。
- 2) 作業方向の分かる研磨痕は、仕上げ時の研磨による調整痕ではなく、穿孔前に平底石で研磨調整を行った結果、生じた調整痕と考えられる。
- 3) 小豆と丸玉の識別の基準については、中森1999pp469～475による。
- 4) 卷付け法と管切り法の識別の基準については、中森1999pp469～475による。
- 5) 小野木分類のⅠ類。この他に佐藤氏（佐藤1986）や八幡氏（八幡2001）によって分類・編年がなされている。これに従えば、23は佐藤分類のA 2類、八幡分類のⅠ A類、11世紀から12世紀前半のものと思われる。
- 6) 小野木分類ではA 2 g類。佐藤分類のA 6類、11世紀から12世紀のものと思われる。
- 7) 25・26とともに小野木分類のⅠ類。佐藤分類ではA 1類、11世紀から12世紀のものと思われる。

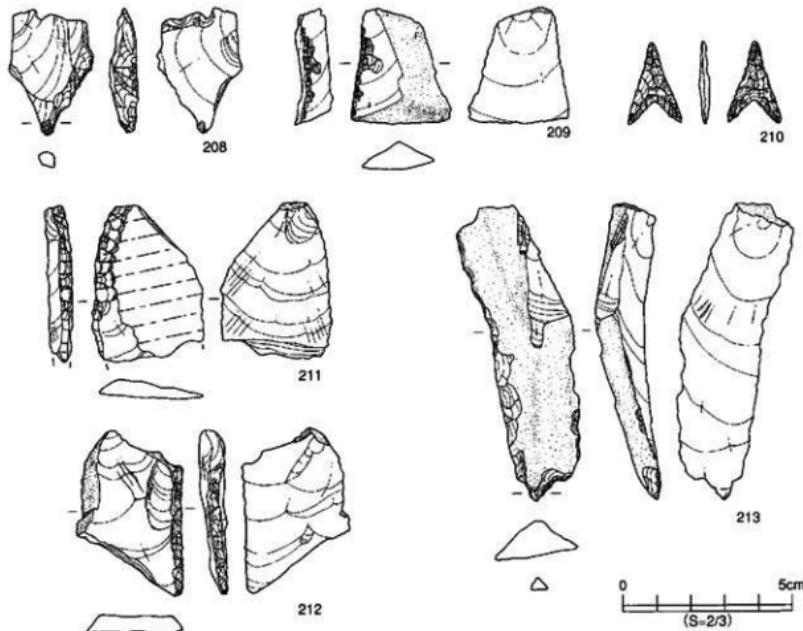


図29 IX～XI層出土の遺物②

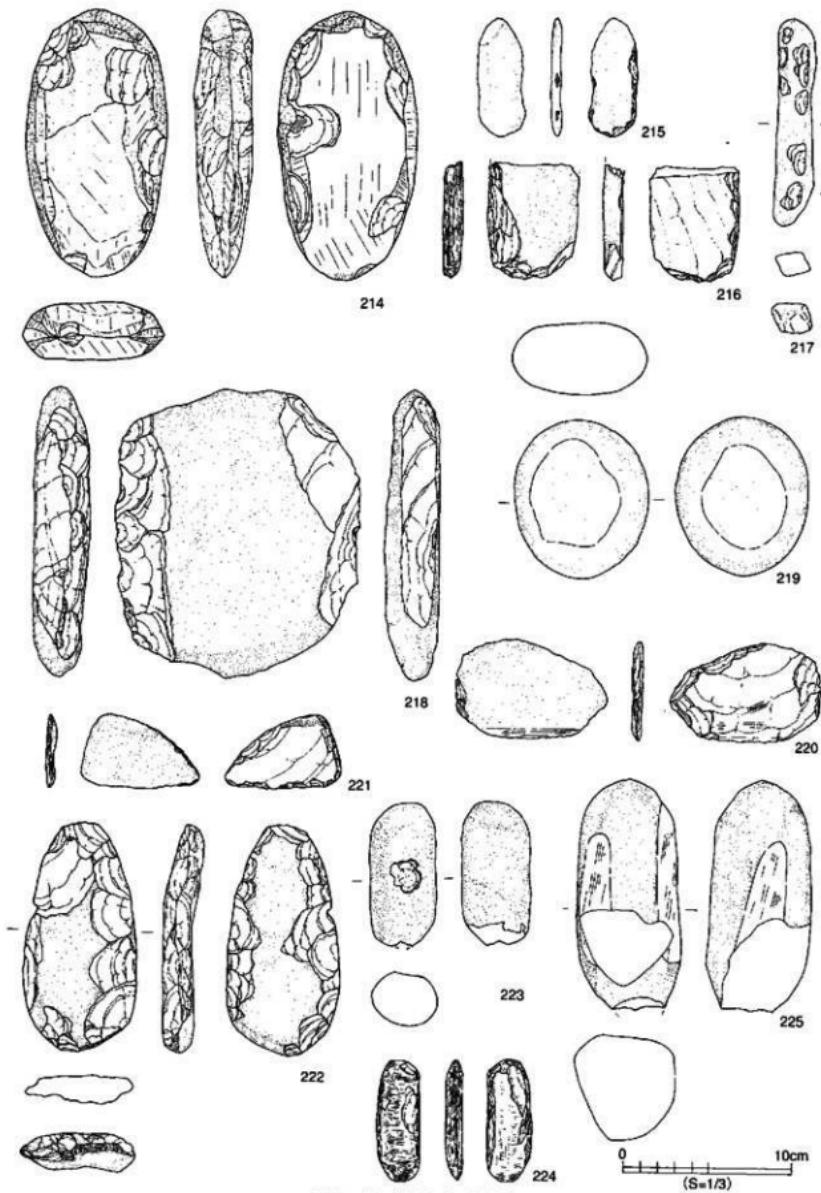


図30 IX～X層出土の遺物③

## 第6章 岩陰北側の遺構と遺物

岩陰遺跡から山側には、チャートの岩がコの字状に連なっている。岩の一部には、庇状になる部分（図31）があり、岩陰遺跡の可能性があったため、試掘確認調査を行った。

調査は、岩陰の雨垂れラインの中央に1m×1mの試掘坑を設定し、遺構・遺物の有無の確認を行った。

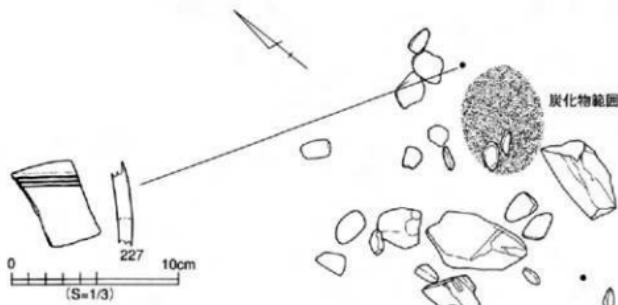
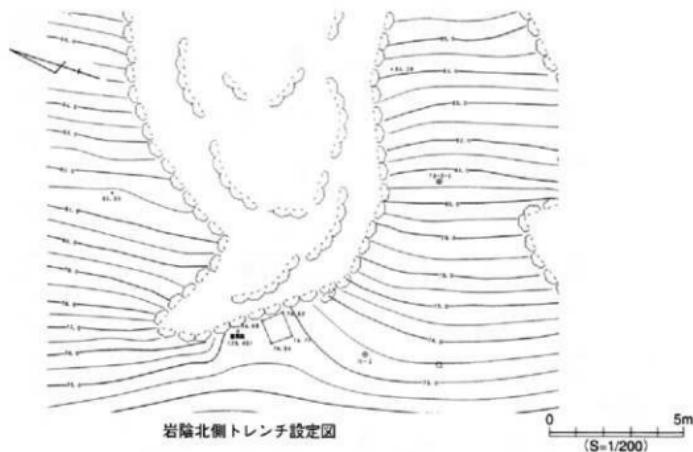
この結果、岩陰のはば中央の雨垂れライン内側で集石遺構を1基検出した。この遺構は表面の腐葉土を取り除いた段階で確認したが、地表面から浅いためか擾乱が激しく、石のまとまりを確認出来なかった。ただし、ここにある石のほとんどが10cmから20cmの川原石からなり、上面からは古瀬戸有耳壺（226・227）の破片が8点出土したことから遺構と判断した。遺物は古瀬戸のみであるが、胎土・器厚などが類似することから同一個体と思われる。いずれも小片にすぎないことから、一部は下方へ流れてしまった可能性がある。実測した227は肩部に3条単位の沈溝を施している資料である。

集石遺構を確認後、調査範囲を一部拡大して下層へと掘り進めたが、遺構・遺物包含層は確認できなかったため、調査を終了した。ここで確認した十層は以下のとおりである。

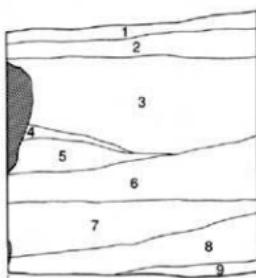
- 1層：7.5YR 5/1 褐灰色土 木の葉などが腐蝕した層。
- 2層：7.5YR 5/4 にぶい褐色土（直径50mm～100mmの角礫が多く含む。部分的に100mm～200mmの円礫を含む。）
- 3層：7.5YR 5/6 明褐色土（やや粘質あり。直径10mm～20mmの角礫を含む。）
- 4層：10YR 4/2 にぶい黄褐色土（やや粘質あり。炭化物を若干含む。）
- 5層：7.5YR 5/6 明褐色土（やや粘質あり。3よりやや暗く、直径10mm～20mmの亜角礫を多く含む。）
- 6層：10YR 4/1 褐灰色土（直径10mm～20mmの亜角礫を多く含む。）
- 7層：10YR 4/2 灰黄褐色土（直径10mm～20mmの亜角礫を多く含む。）
- 8層：10YR 4/2 灰黄褐色土（直径100mm～200mmの亜角礫を多く含む。）
- 9層：7.5YR 5/6 明褐色土（やや粘質あり。直径10mm～20mmの角礫を含む。）

以上の9層よりなるが、3層・4層・6層から8層までは山の斜面に即して堆積し、角礫・亜角礫を多く含むことから崩積性堆積物の層と思われる。一方、5層は斜面に対して逆方向に傾斜する。また、炭化物を若干含んでいた。このことから、調査当初は遺構とも考えられたが、3層下面で遺構を確認したところ、明確なプランや遺物は確認できなかった。

前述のとおり、2層上面で集石を確認した。



74.3m—



74.3m—

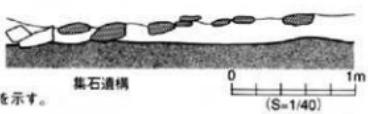


図31 岩陰北側の遺構と遺物

表4 トレンチ出土の土器

報告書番号	地区	時代	分類	取上番号	法面(cm)				断面・調整外観: 内面	粘 土	成 形	色調	残存率(口縁、底部)(×1/2)	その他	
					口径	高さ	底径	最大幅							
1	H22D 一括	绳文	S-3群	276	-	-	-	-	腹方向のナダ 底方向のナダ	良好	にぶい褐色 にぶい褐色、 (削灰色)	浮型文(山西)			
2	H22D	绳文	N-1群	321	-	-	-	-	腹方向のナダ 底方向のナダ	良好	にぶい褐色 (黒褐色)				
3	H22D	绳文	C-2群	430	-	(4.8)	-	-	底ナダ: 横方向 のナダ	良好	にぶい褐色 (褐色)	底深(6)	底が細長く黒 い色の底(挖土)		
4	H22D	绳文	K-1群	317	-	-	-	-	ナダ: 横方向 のナダ	良好	浅褐色: 剥 灰色、(底色)	口縁内凹溝 文L			
5	H22D 一括	弥生	Y-3群	283	-	-	-	-	条模: 不明	中(3%)、長石・石 英・石英を含む。	良好	にぶい褐色 (明赤褐色、 (にぶい赤褐色 色))	条模 2 cm		
6	H22D	弥生	Y-3群	324	-	-	-	-	刮削痕: 不明	小(5%)、長石・石 英を含む。	良好	黄色: 剥灰色、 (にぶい赤褐色 色)	条模 3本 Acm		
7	H22D 底	弥生	Y-3群	285	-	-	-	-	刮削痕: 横方 向のナダ	小(3%)、長石・石 英・石英を含む。	良好	褐色: 明赤褐色 (明赤褐色)	条模 3本 Acm		
8	H22D 一括	弥生	Y-3群	284	-	-	-	-	条模: 横方 向のナダ	小(5%)、長石・石 英・石英を含む。	良好	明赤褐色: 褐 色、(褐色)	条模 2本 Acm		
9	H22D 一括	弥生	Y-3群	280	-	-	-	-	底方向の条模: (木目)	中(3%)、長石・石 英・石英を含む。	良好	褐色: 黑褐色、 (灰褐色)	条模 2本 Acm		
10	H22D	弥生	Y-3群	292	-	-	-	-	底方向の条模: 横方向のナダ	極小(3%)、長石・ 石英を含む。	良好	にぶい褐色: 明赤褐色、(赤 褐色)	条模 2本 Acm		
11	H22D	奈良	環状器	8	-	-	-	-	なし: 目状指ナ ダ	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰褐色: 灰白 色、(灰褐色)			
12	H22D	奈良	環状器	51	-	-	-	-	圓柱形ナダ: 線 状指ナダ	極小(1%)、長石を 含む。	良好	黃灰褐色: 灰白 色、(灰褐色)			
13	H22D -E	中世	青磁	44	(16.0)	3.5	-	-	圓柱形ナダ: 同軸 ナダ	極小(0.5%)、長石 を含む。	良好	明赤褐色: 明 灰褐色、(灰白色)	外側へ削り て底丸		

表5 II層出土の土器①

報告書番号	時代	分類	取上番号	法面(cm)				断面・調整外観: 内面	粘 土	成 形	色調	残存率(口縁、底部)(×1/2)	その他	
				口径	高さ	底径	最大幅							
14	弥生	Y-2群a	4638	(20.2)	-	-	-	-	条模: 横方向のナ ダ	極小(1%)、長石 を含む。	良好、焼化物 付着(外側)	褐色: 剥灰色、 (灰褐色)	口縁 (1.4)	口縁
15	弥生	Y-2群a	4638	-	-	-	-	-	条模文: 横方向の ナダ	極小(1%)、長石 を含む。	良好、現化物 付着(外側)	にぶい褐色: にぶ い褐色、(剥灰 色)		
16	弥生	Y-2群a	4638	-	-	-	-	-	条模文: 横方向の ナダ	極小(1%)、長石 を含む。	良好	にぶい褐色: にぶ い褐色、(剥灰 色)		
17	弥生	Y-2群a	3998	-	-	-	-	-	底方向の条模: 横方 向のナダ	小(1%)、長石・石 英を含む。	良好、焼化物 付着(外側)	褐色: 剥灰色、 (灰褐色)		
18	弥生	Y-2群b	4665	-	-	-	-	-	底方向の条模: 横方 向のナダ	中(5%)、長石を含 む。	良好	にぶい黄褐色: 剥 灰褐色、(にぶい黄 褐色)		
19	弥生	Y-3群b	4665	-	-	-	-	-	条模文: 横方向の ナダ	小(5%)、長石・石 英を含む。	良好	褐色: にぶい赤褐 色、(褐色)	条模 2本 Acm	
20	弥生	Y-3群b	4265	-	-	-	-	-	下部削痕含む: 上 部横方向の条模	小(5%)、長石・石 英を含む。	良好	にぶい褐色: 剥 灰褐色、(褐色)	条模 3本 Acm	
21	弥生	Y-3群b	4630	-	-	-	-	-	横方向の条模: 横 方向のナダ	小(5%)、長石・石 英を含む。	良好	褐色: 明赤褐色、 (にぶい褐色)	条模 3本 Acm	
22	中世前 ろくろ 土師皿	ろくろ 土師皿	4625	10.7	3.6	5.2	-	-	圓柱形ナダ: 底 部基部切り直し: 同軸 ナダ	極小(5%)、長石を 含む。	良好、焼化物 付着(外側、 内面)	褐色: 剥灰色: 剥 灰褐色(外側、 内面)	口縁 (12.0) 底部 (12)	
24	中世前 ろくろ 土師皿	ろくろ 土師皿	4627	10.4	3.65	3.45	-	-	横方向のナダ。 沿口サエの痕が 残る: 沿口サエ後 削りナダ: 底部横 方向のナダ、 底削痕	極小(5%)、長石を 含む。	良好、焼化物 付着(内面)	にぶい黄褐色: にぶ い褐色(内面)	口縁 (12.0) 底部 (12)	

表 6 II層出土の土器②

報告書 番号	時代	分類	収上 番号	法量(cm)				形状・調査 外側・内面	鉢	焼成	色調	残存率 (1:裸、既存) (×/12)	その他
				口径	基高	底径	最大幅						
25	中世後 期	口クロ 土器皿	4630	(14.3)	(3.6)	6.4	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ	極小(2%)、長石を 含む。	良好、炭化物 付着(外面、 内面)	褐色:褐色、(褐 色)	口端(22)、 底部(12)	
26	中世前 期	口クロ 土器皿	3799	14.6	5	6	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(2%)、長石を 含む。	良好	に赤い褐色:に 赤い褐色、(灰 色)	口端(11)、 底部(12)	
27	中世	伊勢型 鍋AS版	4074	(25.4)	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(7%)、長石・ 石英を含む。	良好	に赤い褐色:に 赤い褐色、(褐 色)	口縁(10)	SK2出土(14件)
28	中世	伊勢型 鍋AS版	3994	(24.2)	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	小(2%)、長石・石 英を含む。	良好、炭化物 付着(外面)	に赤い褐色:に 赤い褐色、(灰 色)	口縁(9)	
29	中世	伊勢型 鍋AS版	3913	(25.4)	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(5%)、長石・ 石英を含む。	良好、炭化物 付着(外面)	灰褐色:灰褐色 (褐灰色)	口縁(14)	
30	中世	伊勢型 鍋AS版	4051	(26)	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	小(2%)、長石・石 英・赤色鐵化鉄を含 む。	良好	灰褐色:灰褐色 (褐灰色)	口縁(10)	
31	中世	伊勢型 鍋AS版	3617	(26.4)	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(5%)、長石・ 石英を含む。	良好、炭化物 付着(外面)	に赤い褐色:に 赤い褐色、(灰 色)	口縁(8)	
32	中世	伊勢型 鍋AS版	3651	(29.0)	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	小(2%)、長石・石 英を含む。	良好	に赤い褐色:に 赤い褐色、(淡黃 褐色)	口縁(11)	
33	中世	四足 A型	3618	(24.5)	-	-	-	雙方側のナデ:橫 方向のナデ:折れ脚 ナデ	極小(1%)、長石を 含む。	不良			
34	中世前 期	小野井 A2b型	3560	(8.6)	1.3	(6.0)	-	折ナデ:折ナデ	小(2%)、長石を含 む。	良好	灰白色:灰白色、 (灰白色)	口縁(5)	
35	中世前 期	小野井 木下型	4594	(10.0)	2	(6.6)	-	折ナデ:折ナデ	小(5%)、長石を含 む。	良好	淡褐色:淡褐色、 (淡灰色)	口縁(11)	
36	中世前 期	小野井 B2b'2c 型	4648	(12.8)	-	-	13.2	折ナデ:折ナデ	小(1%)、長石・石 英を含む。	良好	に赤い褐色:に 赤い褐色、(淡黃 褐色)	口縁(12)	
37	中世後 期	井川 C1型	3607	(16.3)	-	-	-	直筒仕底:三方 向のナデ	極小(1%)、長石を 含む。	良好、炭化物 付着(外面)	淡褐色:淡褐色 (内面)	口縁(7.4), 底部(3)	
38	中世後 期	井川 C1型	420	(11.0)	2.4	(5.6)	-	折ナデ:折ナデ	小(0.2%),長石を 含む。	良好	に赤い褐色:に 赤い褐色、(淡黃 褐色)	口縁(11)	
39	中世後 期	井川 C2型	374	(10.4)	1.2	-	-	折ナデ:折ナデ	極小(1%)、長石を 含む。	不良	に赤い褐色:に 赤い褐色、(灰 色)	口縁(2.2), 底部(3)	
40	中世後 期	井川 C2型	3615	9	1.9	5	-	折ナデ:折ナデ	小(5%)、長石を含 む。	良好	灰白色:灰白色 (灰白色)	口縁(5.5), 底部(12)	
41	中世	内沟継 A型	3964	-	-	-	-	圓盤沿ナデ、底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(2%)、長石を 含む。	良好、炭化物 付着(外面)	に赤い褐色:に 赤い褐色、(淡黃 褐色)		
42	中世	内沟継 A型	3659	-	-	-	-	圓盤沿ナデ:圓盤 沿ナデ:底部折切 り瓶四軒脚ナデ	中(2%)、長石・石 英を含む。	良好	に赤い褐色:に 赤い褐色、(淡黃 褐色)		
43	5世紀 末	环壁	4626	12.4	4.5	-	-	圓盤沿ナデ:圓盤 沿ナデ:底部折切 り瓶四軒脚ナデ	極小(2%)、長石を 含む。	良好	黄灰色:黄灰色 (褐灰色)	口縁(12.0)	
47	時潮不明	高坏	4629	13.8	-	-	14	圓盤沿ナデ:圓盤 沿ナデ:底部折切 り瓶四軒脚ナデ	極小(1%)、長石を 含む。	良好	晦灰色:晦灰色 (褐灰色)	口縁(5.0)	
48	時潮不明	壺	2927	-	-	(9.5)	(17.5)	圓盤沿ナデ:圓盤 沿ナデ:底部折切 り瓶四軒脚ナデ	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰白色:灰白色、 (灰白色)	底部(3)	
49	北部系 山系	斧追回	3382	(16.7)	(5.65)	(8.8)	-	圓盤沿ナデ:底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(2%)、長石を 含む。	良好	灰白色:灰白色、 (灰白色)	口縁(2.3), 底部(8)	内面に自然焼 付着、粗面
50	北部系 山系	素洞	3435	(14.4)	(5.3)	(6.8)	(14.6)	圓盤沿ナデ:底 部折切り瓶四軒 脚ナデ:圓盤沿ナ デ	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰褐色:灰褐色 (灰褐色)	口縁(3.0), 底部(3)	
51	北部系 山系	空洞	3511	14.5	5.1	6.5	-	圓盤沿ナデ:底 部折切り瓶四軒 脚ナデ	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰白色:灰白色、 (灰白色)	口縁(8.0), 底部(12)	内面に自然焼 付着。

表 7 Ⅱ層出土の土器③

報告書番号	時代	分類	版上番号	法面 (cm)				變形・調整 外面部: 内面	胎 素	燒 成	色 調	残存率 (□焼、△未焼) (×/12)	その他の 事項
				口径	脚高	底径	最大幅						
52	北部系 山茶碗	白土器	3751	(15.3)	5.3	6.1	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面に凹凸、 脚部斜面有	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (3.8), △未焼 (6)	
53	北部系 山茶碗	白土器	4494	(15.3)	5.9	5.8	(15.4)	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(0.3%)、長石 を含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (2.1), △未焼 (6)	使用痕有り
54	北部系 山茶碗	白土器	7795	14.2	5.1	5.7	14.4	圓輪指ナガ、底盤 脚部斜切り、脚部側 面有	極小(0.3%)、長石 を含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (6.0), △未焼 (6)	自然釉
55	北部系 山茶碗	大柄大 型	4638	(15.3)	(4.9)	(5.8)	-	圓輪指ナガ、脚部 側面斜切り、脚部側 面有	極小(1%)	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (0.6), △未焼 (3)	
56	北部系 山茶碗	大河東	69	-	-	-	(6.0)	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰黄色；灰黄色、 (灰黄色)	未記 (3)	
57	北部系 山茶碗	大河東	69	-	-	(3.4)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰黄色；灰白色、 (灰黄色)	未記 (3)	
58	北部系 山茶碗	大柄大 型	3560	-	-	(4.6)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(1%)	良好	灰黄色；灰白色、 (灰白色)	未記 (3)	
59	北部系 白山茶碗	麻前	3370	8.8	1.8	4.2	8.8	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(2%)、長石を 含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (0.5), △未焼 (12)	内面全体に自然 釉付着。
60	北部系 山茶碗	削製	4494	8.4	2.2	5	8.5	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(0.3%)、長石 を含む。	良好	灰黄色；淡黄色、 (灰黄色)	□焼 (10.3), △未焼 (3)	
61	北部系 山茶碗	第6型 式	4603	8.4	2.2	4.4	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	中(1%)、長石・ 赤色磨擦斑を含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (6.5), △未焼 (12)	使用痕有り
62	南部系 山茶碗	第4型 式	3376	(15.3)	5.5	(8.4)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (1.0), △未焼 (3)	使用痕有り
63	南部系 山茶碗	第6型 式	3433	(14.8)	3	(8.7)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	小(1%)、長石を 含む。	良好	灰黑色；暗灰色、 (暗灰色)	□焼 (5.0), △未焼 (3)	
64	南部系 山茶碗	第6型 式	3961	(13.6)	4.4	(6.3)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰黑色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (1.0), △未焼 (3)	
65	南部系 白山茶碗	第6型 式	3466	15.4	5.5	(8.2)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	小(1%)、長石を 含む。	良好	灰黑色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (1.2), △未焼 (3)	
66	南部系 山茶碗	第6型 式	3865	(15.0)	5	(6.8)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	中(1%)、長石・石 英を含む。	良好	灰黑色；暗灰色、 (暗灰色)	□焼 (2.0), △未焼 (3)	
67	南部系 山茶碗	第6型 式	3837	(8.8)	(1.6)	(5.0)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(1%)、長石を 含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (3.2), △未焼 (6)	
68	北部系 山茶碗	第6型 式	4638	(9.6)	2.1	(6.6)	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(2%)、長石を 含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	□焼 (5.0), △未焼 (12)	
69	陶器	指ね鉢	3670	(40.0)	-	(15.0)	-	上部圓輪指ナガ、 下部脚部斜切り、 脚部側面有	中(3%)、長石・石 英を含む。	良好	黄灰褐色；黄褐色、 (黄褐色)	□焼 (0.9), △未焼 (3)	
70	青磁瓶	I-4種	4633	(15.6)	-	-	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	極小(0.3%)、長石 を含む。	良好	オリーブ灰褐色； 灰オリーブ色、 (灰色)	□焼 (0.2)	内面へラグラ リに焼え、及 び網目
71	青磁瓶	I-2a種	4628	-	-	-	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	小(2%)、長石を 含む。	良好	所ナリープ灰 褐色；灰オリーブ 色、 (灰色)	□焼 (4.0)	外側ナイフ状 工具にて沈擦 立、内面へラ グラリに焼 え及 び網目
72	青磁瓶	I-2a種	4628	-	-	-	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	中(1%)、長石を 含む。	良好	薄オーブル灰 褐色、 (灰色)	□焼 (4.0)	外側系、乳白 色、不透明、 光沢有り
73	陶器	志野丸 皿	24	-	-	7.6	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	小(1%)、長石を 含む。	良好	灰白色；灰白色、 (灰白色)	未記 (3)	外側系、淡 褐色、清潔、光 沢有り、無著 斑
74	青磁瓶	扣系瓶	102	(12.6)	-	-	(12.6)	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	小(2%)、長石・石 英を含む。	良好	薄オーブル灰 褐色、 (灰色)	□焼 (4.0)	灰白色；淡 褐色、淡褐色、 (灰色)
75	陶器	飛沫目 17瓶	3080	-	-	-	-	圓輪指ナガ、底 盤脚部斜切り、 脚部側面有	中(3%)、長石・石 英を含む。	良好	淡黄色；淡黄色、 (灰白色)	未記 (3)	灰白色；淡 褐色、淡褐色、 (灰色)

表 8 II層出土の土器(④)

報告書番号	時代	分類	取上番号	法量(cm)				素形・調査 外観: 内面	胎 土	焼 成	色 調	保存率 (口絆、底盤) (×1/2)	その他の 記載
				口径	基高	底径	最大幅						
76	周器	縦葉形	23	(10.8)			10.8	圓軸ナブ: 回転ナブ	極小(0.2%), 長石を含む。	良好	男オーラー: ブ灰 色、明きオーラー 灰色。(灰白色)	口絆 (2.2)	灰褐色系、決抜 色、透明、光 沢有り、薄 灰、不明の文 様の染め付け
77	周器	瓶口尖底直腹	4924	(10.0)	3		11.9	回転ナブ: 圓軸 横ナブ	小(1%)、長石を含 む。	良好	(褐色) 黑褐色: 灰白色。(灰白 色)	胎口絆 (1.8)	
78	陶器	土瓶	3929	7	-	-	12.4	回転ナブ: 圓軸 横ナブ	極小(0.3%)、長石 を含む。	良好	灰褐色: 明赤褐 色。(灰白色)	口絆 (4.0)	黄褐色系、暗赤 褐色。半透明、 光沢有り
79	陶器	瓶口尖底直腹	116	-	-	-	(14.7)	回転ナブ: 回転ナ ブ: 圓軸回転へ く形	小(5%)、長石を含 む。	良好	暗赤~黑色: 暗 褐色。(灰白色)	底部 (3)	黄褐色系、暗~ 黒色。不透明、 光沢有り
79	陶器	瓶口尖底直腹	100	-	-	-	-	回転ナブ: 刻り: 扇 形ナブ	小(3%)、長石を含 む。	良好	(褐色) 黑褐色~ 黑色: 暗赤~黑 色。(灰白色)	底盤 (1)	黄褐色系、暗~ 黒色。不透明、 光沢有り
80	陶器	瓶口尖底直腹	3811	(20.6)	-	(8.6)	-	回転削り: 扇形ナ ブ	小(10%)、長石を含 む。	良好、炭化物 付着(外底、 底盤断面)	前赤褐色: 明赤 褐色。(灰白色)	口絆 (3.1), 底部 (3)	泥縄文、吊り 手をかけた耳、 黄褐色系、暗赤 褐色。不透明、 光沢有り
81	陶器	瓶口尖底直腹	403	(16.8)	9.7	(10.0)	(17.3)	回転ナブ: 後へラ ウド工芸: 圓軸 ナブ: 斜出し: 高台: 回転ナブ	小(1%)、長石を含 む。	良好、炭化物 付着(外底、 底盤断面)	良要: 明赤褐 色。(灰白色)	口絆 (0.7), 底部 (3)	黄褐色系、暗赤 褐色。不透明、 光沢有り

表 9 III層出土の土器(①)

報告書番号	時代	分類	取上番号	法量(cm)				素形・調査 外観: 内面	胎 土	焼 成	色 調	保存率 (口絆、底盤) (×1/2)	その他の 記載
				口径	基高	底径	最大幅						
82	梅文	S-1群	7790	-	-	-	-	: 直腹円底	小(15%)、長石、 石英、藍母を含む。	不良	灰青褐色: 灰黃 色。(灰褐色)		柳葉文、十番 文等に僅量付
83	梅文	S-3群	7794	-	-	-	-	: 横方向のナブ: 橫 方向のナブ	小(5%)、長石を含 む。	良好	褐色: 暗赤、(灰 褐色)		山型文
84	梅文	S-3群	6708	-	-	-	-	: 横方向のテグ ヌ	小(7%)、長石、石 英、藍母を含む。	良好	に赤い青褐色: 暗赤褐色。(灰褐色)		柳葉文
85	梅文	s-1群	4202	-	-	-	-	: 中方に近い調 整: 不明	極小(3%)、長石、 石英を含む。	良好、炭化物 付着(内底)	暗赤褐色: 暗 褐色(内底)		利支文(手取 竹口工芸)
86	梅文	s-2群	5913	-	-	-	-	: 略め方角のナブ: 直腹底板: 直腹底 板	極小(7%)、長石、 石英: 蓝母: 亦赤鐵 化鉄無しを含む。	良好	青褐色: 橙色、 (灰褐色)		利支文(手取 竹口工芸工具 等に押しつけ る)
87	純文	s-3群	5541	-	-	-	-	: 指ナブ: 後削り: 指 ナブ: 指ナブニ	極小(4%)、長石、石 英を含む。	良好	に赤い青褐色: に赤い青褐色、 (暗褐色)		貝没条文、 手取竹口等によ る點突文
88	純文	s-4群	6063	-	-	-	-	: 横方角のナ ブ	小(3%)、長石、石 英: 蓝母を含む。	良好	引出褐色: 暗赤 褐色。(暗褐色)		利支文、櫛突 文の上に組み
89	純文	s-6群	5928	-	-	-	-	: 指オサニ	小(3%)、長石、石 英: 蓝母を含む。	良好	青褐色: に赤 い褐色。(暗褐色)		利支文(純文 (KL))
90	純文	C-2群	6668	-	-	-	-	: 横(横: 上部斜 面)、下部斜 面、下部側 面のナブ	小(5%)、長石、石 英: 蓝母を含む。	良好	褐色: 明赤褐色、 (に赤い褐色)		純文
91	純文	K-2群	6710	-	-	-	-	: ミガキ: 不明	小(15%)、長石、石 英を含む。	不良	褐紅色: に赤 い褐色。(暗赤 褐色)		外側純文(LR) 後、北純文
92	時期不明	C群	4713	-	-	-	-	: 口縁部横方向 のナブ: 脚部上 半部分方向のナブ: 不明	極小(3%)、長石、石 英を含む。	不良	に赤い褐色: に 赤い青褐色。(に 赤い褐色)		
93	時期不明	C群	7592	-	-	-	-	不明: 不明	小(5%)、長石、石 英を含む。	良好	に赤い褐色: 橙 色。(暗褐色)		
94	佐生	Y-2群	5977	-	-	-	-	: 前後条痕: 横方 向のナブ	中(5%)、長石、石 英: 角隅石を含む。	良好	に赤い褐色: に 赤い褐色。(暗 褐色)		
95	佐生	Y-2群	4746	-	-	-	-	: 前後: 横方向のナ ブ	中(3%)、長石、石 英: 角隅石を含む。	良好	褐色: 暗赤褐色。 (暗褐色)		

表10 III層出土の土器②

報告書 番号	時期	分類	取上 番号	法量 (cm)			整形・調節 外側・内面	胎土	焼成	色調	焼成率 (1回、底盤) (×/○)	その他						
				口径	器高	底径												
96	弥生	Y-2群a 類	4675	-	-	-	-	尖底: 横方向のナ ダ	極小(2%), 長石・石 英を含む。	良好、灰化物 付着(外側、 内面)	灰褐色: 内面、 (-) 内面深 色)	灰褐色: にぶい青褐色、 (にぶい青、褐 色)						
97	弥生	Y-2群b 類	6657	-	-	-	-	ハケ目: タキナ 不明	極小(2%), 長石・石 英を含む。	良好、灰化物 付着(外側)	灰褐色: にぶい青褐色、 (にぶい青、褐 色)							
98	弥生	Y-2群b 類	5147	-	-	-	-	タキナ、板方向 のハケ目: 横方向 のナダ	極小(3%), 長石を 含む。	良好	浅黄色: 浅白色、 (灰褐色)							
99	弥生	Y-3群a 類	4619	-	-	-	-	尖底: 横方向のナ ダ	極小(3%), 長石を 含む。	良好、灰化物 付着(外側)	灰褐色: 褐色、 (青褐色)	条痕 4 条/km						
100	弥生	Y-3群a 類	6657	-	-	-	-	横方向の板底: 横 方向のナダ	小(3%), 長石を含 む。	良好、灰化物 付着(外側)	灰褐色: 明る褐色、(にぶ い褐色)	条痕 3 条/km						
101	弥生	Y-3群a 類	4615	-	-	-	-	尖底: 横方向のナ ダ	小(3%), 長石を含 む。	良好	褐色: 帯状灰 色、(褐色)	条痕 3 条/km						
102	弥生	Y-3群a 類	5977	-	-	-	-	羽状条痕: 横方 向のナダ	小(5%), 長石・石 英を含む。	良好	浅色: にぶい水 褐色、(にぶい棕 色)	条痕 3 条/km						
103	弥生	Y-3群a 類	4642	-	-	-	-	羽状条痕: 横方 向のナダ	小(5%), 長石・石 英を含む。	良好	褐色: 棕色、(棕 色)	条痕 3 条/km						
104	弥生	Y-3群a 類	4615	-	-	-	-	羽状条痕: 横方 向のナダ	小(5%), 長石・石 英を含む。	良好	褐色: 棕色、(棕 色)	条痕 2 条/km						
105	弥生	Y-3群a 類	4617	-	-	-	-	極方向の板底: 横 方向のナダ	小(5%), 長石・石 英・石英を含む。	良好	褐色: 明る褐色、 (にぶい青、棕 色)	条痕 2 条/km						
106	弥生	Y-3群a 類	4642	-	-	-	-	極方向の板底: 横 方向のナダ	小(5%), 長石・石 英・角石英を含む。	良好	褐色: 明る褐色、 (褐色)	条痕 2 条/km						
107	弥生	Y-3群a 類	4619	-	-	-	-	極方向の板底: 横 方向のナダ	小(5%), 長石を 含む。	良好	にぶい褐色: 棕 色(灰褐色)	条痕 3 条/km						
108	弥生	Y-3群a 類	4643	-	-	-	-	羽状条痕: 横方 向のナダ	小(5%), 長石・石 英を含む。	良好	褐色: 明る褐色、 (灰褐色)	条痕 3 条/km						
109	弥生	Y-3群a 類	6596	-	-	-	-	柔底: 不明	極小(7%), 長石・ 石英を含む。	良好	明る褐色: 明赤 色、(灰褐色)							
110	弥生	Y-3群a 類	4203	-	-	-	-	柔底: 不明	極小(2%), 長石・ 石英を含む。	良好	褐色: 棕色、(褐 色)							
111	弥生	Y-3群a 類	5622	-	-	-	-	極方向の板底: 横 方向のナダ	中(5%), 長石・石 英を含む。	良好	黒褐色: 帯状灰 色、(黒褐色)	条痕 2 条/km						
112	弥生	Y-3群a 類	4197	-	7.2	-	ハケ目: ナカナ ダ	極小(1%), 長石・ 石英を含む。	良好	褐色: にぶい褐色、 (褐色)								
113	土器	松河川	4159 (16.1)	-	-	-	-	横方向のナダ: 不 明	中(5%), 長石・石 英・石英化物を含 む。	良好	浅黃褐色: 帶狀 褐色、(浅黃褐色)	口縁 (2.0)						
114	埴輪	环身	4118 (13.5)	-	-	-	-	横方向のナダ: 不 明	極小(1%), 長石を 含む。	良好	綠灰色: 深灰色、 (青灰色)	口縁 (2.0)	7世紀前半					
115	土器	松河川	4159 (16.1)	-	-	-	13.7	圓底筒子型: 四脚 足	中(5%), 長石・石 英・石英化物を含 む。	良好	綠灰色: 深灰色、 (青灰色)	口縁 (2.0)						
116	埴輪	环身	4118 (13.5)	-	-	-	14.1	圓底筒子型: 四脚 足	極小(1%), 長石を 含む。	良好	灰褐色: 灰褐色、 (灰褐色)	口縁 (1.0)	外側、内面に 輪廓有り					
117	灰釉陶	折戸53 式	3850	13.9	-	-	-	14.1	圓底筒子型: 四脚 足	極小(1%), 長石を 含む。	良好	灰褐色: 灰褐色、 (灰褐色)	口縁 (6.0)	古代				
118	灰釉器	坏身	4145 (11.1)	4.7	6	-	(11.1)	圓底筒子型: 四脚 足	極小(1%), 長石を 含む。	良好、灰化物 付着(内面)	灰褐色: 灰褐色、 (灰褐色)							

表11 V層出土の土器①

報告書 番号	時期	分類	取上 番号	法量 (cm)			整形・調節 外側・内面	胎土	焼成	色調	焼成率 (口縁、底盤) (×/○)	その他						
				口径	器高	底径												
135	绳文	S-4群	5235	-	-	-	-	柔底: 柔直	極小(5%), 長石・ 石英を含む。繊維 を含む。	良好	灰褐色: 内面、 (-) 内面深 色)		斜直文					
136	绳文	S-1群	3151	-	-	-	-	極方向の板底: 横 方向のナダ	小(5%), 長石・石 英・本部灰化 物を含む。	良好	にぶい褐色: 褐 色、(にぶい褐色)							
137	绳文	S-1群	6745	-	-	-	-	極方向の板底: 横 方向のナダ	小(5%), 長石・石 英・角石英を含 む。	良好	にぶい赤褐色: 褐 色、(褐色)		斜直文					
138	绳文	S-1群	5254	-	-	-	-	斜めの柔直: 不明	極小(5%), 長石を 含む。	良好、灰化物 付着(内面)	灰褐色: 灰褐色、 (灰褐色)	口縁 (6.0)						

表12 V層出土の土器②

報告書 番号	時代	分類	版上 番号	底盤 (cm)				縁形・調査 外面: 内面	胎 土	施 成	色 調	残存率 (1種、2種) (X/12)		その他の 記述
				口径	高さ	底径	最大幅							
139	縄文	V-1群	5503	-	-	-	-	横方両のナデ: 横 方向のナデ	板小 (3%)、長石を 含む。	良好	にぶい褐色: に ぶい褐色、(にぶ い褐色)			刺突文
140	縄文	V-3群a 類	6321	-	-	-	-	押ナデ: 押ナデ、 オサエ		良好	灰青褐色: にぶ い褐色、(にぶ い褐色)			
141	縄文	V-1群	6778	-	-	-	-	斜めの条痕: 斜め の条痕	中 (5%)、長石・石 英を含む。	良好	にぶい黄褐色: にぶい黄褐色、(に ぶい黄褐色)			網文、外面 に斜形有り
142	縄文	V-3群b 類	6922	-	-	-	-	横方両のナデ	板小 (3%)、長石、 石英、云母を含む。	良好	にぶい褐色: 石 英、(褐色)			爪形網文
143	縄文	V-5群	6781	-	-	-	-	横方向のナデ	板小 (5%)、長石、 石英、雲母を含む。	良好	灰青褐色: にぶ い青褐色、(にぶ い青褐色)			C字彫形文、 網文
144	縄文	V-6群a 類	5254	-	-	-	-	横方向のナデ	板小 (2%)、長石を 含む。	良好	灰青褐色: 灰灰 色、(灰青褐色)			網文
145	縄文	C-1群	6830	-	-	-	-	横方向のナデ: 橫 方向のナデ	中 (10%)、長石、 石英を含む。	良好	帶色: にぶい褐 色、(にぶい褐 色)			爪形網文、 縄文
146	縄文	C-1群	5179	-	-	-	-	不明	板小 (10%)、長石、 石英を含む。	良好	灰青褐色: 灰青 色、(灰褐色)			邊帯上にC字 彫形を施す
147	縄文	C-3群	5900	-	-	-	-	ナデ	板小 (5%)、長石、 石英、云母を含む。	良好	赤褐色: 灰褐色、 (深褐色)			段階を経た付 けた後に刻み 文、斜めの浅 縫
148	縄文	K-1群	4275	-	-	-	-	横方向のナデ	中 (5%)、長石・石 英を含む。	良好	宇宙褐色: 灰青 褐色、(明青褐色)			外面に沈漫 文、網文、内 面に沈漫文、 刺突文
149	縄文	K-3群	6121	-	-	-	-	横方向のナデ、 押オサエ	小 (5%)、長石・石 英を含む。	良好	灰青褐色: にぶ い青褐色、(深褐色)			沈漫文
150	縄文	B-1群	6153	-	-	-	-	横方向のナデ	板小 (7%)、長石、 石英、角閃石を含 む。	良好	にぶい褐色: に ぶい褐色、(褐色)			四縫文3条
151	弥生	Y-1群	5544	-	-	-	(29.2)	横方向のナデ: 橫 ナデ、折脚壓屈	中 (7%)、長石・石 英、赤色化粧を含 む。	良好	にぶい褐色: 灰 褐色、(褐色)			機械工具によ る連続圧屈、 斜状の擦挫流 程文
152	弥生	V-3群a 類	5507	-	-	-	-	羽根条痕: 橫方 向のナデ	小 (5%)、長石、石 英を含む。	良好	にぶい褐色: 灰 褐色、(褐色)			条痕3本/cm
153	弥生	Y-3群a 類	6107	-	-	-	-	横方向の条痕: 不 明	中 (7%)、長石・石 英を含む。	良好	にぶい赤褐色: 褐色、(にぶい赤 褐色)			条痕4本/cm
154	弥生	Y-3群a 類	7151	-	-	-	-	横方向の条痕: 橫 方向のナデ	小 (5%)、長石、石 英を含む。	良好	にぶい褐色: 灰 褐色、(褐色)			条痕3本/cm
155	弥生	Y-3群a 類	5544	-	-	-	-	羽根条痕: 橫方 向のナデ	小 (5%)、長石・石 英を含む。	良好	褐色: 灰色、(に ぶい褐色)			条痕2.4本/cm
156	弥生	V-3群a 類	5790	-	-	-	-	羽状条痕: 不明	中 (7%)、長石・石 英、雲母を含む。	良好	明褐色: 褐色、 (褐色)			条痕3本/cm
157	縄文	S-4群	5395	-	-	-	-	横方向に条痕、 板にハク調壁: 橫 方向に条痕、折 脚壓屈	小 (5%)、長石、石 英、赤色化粧を含 む。	良好	にぶい褐色: に ぶい褐色、(にぶ い褐色)			外面、内面に 刺突文
158	縄文	S-4群	5249	-	-	-	-	斜めの条痕: 斜 めの条痕、横方 向のナデ	小 (2%)、長石・石 英、赤色化粧を含 む。	良好	褐色: 灰色、(褐 色)			刺突文、沈漫 文
159	縄文	S-4群	5365	-	-	-	-	不明: 雷痕	板小 (3%)、長石、 石英を含む。銀錠 を含む。	良好	にぶい黄褐色: にぶい褐色、(褐 色)			

表13 Ⅲ～Ⅵ層出土の土器①

報告書 番号	地区 地名	時代	分類	版上 番号	底盤 (cm)				縁形・調査 外面: 内面	胎 土	施 成	色 調	残存率 (1種、2種) (X/12)		その他の 記述
					口径	高さ	底径	最大幅							
173	Ⅳ	縄文	S-1群	7226	-	-	-	-	横方向のナデ	板小 (5%)、長石、 石英を含む。	良好	にぶい褐色: にぶい褐色、 (褐色)			押型文(平行 凹邊形)
174	Ⅴ	縄文	S-1群	7262	-	-	-	-	ナデ	板小 (5%)、長石、 石英を含む。	良好	にぶい褐色: 灰青褐色、 (褐色)			押型文(平行 凹邊形)

表14 Ⅸ~X層出土の土器②

報告書番号	場所	時代	分類	取上番号	法量(cm)				形状・模様 外側: 内面	胎 土	燒 成	色調	残存率 (内側、外側) (×/12)	その他	
					口径	器高	底径	最大幅							
175	Ⅸ	绳文	S-1群	7309	-	-	-	-	横方向のナデ 石英: 赤色顔化粧を含む。	小(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	不均	灰青褐色: 灰青褐色: (灰青褐色)			押型文
176	Ⅸ	绳文	S-1群	6537	-	-	-	-	横方向のナデ 石英: 赤色顔化粧を含む。	中(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	良好	褐色: にぶい褐色: (褐色)			押型文
177	Ⅸ	绳文	S-1群	7355	-	-	-	-	横方向のナデ 石英: 赤色顔化粧を含む。	中(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	良好	灰青褐色: 灰青褐色: (灰青褐色)			押型文
178	Ⅸ	绳文	S-1群	7273	-	-	-	-	横方向のナデ 石英: 赤色顔化粧を含む。	中(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	良好	褐色: 灰褐色: (灰色)			押型文
179	Ⅸ	绳文	S-1群	6533	-	-	-	-	不明	小(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	良好	にぶい褐色: 褐色: (褐色)			押型文
180	Ⅹ	绳文	S-2群	7348	-	-	-	-	横方向のナデ 石英: 角閃石を含む。	中(10%)、長石: 石英: 角閃石を含む。	良好	にぶい褐色: にぶい褐色: (にぶい褐色)			押型文
181	Ⅹ	绳文	S-1群	6548	-	-	-	-	ナデ	他小(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	良好	にぶい青褐色: 灰褐色: (褐色)			押型文
182	Ⅹ	绳文	S-2群	7346	-	-	-	-	横方向のナデ 石英: 赤色顔化粧を含む。	小(5%)、長石: 石英: 赤色顔化粧を含む。	良好	浅黄色: にぶい褐色: (にぶい褐色)			押型文
183	Ⅹ	绳文	S-3群	7757	-	-	-	-	指寸工	小(7%)、長石を含む。	良好	にぶい青褐色: にぶい褐色: (褐色)			山型の押型文
184	Ⅹ	绳文	S-3群	5167	-	-	-	-	ナデ	極小(5%)、灰れ、 石英を含む。鐵錫を含む。	良好	にぶい青褐色: にぶい青褐色: (灰褐色)			
185	Ⅹ	绳文	S-3群	6544	-	-	-	-	横方向のナデ: 横方向のナデ 石英: 角閃石を含む。	小(5%)、長石: 石英を含む。	良好	にぶい青褐色: 灰褐色: (褐色)			
186	Ⅹ	绳文	S-5群b 鉢	5136	-	-	-	-	斜めのナデ: 横方向のナデ 石英: 角閃石を含む。	中(7%)、長石: 石英: 角閃石を含む。	良好	にぶい青褐色: にぶい青褐色: (にぶい青褐色)			
187	Ⅹ	绳文	S-2群	7435	-	-	-	-	斜めのナデ: 横方向のナデ 石英: 角閃石を含む。	小(7%)、長石: 石英: 角閃石を含む。	良好	浅黄色: にぶい褐色: (にぶい褐色)			押型文
188	Ⅺ	绳文	S-2群	7621	-	-	-	-	斜めのナデ: 横方向のナデ 石英: 角閃石を含む。	小(7%)、長石: 石英: 角閃石を含む。	良好	にぶい褐色: 褐色: (褐色)			
189	Ⅺ	式小 明	無文土 器	7567	-	-	-	-	不明	山(7%)、長石: 石英を含む。	良好	赤色: 棕色: (にぶい褐色)			底部に黒斑模 有り

表15 岩陰北側の遺物

報告書番号	場所	編目	分類	取上番号	法量(cm)				形状・模様 外側: 内面	胎 土	燒 成	色調	残存率 (内側、外側) (×/12)	その他
					口径	器高	底径	最大幅						
227	I	古窯跡	右所置	6	-	-	-	-	胎ナデ: 指ナデ	中(5%)、長石: 石英を含む。	良好	オリーブ褐色: 棕褐色: (灰白色)		3条の沈泥文 を1单位と て複数基座有 り。灰褐色系。 淡褐色、淡 青色。光沢有り

表16 玉類観察表

遺物 番号	層位	時代	分類	取上 番号	材 料	法 量						色 調	質 感(g)	残 存 度	備 考
						最大幅 (mm)	上面孔径 (mm)	下面孔径 (mm)	底面孔径 (mm)	長さ (mm)					
43	II	古墳	晩玉	4135	碧玉質	8	7	3	7	3	36	オリーブ灰色	3.3	完	圓潤穿孔
44	II	古墳	晩玉	4115	碧玉質	9	9	3	8	1	22	土色調に合う 色なし	3	完	圓潤穿孔
45	II 2	古墳	小玉	4134	ガラス質	6	5	2	5	2	3	土色調に合う 色なし	0.1	完	
113	III	古墳	碧玉	一括	碧玉質	7	7	3	7	1	22	土色調に合う 色なし	2.1	完	片面穿孔
114	III 3	古墳	碧玉	5976	綠色玻璃質	6	6	2	6	2	20	浅黄色	1	完	片面穿孔

表17 II層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	性番号	石材番号	法 番				縫面の状況 有(円・角)、無	欠損	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)			
22	弥生	石鏃	4698			8	3.6	1.7	0.7	4	無	欠

表18 III層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	性番号	石材番号	法 番				縫面の状況 有(円・角)、無	欠損	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)			
70	近世	火打石ち	791			15	3.6	2.7	1.9	19	有(角)	完
119	縄文	石鏃	7793			15	1.55	1.4	0.3	1	無	完
120	縄文	石鏃	4257			15	5.1	1.8	1	6	無	完
121	縄文	石鏃	4388			15	5	3.25	0.7	10	無	完
122	縄文	刀器	6682			15	6.25	4.3	1.1	21	有(円)	完
123	縄文	刀器	6595			15	2.9	2.3	0.6	3	無	完
124	縄文	刀器	4084			15	4.2	3	1.3	17	有(円)	完
125	縄文	打欠石鏃	95			1	6.6	4.5	1.3	52	有(円)	完
126	縄文	打欠石鏃	3872			1	7.7	5	1.5	82	有(円)	完
127	縄文	切目石鏃	3979			7	5.2	3.6	0.55	15	有(円)	欠
128	縄文	打欠石鏃	6658			2	3.45	2.4	0.9	8	有(円)	完
129	縄文	破器	6673			1	9.4	6.25	1.85	134	有(円)	欠
130	縄文	破器	3544			1	11.8	5.6	2.45	215	有(円)	完
131	縄文	打欠石鏃	1308			7	7.8	5	1.2	56	有(円)	完
132	縄文	破器	4127			1	13.5	7.8	2.9	439	有(円)	完
133	縄文	削・磨石	3691			6	11	8	4.9	610	有(円)	完

表19 IV層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	性番号	石材番号	法 番				縫面の状況 有(円・角)、無	欠損	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)			
160	縄文	刃器	4503			13	4.75	2.7	0.8	9	有(円)	完
161	縄文	刃器	4409	2		15	4.9	3.7	1.3	26	有(円)	完
162	縄文	刃器	6027	3		15	4.5	2.5	0.6	6	無	完
164	縄文	刃器	4606			7	12.7	8.5	1.8	172	有(円)	完
166	縄文	磨石	7403			3	9.45	7.6	5	538	有(円)	欠
167	縄文	打欠石鏃	4276			7	7.2	4	1.3	38	有(円)	完

表20 V層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	性番号	石材番号	法 番				縫面の状況 有(円・角)、無	欠損	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)			
163	縄文	石鏃	5534	5		13	3.9	2.6	0.6	7	無	欠
165	縄文	鉗石	5668			2	8.9	4.8	3.9	231	有(円)	完
168	縄文	打欠石鏃	6151			4	7.2	5.4	1.6	93	有(円)	完
169	縄文	打欠石鏃	5148	1		7	7.2	3.8	2	63	有(円)	完
170	縄文	切目石鏃	6840			4	6.8	2.7	1.3	39	有(円)	完
172	縄文	鉗石	5407			4	9.8	7.3	4.8	516	有(円)	欠

表21 VI層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	性番号	石材番号	法 番				縫面の状況 有(円・角)、無	欠損	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)			
171	縄文	磨石	4009	4		2	10.6	6.4	3.9	334	有(円)	欠

表22 VII層出土の石器①

遺物番号	時代	分類	取上番号	性番号	石材番号	法 番				縫面の状況 有(円・角)、無	欠損	
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)			
190	縄文	石鏃	6H18			15	2.4	1.7	0.2	7	無	完
191	縄文	石鏃	7128			15	2.2	1.3	0.2	10	無	完
192	縄文	石鏃	5245			15	1.5	1.45	0.35	10	無	欠
193	縄文	刃器	6117	4		15	5.6	4.1	1.4	17	有(円)	完
194	縄文	石鏃	7357	1		15	5.2	2.4	1.45	18	有(円)	完
195	縄文	刃器	7016	3		15	3.8	3.2	0.9	13	有(円)	完

表23 墓層出土の石器②

遺物番号	時代	分類	取上番号	枝番号	石材番号	法量				縫合の状況 有(円)・無	欠損
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)		
196	縄文	刀器	7642	2	15	4.75	4.25	1.3	26	有(△)	完
197	縄文	刀器	6456		15	8.65	3.25	1.2	13	無	完
198	縄文	刀器	7082	1	15	4.45	3.45	1.6	20	無	完
199	縄文	石核	5066		12	11.7	5.3	5.8	409	有(△)	完
200	縄文	石核	6553		15	9.5	6.5	5	284	有(△)	完
201	縄文	石核	5388	3	15	9.2	4.2	3.85	163	有(△)	完
202	縄文	打製石錐	6306	2	1	6.8	4.5	1.9	66	有(△)	欠
203	縄文	打製石錐	5421	2	2	12.8	7.7	1.7	254	有(△)	欠
204	縄文	磨石	5384		5	11.4	6.9	6	644	有(△)	欠
205	縄文	磨石	5300		1	11.9	5.95	3.3	310	有(△)	完
206	縄文	磨石	6382		6	14.4	8.6	4.9	341	有(△)	完
207	縄文	石核	6965		6	30.1	16.8	5.4	4110	有(△)	完

表24 Ⅴ層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	枝番号	石材番号	法量				縫合の状況 有(△)・無	欠損
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)		
208	縄文	石錐	6029	2	15	3.7	2.45	0.8	7	無	完
209	縄文	刀器	5938	1	13	3.4	3	1.1	9	有(△)	完
214	縄文	打製石錐	7297		4	15.8	8.4	3.5	661	有(△)	完
215	縄文	打製石錐	7338		7	6.9	2.9	0.7	19	有(△)	完
216	縄文	打製石錐	5572		7	6.8	5.4	1.2	65	有(△)	欠
217	縄文	石核	6724	2	7	12.1	2.4	1.75	69	有(△)	完
218	縄文	磨石	6580		1	16.9	14.5	3.35	1030	有(△)	完
219	縄文	磨石	5571	1	3	9.3	7.9	4.3	473	有(△)	完
220	縄文	咀嚼刃器	6642		7	8.9	5.8	0.7	46	有(△)	完

表25 X層出土の石器

遺物番号	時代	分類	取上番号	枝番号	石材番号	法量				縫合の状況 有(△)・無	欠損
						長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	質量 (g)		
210	縄文	石錐	2182		15	2.4	1.6	0.3	7	無	完
211	縄文	刀器	6806	1	15	4.6	3.3	0.8	11	無	欠
212	縄文	刀器	7414		15	4.9	3.15	0.85	10	有(△)	完
213	縄文	石錐	7027	6	13	8.8	3.6	1.9	27	有(△)	完
221	縄文	咀嚼刃器	7048		7	6.9	4.4	0.85	23	有(△)	完
222	縄文	打製石錐	6765	2	3	13.5	6.8	2.35	195	有(△)	完
223	縄文	磨石	6764		1	8.4	4.1	3.1	161	有(△)	欠
224	縄文	磨石	6310		12	7.2	2.7	1.1	30	無	完
225	縄文	磨石	6311		1	13.6	6.2	6.3	724	有(△)	欠

## 第7章 自然科学分析

### 第1節 岩井戸岩陰遺跡の自然科学分析

岩井戸岩陰遺跡は、以前に2度南山大学によって調査が行われている。この調査では自然遺物の出土はないが、中央の上層観察用あぜに赤褐色の層が薄く堆積していることを確認していた。そのため、今回の調査では、この層の火山灰分析を行った。その結果、AH火山灰の堆積を確認したため、この層を中心に連続サンプルを採取し、火山灰の降灰層の確認をした（第1節）。

また、自然遺物は少量ではあるが、炭化物や貝殻といった自然遺物が出土した。炭化物は9点出土したものうち、Ⅴ層（縄文時代早期押型文期）とX層出土の炭化材各1点ずつ出上炭化材放射線炭素年代測定の分析を依頼した（第2節）。貝殻はそれぞれ6点出土した。いずれも小破片であったが、種類同定を依頼した（第3節）。

以下、分析結果を掲載する。

### 第2節 テフラ分析

黒澤一男（パレオ・ラボ）

#### 1. 試料と分析方法

岩陰遺跡から採取された10試料を用いて、以下の分析をおこなった。

- (1) 各試料について自然含水状態で約30g程度秤量し、テフラ分析試料とした。また、含水比を求めるため別途試料を10g程度秤量し、乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。
- (2) 1φ (0.5mm : 30メッシュ)、2φ (0.25mm : 60メッシュ)、3φ (0.125mm : 120メッシュ)、4φ (0.063mm : 250メッシュ)、の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式フリイ振とう機を用いて、湿式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわし、試料の乾燥重量中における粒径4φ以上砂粒分の重量%を含砂率とした。
- (3) 4φの残渣（粒径0.125~0.063mm）については、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離した。
- (4) 分離した軽鉱物について、封入剤レーキサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それらを偏光顕微鏡下で軽鉱物粒子を火山ガラスと長石に分類し、同定、計数し、その組成を求めた。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については、試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、火山ガラスの形態については、町田・新井（1992）の分類基準に従い形態分類をおこなった（図33）。
- (5) 火山ガラス含有量の高い試料を用いて火山ガラスの屈折率測定をおこなった。測定方法は、横山ほか（1986）の方法に従って、温度変化型屈折率測定装置（RIMS86）を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）であらわした。

## 2. 火山ガラス比分析結果

本地域において堆積物の鉱物分析をおこなった結果を表26、図34に示し、以下にそれぞれについて述べる。

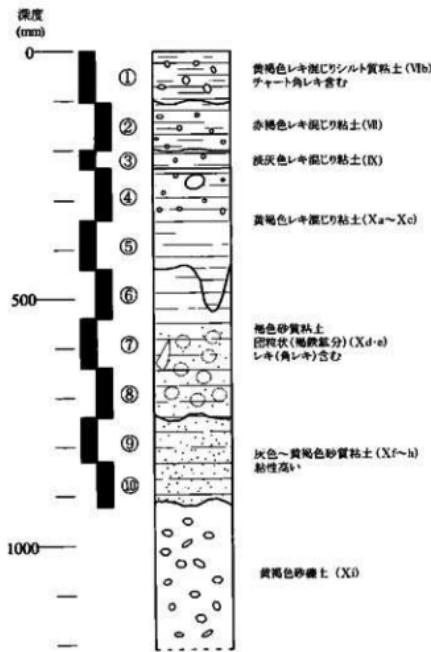


図32 岩陰遺跡における柱状図

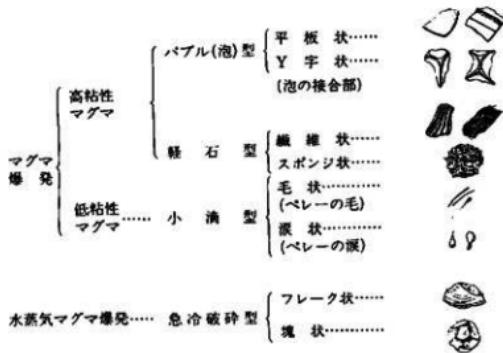


図33 火山ガラスの形態分類

含水率は試料4において52%と高い値となるが、そのほかの9試料においては25~30%の値となる。

堆積物中の砂粒分の割合（含砂率）は、23.0~74.6%の値となる。下位で低い含砂率となり、最上位の試料1で最大値を示す。

重・軽鉱物比については、上位でやや重鉱物の割合が高くなるが、全試料において軽鉱物の割合が100%に近い値となる。

軽鉱物組成は、火山ガラスの含有量が上位で高く、試料1と3で42.5%と34.8%の値となる。逆に試料4より下位では長石の含有量が96%以上と高い値となる。

火山ガラスの形態は、平板状（b1）が最も高い値を示し、次いでY字状（b2）が高い値を示す。

### 3. 火山ガラス屈折率測定結果

測定試料の選定は、鉱物分析により火山ガラスの含有量の高い試料1を選び出した。測定結果を表27、図35に示す。

試料1に含まれるバブル型平板状火山ガラスの屈折率を測定した結果、範囲1.5108~1.5142、平均1.5131となる。

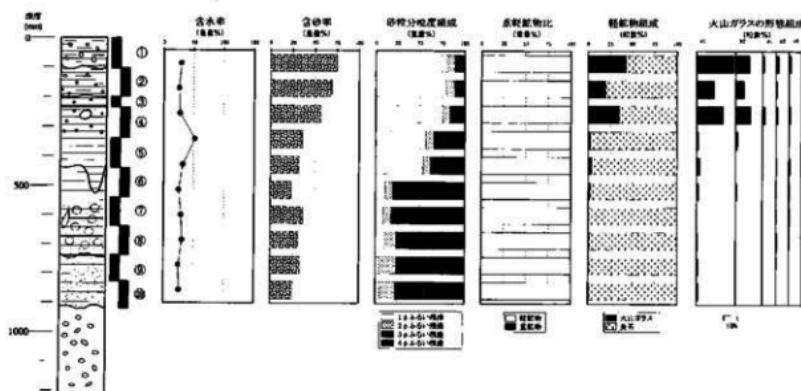


図34 岩陰遺跡における堆積物中の鉱物組成

表26 堆積物の鉱物分析結果一覧

試料番号	含水率 (重量%)		砂粒分の粒度組成 (重量%)			重・軽鉱物組成 (重量%)		軽鉱物組成 (内訳) 長石 Vg		火山ガラス形態組成 (重量%)				
	1	2	1.6	2.6	3.6	4.6	重鉱物	軽鉱物	長石	火山ガラス Vg	平板状 b1	Y字状 b2	織維状 p1	スピンドル 状 p2
1	28.8	74.6	79.8	9.6	6.1	0.59	99.41	107	79	52	18	2	4	3
2	25.8	68.5	78.7	9.7	6.6	5.0	0.30	99.70	126	31	21	9	-	1
3	27.6	56.2	75.5	7.6	7.4	9.5	0.37	99.63	107	57	33	17	3	2
4	82.1	35.4	58.6	8.6	12.7	21.8	0.25	99.75	155	4	2	2	-	-
5	31.9	31.5	53.7	8.4	13.2	24.7	0.01	99.99	155	6	4	-	-	1
6	25.6	23.0	10.9	8.7	27.2	53.2	0.01	99.99	157	4	2	1	-	1
7	29.1	38.0	8.8	9.1	28.7	53.5	0.01	99.99	153	1	-	-	-	1
8	30.9	30.5	10.0	13.8	33.7	42.6	0.01	99.99	154	2	1	-	-	-
9	25.0	33.1	4.0	19.2	37.2	39.6	0.01	99.99	174	2	2	-	-	-
10	25.0	25.3	4.4	17.4	33.4	44.7	0.01	99.99	168	2	2	-	-	-

表27 火山ガラスの屈折率測定結果

試料	測定対象	範囲(range)	平均(mean)
1	バブル型火山ガラス	1.5108 - 1.5142	1.5131



図35 火山ガラスの屈折率測定結果

#### 4. 堆積物中の指標テフラ

今回の分析から、本地域において見られた堆積物から検出されたテフラについて、その特徴と噴出起源及び年代について述べる。

##### 【K-Ah：喜界アカホヤ火山灰】

岩陰遺跡の試料1に認められるバブル型を中心とした火山ガラスは、その形態的特長から町田・新井（1978）の喜界アカホヤ火山灰（Kikai-Akahoya : K-Ah）を起源とするものと考えられる。町田・新井（1978）によるとK-Ahの火山ガラスの形態には淡い褐色を帯び、薄手という特徴をもつものも含まれる。ここで見られる火山ガラスに薄手で淡い褐色を帯びるバブル型平板状が見られることと、薄手の火山ガラスが多いこと、火山ガラスの屈折率測定結果は範囲1.511-1.514、平均1.513となり、従来の値（範囲1.508～1.516；町田・新井1992）と重なることから、K-Ahに同定・対比される。

K-Ahは南九州の鬼界カルデラを噴出源とし、九州地方から東北地方南部にまで広く分布している。また、噴出年代はテフラ中の有機物を用いた<sup>14</sup>C年代測定から約4,000～9,000年前という年代が得られているが、その中の3割以上が6,300年前に集中することから、6,300年前と推定されている（町田・新井1983）。

#### 5.まとめ

岩陰遺跡において堆積物の鉱物分析をおこなった結果、試料1にK-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）が含まれることが確認され、6,300年前の堆積物であることが明らかになった。

## 引用文献

- 町田 洋・新井房夫1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17,pp143-163。
- 町田 洋・新井房夫1983「広域テフラと考古学」『第四紀研究』22,pp134-148。
- 町田 洋・新井房夫1992「火山灰アトラス」277p.東京大学出版会
- 横山卓雄・榎原徹・山下透1986「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25,pp21-30。

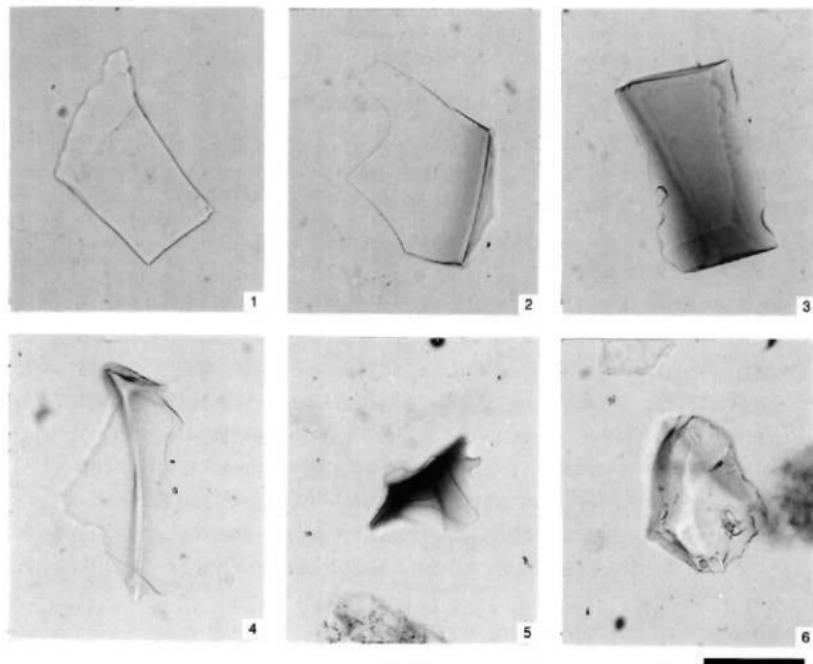


図36 岩陰遺跡における火山ガラスの顕微鏡写真（スケール 0.1mm）

1～3. バブル型平板状火山ガラス

4、5. バブル型Y字状火山ガラス

6. 破粹型火山ガラス

### 第3節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

岩井戸岩陰遺跡より検出された炭化物の加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。

#### 2. 試料と方法

試料は、Xd層に相当する層位から出土した炭化物1点、Ⅷ層から出土した炭化物1点の併せて2点である。

これら試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨（グラファイト）に調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した<sup>14</sup>C濃度を用いて<sup>14</sup>C年代を算出した。

#### 3. 結果

表1に、各試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を示す。

<sup>14</sup>C年代値（yrBP）の算出は、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（+1σ）は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の<sup>14</sup>C年代が、その<sup>14</sup>C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表28 放射性炭素年代測定および曆年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	<sup>14</sup> C年代 (yrBP ± 1σ)	<sup>14</sup> C年代を曆年代に較正した年代	
				曆年代較正値	1σ曆年代範囲
PLD-1219 (AMS)	炭化物 Xd層	-25.4	9180 ± 50	cal BC 8410 cal BC 8400 cal BC 8375 cal BC 8355 cal BC 8315	cal BC 8450 - 8370 (53.4%) cal BC 8340 - 8290 (37.7%)
PLD-1646 (AMS)	炭化物 Ⅷ層 7266-5 押型文	-33.6	9710 ± 50	cal BC 9220	cal BC 9250 - 9140 (96.1%)

なお、曆年代較正の詳細は、以下の通りである。

#### 曆年代較正

曆年代較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5,730 ± 40年）を較正し、より正確な年代を求めるために、<sup>14</sup>C年代を曆年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と<sup>14</sup>C年代の比較、および海或堆積物中の繊維状の堆積構造を用いて<sup>14</sup>C年代と曆年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代を算出する。

$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、曆年代較正値は $^{14}\text{C}$ 年代値に対応する較正曲線上の曆年代値であり、 $1\sigma$ 曆年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその $1\sigma$ 曆年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 $1\sigma$ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

#### 4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および曆年代較正を行なった。曆年代較正した $1\sigma$ 曆年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、Xd層に相当する層位から出土した炭化物はcal BC 8450 - 8370年、Ⅷ層から出土した炭化物はcal BC 9250 - 9140年、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

#### 引用文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎.日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代、p.3-20.  
Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended  $^{14}\text{C}$  Database and Revised CALIB3.0  $^{14}\text{C}$  Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.  
Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

## 第4節 貝殻片化石

黒澤一男（パレオ・ラボ）

岩井戸岩陰遺跡からは数点の貝殻片が出土した。それらは、Ⅲ-3層（遺物番号4749）とV層（遺物番号5542）から採取された。採取された貝殻片は、非常に保存状態が悪く、種同定に必要な殻頂部が残存しないため、種同定は非常に困難である。

出土した貝殻片の多くは、殻厚1mm前後のものである。また、破片から推定される殻長は4cm前後である。貝殻片の中で比較的残存している破片が1つあり、その殻形は丸みのある三角形をしている。

それら特徴と、本遺跡からハマグリ類が確認されていることも含め、ハマグリ類と同定した。

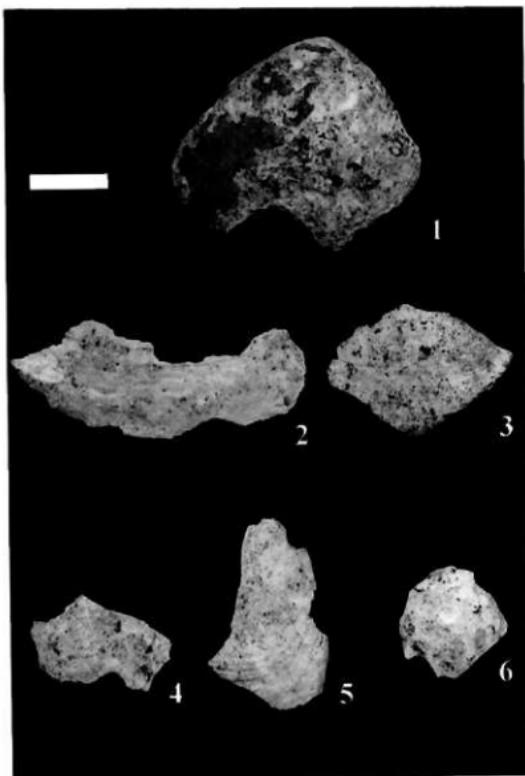


図37 岩井戸岩陰遺跡の貝殻片化石

## 第8章 まとめ

### 1 遺物の出土量

岩井戸岩陰遺跡では、土器2,630点、石器3,448点の計6,078点が出土した。

土器は縄文時代から近世まで様々なものが出土した。内訳は、接合前の破片数では、縄文土器522点(19.8%)、弥生土器118点(4.4%)、須恵器28点(1.1%)、古代土師器18点(0.7%)、中世土師器449点(17.1%)、灰釉陶器6点(0.2%)、山茶碗903点(34.3%)、中世陶器10点(0.4%)、中世磁器(0.2%)、近世陶器4点(0.3%)、近現代磁器533点(1.5%)となり、縄文土器・中世土師器・山茶碗・近世陶器が多く出土したことが分かる。これとは別に質量では、縄文土器3,342g(15.0%)、弥生土器858g(3.8%)、須恵器761g(3.4%)、古代土師器65g(0.3%)、灰釉陶器82g(0.4%)、中世土師器2,530g(11.3%)、山茶碗7,967g(35.7%)、中世陶器135g(0.6%)、中世磁器67g(0.3%)、近世陶器6,361g(28.5%)、近現代磁器175g(0.8%)となる。その種類別出土量の割合は、若干の変動はあるものの縄文土器・中世土師器・山茶碗・近世陶器が比率が高い。

表29 土器類器種別集計表

器種・分類名	口縁残存率 (x/12)	破片数	質量 (g)
縄文土器	—	522	3342
弥生土器	—	118	858
須恵器	26.2	28	761
古代土師器	2	18	65
中世土師器	75.8	449	2530
灰釉陶器	12	6	82
山茶碗	402.8	903	7967
中世陶器	0	10	135
中世磁器	1.2	4	67
近世陶器	96.8	533	6361
近現代磁器	27.7	39	175
合計	644.5	2,630	22,343

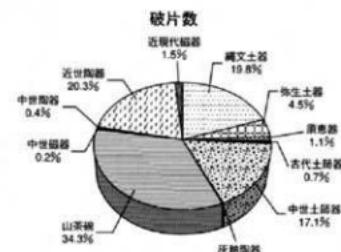


図38 土器組成図(破片数)

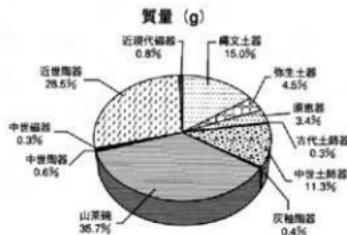


図39 土器組成図(質量)

次に出土土器の内容と土器組成<sup>11</sup>を時期別に述べる。時期区分は「第3章2節」で説明したようにIからV期までの5区分(縄文、弥生、古墳時代から奈良時代、中世、近世以降)とした。

縄文時代の土器は、型式間の断続はあるものの早期から晩期まで出土している。破片数・質量とともに早期<sup>12</sup>が多い傾向にある。このうち、S-1群としたすべての土器の胎土中に、白色砂粒が多く含む特徴が認められた。これらの粒子は単体の結晶物ではなく、結晶を包含する単体構造を示してい

る。基質は軟質の白色物で構成されることから、この土器群は流紋岩質の岩片を混和剤として利用したタイプの土器と推定される<sup>3</sup>。

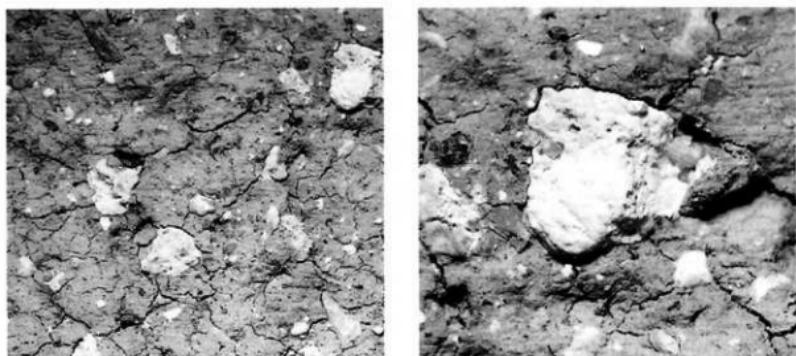


図40 押型文土器胎土中の岩片

弥生時代の土器は、前期と中期の土器が出土した。このうちY-1群<sup>4</sup>とした弥生時代前期の土器は胎土・色調が類似することから1個体分と思われる。

古墳時代の遺物の内訳は、須恵器（坏蓋・坏身・高坏・壺）、土師器（壺）である。須恵器の時期は5世紀末の坏蓋（46）<sup>5</sup>や7世紀前半の坏身（116）など時間幅をもつ。土師器は、松河戸式に特有の二重口縁壺（115）のほか、図示していないが遅間I式からII式に相当する高坏の胴部片が1点出土した。

中世の遺物の内訳は、灰釉陶器、山茶碗皿類、山茶碗皿類、陶器捏鉢、伊勢型鍋、古瀬戸、青磁である。このうち、古瀬戸は岩陰遺跡北側地点の単独出土資料で有耳壺がまとまって出土している。中世の土器組成の比率は、山茶碗皿類（72.7%）、山茶碗皿類（11.1%）、陶器捏鉢（0.2%）、伊勢型鍋・内耳鍋・羽釜（10.1%）、青磁（0.3%）と山茶碗皿類が圧倒的に多いのが特徴で、次に伊勢型鍋・内耳鍋。羽釜が続く。

灰釉陶器は、折戸53号窯式の碗1個体のみの出土である。山茶碗は、北部系・南部系の碗・皿ともに認められる。土器の内面は使用による摩耗痕が観察できるものが多い。北部系山茶碗は、谷廻間2号窯式の碗1個体分（49）を除くと、窯洞1号窯期～大洞東1号窯期におさまり、窯洞1号窯式・白土原1号窯式・明和1号窯式が多い傾向にある。一方、南部系山茶碗は第4型式から第6形式におさまり第5型式・第6型式が多い傾向になる<sup>6</sup>。

土師器は、中世前期のロクロ土師器や手づくね土器のほか、中世前期・後期の小皿が出土している。伊勢型鍋は、外面に煤が付着したものが多い。時期は、北村分類A5類にはおさまる。この他に、青磁が少量出土した。

近世以降の陶器は、18～19世紀の瀬戸美濃が大半で、湯呑み・碗・皿・鉢・擂鉢・捏鉢・片口・徳利・土瓶・鍋・瓶類の器種が認められる。

表30 繩文土器集計表

時期	分類名	破片数	質量(g)
早期	S-1群	83	691
	S-2群	6	31
	S-3群	10	80
	S-4群	29	195
前期	S-5群 a	16	122
	S-5群 b	5	31
	Z-1群	23	180
	Z-2群	21	63
中期	Z-3群 a	4	13
	Z-3群 b	3	8
	Z-4群	2	7
	Z-5群	4	48
後期	Z-6群 a	7	34
	Z-6群 b	8	34
	C-1群	9	192
	C-2群	9	55
晚期	C-3群	12	105
	K-1群	19	150
	K-2群	23	250
	K-3群	5	26
時期不明	B群	2	20
	a	26	245
	b	12	72
	c	5	40
	d	7	20
	e	172	630
		522	3342

表31 弥生土器集計表

時期	分類名	破片数	質量(g)
前期	Y-1群	34	145
	Y-2群 a	26	279
中期	Y-2群 b	13	211
	Y-3群 a	6	69
	Y-3群 b	39	154
	合計	118	858

表32 須恵器集計表

器種	口縁残存率(x/12)	破片数	質量(g)
壺蓋	12	3	213
壺身	8.6	6	167
高壺	5.6	7	178
壺	0	12	200
合計	26.2	28	761

表33 古代土師器集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	破片数	質量(g)
選間I~II	1	1	8
松河戸	1	4	65
時期不明壺	0	13	77
合計	2	18	65

表34 灰釉陶器集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	底部残存率(x/12)	破片数	質量(g)
碗	0	12	6	82
合計	0	12	6	82

表35 山茶碗(北部系) 碗類集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	底部残存率(x/12)	破片数	質量(g)
谷追間2	2.3	6.7	1	183
窯洞1	44.9	50.2	51	706
白土原1	59.4	69.4	102	689
明和1	83.7	21	137	635
大泊大削4	22.8	13.6	29	198
大泊大削新	0	3.3	1	8
大泊東1	0	6.2	2	15
時期不明	0	0	143	590
無高台	0	6.5	2	30
合計	213.1	176.9	468	3054

表36 山茶碗(北部系) 盆類集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	底部残存率(x/12)	破片数	質量(g)
谷追間2	0	0	0	0
窯洞1	22.2	24	11	128
白土原1	0	1.8	1	5
明和1	1	0	1	11
大泊大削4	1.2	0	2	4
大泊東1	0	0	0	0
時期不明	0	0	0	0
合計	24.4	25.8	15	148

表37 山茶碗(南部系) 碗類集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	底部残存率(x/12)	破片数	質量(g)
第4型式	8.2	17.3	21	367
第5型式	49.6	126.8	120	1607
第6型式	77.8	169.4	123	997
時期不明側部	0	0	128	1194
合計	135.6	313.5	392	4165

表38 山茶碗(南部系) 盆類集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	底部残存率(x/12)	破片数	質量(g)
第4型式	0	0	0	0
第5型式	0	2.8	1	5
第6型式	23.4	27.4	15	184
時期不明	5.2	1.6	1	20
合計	28.6	31.8	17	209

表39 中世陶器集計表

器種	口縁残存率(x/12)	底盤残存率(x/12)	破片数	質量(g)
捏鉢	0.9	10	390	
合計	0.9	10	390	

表40 中世土師器皿類集計表

分類名	口縁残存率(x/12)	底盤残存率(x/12)	破片数	質量(g)
ロクロ上師器	25.3	9	630	
手づくね成形土師器	12	3	143	
小野木A2b類	1	1	6	
小野木B2a類	1	10	48	
小野木B2b~2c類	1.3	2	12	
小野木B2c類	1	1	10	
井川H2類	8.8	8	187	
井川C1類	2.1	2	18	
井川C2類	10.7	11	59	
時期不明	1.6	61	217	
器種不明	0	14	100	
合計	27.5	122	557	

表41 中世土器類集計表

分類名	口縁残存率 (x/12)	破片数	質量(g)
伊勢型鍋	20.8	316	1922
内耳鍋	1	2	10
羽釜A3類	1	9	21
合計	48.3	327	1953

表42 その他の土器集計表

分類名	口縁残存率 (x/12)	破片数	質量(g)
土師器削堀	0	13	9
瓦質土器	0	4	9
合計	0	17	18

表43 古瀬戸集計表

分類名	口縁残存率 (x/12)	底部残存率 (x/12)	破片数	質量(g)
古瀬戸	0	0	10	135
合計	0	0	10	135

表44 青磁集計表

分類名	口縁残存率 (x/12)	底部残存率 (x/12)	破片数	質量(g)
青磁	1.2	0	4	67
合計	1.2	0	4	67

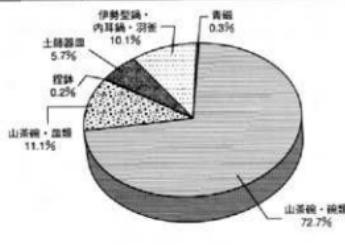


図41 中世の土器組成図

石器の内訳は石錐11点(0.32%)・石錐29点(0.84%)・石匙4点(0.12%)・刃器34点(0.99%)・RF135点(3.92%)・UF575点(16.68%)・楔形石器8点(0.23%)・剥片2087点(60.53%)・碎片122点(3.54%)・石核・分割鏽208点(6.03%)・石錐28点(0.81%)・磨石A(側刃に磨面を持つタイプ)17点(0.49%)・磨石B(表・裏面に磨面をもつタイプ)15点(0.44%)・凹石1点(0.03%)・敲石5点(1.74%)・礫器5点(0.15%)・石皿12点(0.35%)・砥石7点(0.2%)・打製石斧12点(0.3%)・泥岩製剥片69点(2%)・磨製石斧3点(0.09%)・玉類5点(0.15%)・火打ち石1点(0.03%)となり、製品と比べ剥片の割合が高い。

## 2 出土遺物の層位別状況と時期区分

岩井戸岩陰遺跡の土層は、基本的にI～X層の10層からなる。

I層からIII層は岩陰内からテラスにかけて緩やかな堆積をする。I層は表土層で少量の近・現代の施器が出土している。

II層は山茶碗、中世土師器、近世陶器が大勢を占める。遺物の大半がIII層上面で検出された中世の

表45 陶器類集計表

器種	口縁残存率 (x/12)	底部残存率 (x/12)	破片数	質量(g)
陶盆	14.5	7.2	50	239
石	19.2	26.3	118	778
皿	0	5.5	10	164
鉢	10.2	31.8	61	1190
搗鉢	0.4	2.8	12	294
程鉢	1.8	0	4	133
片口	15	18.5	65	737
德利	0	5.4	24	624
土瓶	12.1	3.3	34	386
鍋	19.8	16	101	723
瓶	3.8	8.8	39	996
不明	0	0	15	97
合計	96.8	125.6	533	6361

表46 磁器類集計表

器種	口縁残存率 (x/12)	底部残存率 (x/12)	破片数	質量(g)
石	5.2	3.3	11	45
皿	—	1.6	1	24
小瓶	3.8	0	7	15
伝瓶器	18.7	0	20	91
合計	27.7	4.9	39	175

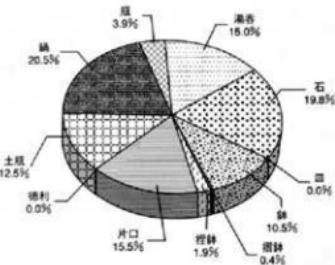


図42 近世の土器組成図

表47 石器種別集計表

品種	破片数
石核	11
石錐	29
石砲	4
刃器	34
RF	135
UF	575
楔形石器	8
鉗片	2087
鉗片	122
石核・分割核	208
石錐	24
磨石A	17
磨石B	15
刮石	1
敲石	60
螺旋	5
石盤	12
砥石	7
打製石片	12
泥岩剥離片	69
磨製石片	3
玉類	5
火打ち石	1
合計	3444

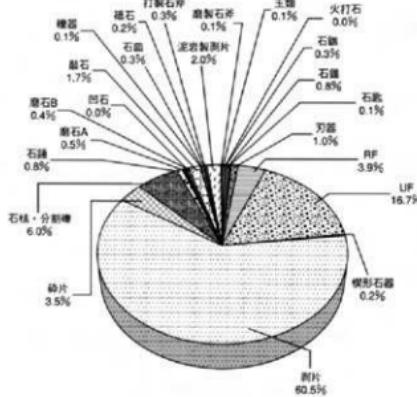


図43 石器種組成図

遺構の上面出土のものである。この他に少量ではあるが、須恵器も出土している。須恵器を層位別点数にみると、16点中11点がこの層の出土である。残りの5点が下位の層から出ていることを踏まえれば、本層が帰属層位と思われる。このように考えれば、Ⅱ層は古墳時代から中世までを包含する層といえる。Ⅲ層は、縄文時代前期から近世の遺物が出土する。このうち、縄文後期の土器、弥生土器がそれぞれの土器の層位別最大点数である。

IV層は、中世土師器1点のみの出土である。この堆積物は遺跡北側に厚く堆積する。崩積性の堆積物の可能性もあるが、角礫を多く含まないことから徐々に堆積したものと思われる。この間、テラス部分の北側は斜面地となるために一時活動が途絶えるようである。

V層になると、縄文時代前期・中期・後期、弥生時代の遺物が増加する。このうち、縄文時代前期と中期の土器は層位別にみると、最大点数となる。

VI層は岩陰内に部分的に堆積する層である。縄文時代後期・弥生土器が少量出土する。

VII層は前期の土器1点以外は早期後半土器となる。なお、VI層とVII層の間にはアカホヤ火山灰が堆積している（第7章第2節）。このことから前後を明確に区分できる。

VIII層からX層は早期前半の縄文土器が大勢を占める。VII層の土器とX層の土器には時期差はなく、接合例もみられる。

次に石器をみる。土器のように時期を細別することはできないが、火打ち石・管玉・有茎石錐を除けば、縄文時代のものと大別することは差し支えないと思われる。

火打ち石はⅡ層から出土した。近世のものと思われる。玉類はⅡ層とⅢ層で各2点ずつ出土しており、大きさ・形態から古墳時代のものである。有茎石錐は、形態から弥生時代のものである。その他の石器は、縄文土器と同じようにⅢ層・V層・VII層～X層が多い。鉗片が主体で時期を認定できるものが少ない。時期が認定できるものとして、石錐・石砲・磨石がある。石錐は、凹基無茎錐で脚が長く外反する。このタイプは早期前半に多く、当遺跡でもVII層から出土し、同時期の土器の出土状況

と相関関係にある。石匙は前期のものがV層から多く出土し、同時期の土器の出土状況と相関関係にある。一方、磨石は早期に特徴的な側刃を利用するもの（磨石A）が出土しているが、本来Ⅶ～Xに帰属するはずのものがⅢ層で多く出土する結果となり、混在している<sup>7)</sup>。

表48 岩井戸岩陰遺跡層位別土器出土量（点数）

器種・分類名		I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	トレンチ	合計	割合	
I期 縄文土器	早期前半	0	0	6	0	1	0	0	96	7	4	1	115	4.78%	
	早期後半	0	0	0	0	11	0	21	0	2	0	0	34	1.41%	
	中期	0	1	30	0	37	0	1	1	0	0	2	72	2.99%	
	中期	0	0	7	0	19	0	0	1	0	0	3	30	1.25%	
	後期	0	1	25	0	17	1	0	1	0	0	2	47	1.93%	
	後期	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0.08%	
II期	弥生土器	0	20	47	0	24	2	0	0	0	0	25	118	4.90%	
III期	須恵器	0	11	5	0	0	0	0	0	0	0	12	28	1.16%	
	古代土器	0	3	10	0	3	0	0	0	0	0	2	18	0.75%	
IV期	灰陶壺器	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0.25%	
	中世土器	0	292	30	1	26	0	0	0	0	0	100	449	18.65%	
	山茶碗	0	541	60	0	0	0	0	0	0	0	302	903	37.50%	
	中世陶器	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	4	10	0.42%	
V期	中世壺器	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	0.17%	
	近世陶器	0	191	12	0	0	0	0	0	0	0	0	330	533	22.3%
	近現代磁器	3	16	0	0	0	0	0	0	0	0	20	39	1.62%	
合計		3	1090	234	1	139	3	22	99	9	4	804	2406	100%	

※網フセ部分は、器種ごとの出土量が多い層位を示す。

表49 層位別石器出土点数集計表

器種・分類名		I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	トレンチ	合計	割合
石鏃	0	1	2	0	2	0	0	3	0	2	1	11	0.32%	
石鏃	0	0	0	4	9	1	0	2	10	3	0	29	0.84%	
石匙	0	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	4	0.12%	
刃器	0	3	4	6	0	0	0	13	2	3	3	34	0.99%	
石斧	0	8	20	13	9	2	7	20	22	13	21	135	3.92%	
U.F	0	20	36	3	148	2	6	170	64	32	98	575	16.68%	
橢形石器	0	0	3	0	1	0	1	3	0	0	0	8	0.23%	
剥片	18	49	136	61	266	70	81	556	350	145	355	2087	60.53%	
研片	3	0	15	6	32	6	1	39	7	0	13	122	3.54%	
石核・分割核	1	0	13	6	23	6	5	73	26	17	38	206	0.03%	
石錐	2	4	3	1	6	2	0	1	0	0	5	24	0.81%	
磨石A	0	1	4	0	1	0	0	2	2	3	4	17	0.49%	
磨石B	0	0	2	3	3	0	0	4	3	0	0	15	0.44%	
凹石	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.03%	
敲石	3	2	1	1	7	4	2	16	3	6	15	60	1.74%	
雕器	0	1	2	0	0	0	0	1	1	0	0	5	0.15%	
石皿	0	0	0	0	0	0	0	3	3	3	3	12	0.35%	
敲石	0	0	0	5	0	0	0	1	1	0	0	7	0.20%	
打製石斧（泥岩製）	0	0	3	2	3	0	0	0	2	2	0	12	0.35%	
泥岩製剥片	0	4	4	1	2	0	0	24	16	5	13	69	2.00%	
磨製石斧	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	3	0.09%	
玉期	1	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0.15%	
火打石	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.03%	
合計		28	95	252	112	515	95	103	934	515	236	565	3448	100%

※網フセ部分は、器種ごとの出土量が多い層位を示す。

一部下層からの移動が見られると、単純に出土層位や出土レベルで文化層を設定できない。確実に時期を認定できる層位的な資料は、アカホヤ火山灰の堆積以前の層である早期後半の条痕文が主体となるⅦ層とその下層の押型文土器が主体のⅧからX層のものと言える。

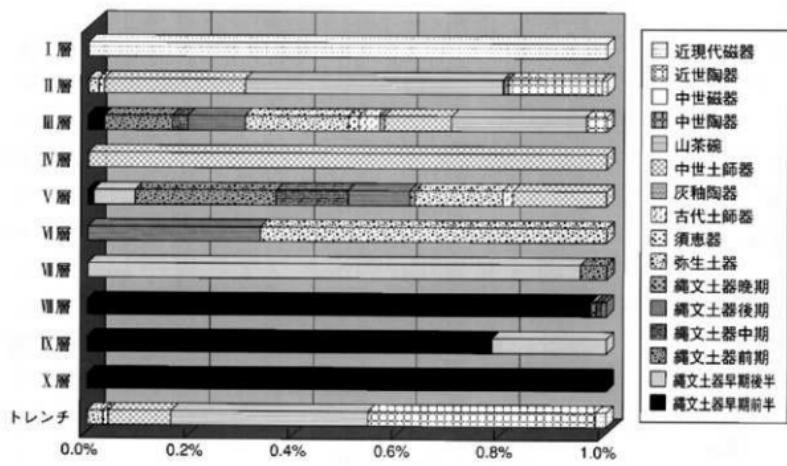


図44 土器の層位別出土状況

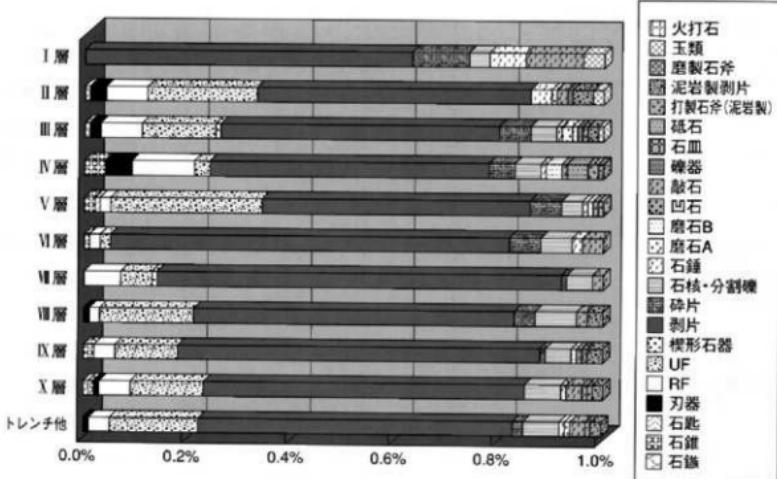


図45 石器の層位別出土状況

### 3 遺物の分布状況

図46は、調査前と調査後の平面図を重ね合わせたものである。調査後の岩陰の輪郭は、調査前と比べ、岩陰内入り口付近の表面積が広がる。この部分は直立して作業するには困難なスペースであるが、Ⅲ層上面からおおよそ祠状となる。また、岩陰奥の様子も変化する。岩陰の岩盤が奥壁から入り口に向かって下に傾斜するため、岩陰奥は下層に行くほど岩盤が露出する。堆積土が少ないため、当然のことながら結果的に遺物は希薄となる。このように岩陰は下層を掘り下げると、岩陰内部の表面積や形、傾斜が変化する。このことを考慮にいれ、時期ごとに分布状況を説明する。

縄文時代の土器は、岩陰内側壁（南側）に沿って集中する。一方、石器は主に岩陰内の中心に近い部分に集中する。南山大学試掘調査のD・Eトレンチ付近も石器類が集中したことが想定される。岩陰奥部分は堆積土が薄いが、石器類は点在する。このことから、岩陰内全体を利用して石器製作を行っていたことが想定できる。また、石器類が岩陰内全体に分布していることや石器を包含する土層の亂れもなく堆積していることから、石器製作時に生じた不要な剥片・碎片類を掻き出し、側壁等に廃棄する行為はなかったことが想定される。

弥生時代の土器は、岩陰内全体と雨垂れ付近に分布する。特に弥生前期壺（141）は1個体分あり、岩陰内側壁（南側）の祠状になる部分から出土している。

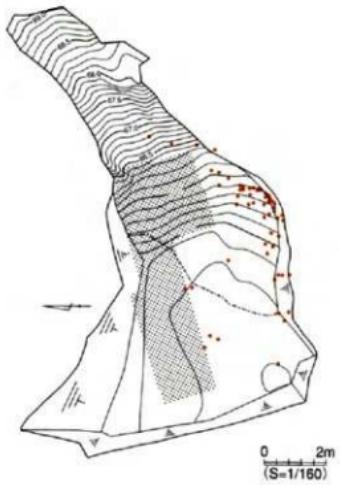
古墳時代の土器や玉類は雨垂れ付近側壁（南側）に分布する。

中世の土器は、雨垂れ付近、集石遺構2付近、岩陰奥に点在する<sup>6)</sup>。

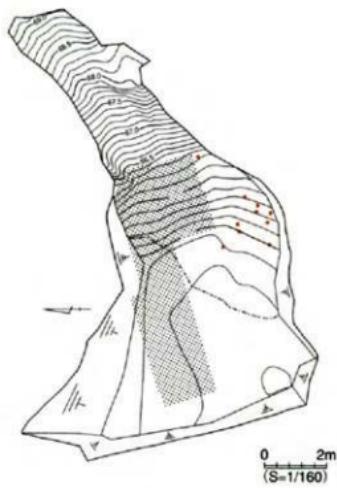
近世以降は、岩陰奥に集中する傾向にある。



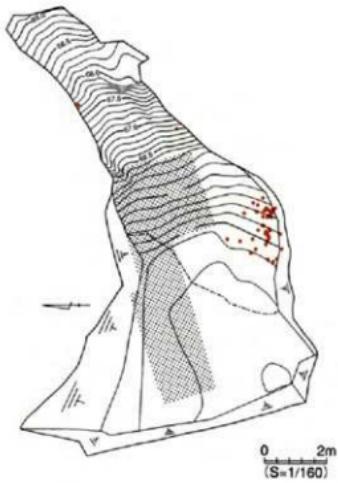
図46 調査前と調査後の地形図



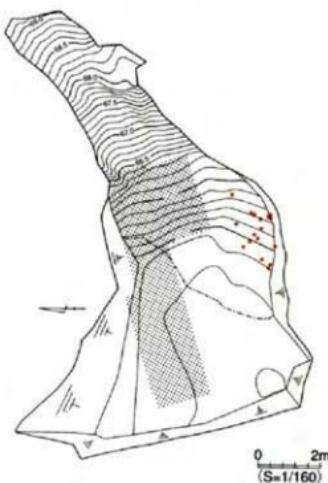
縄文早期（押型文）



縄文早期後半（条痕文）



縄文前期



縄文中期

図47 時代別土器出土状況図①

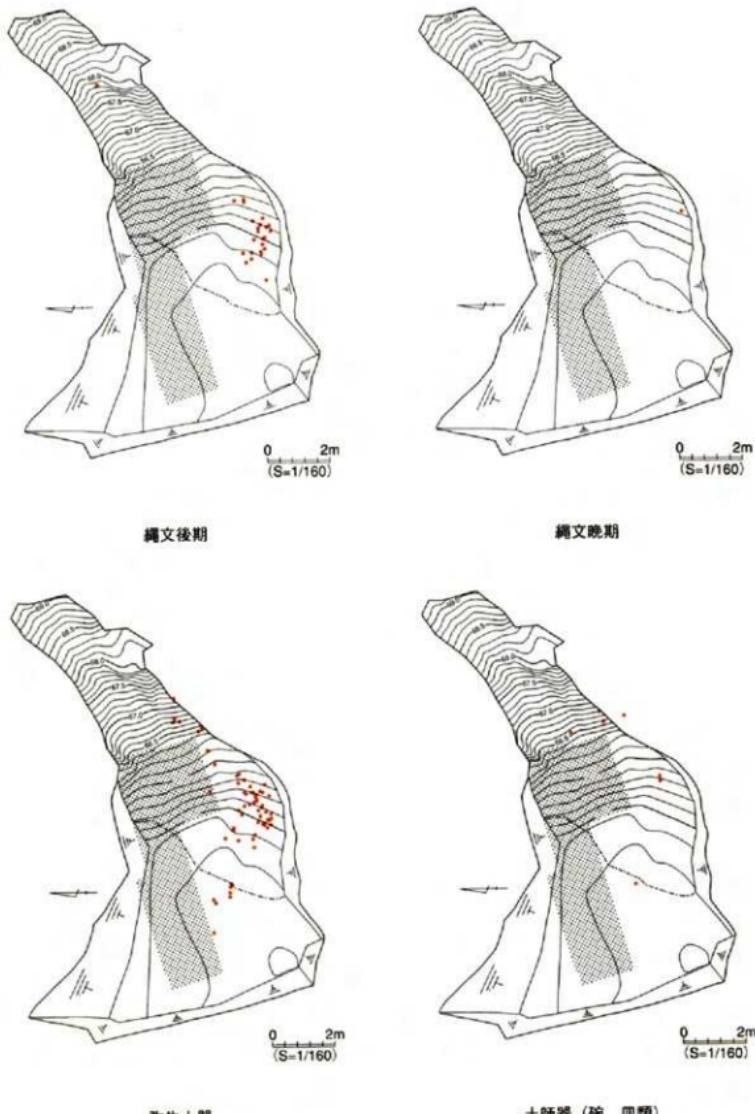
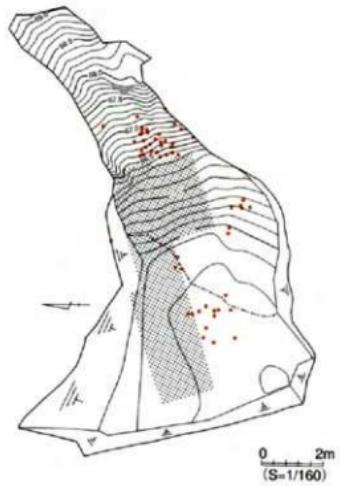
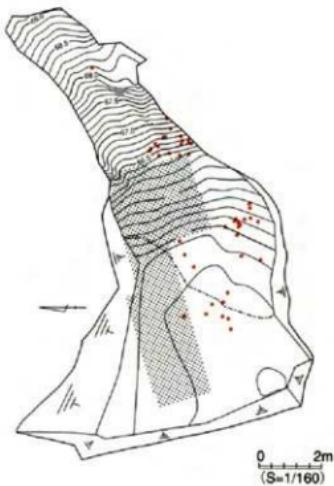


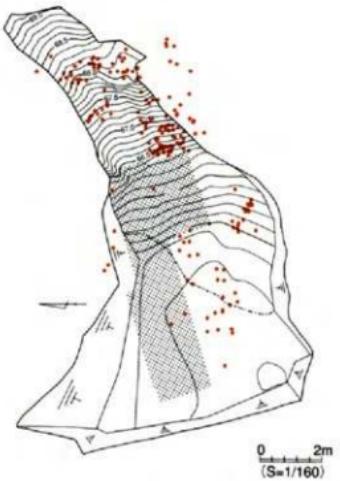
図48 時代別土器出土状況図②



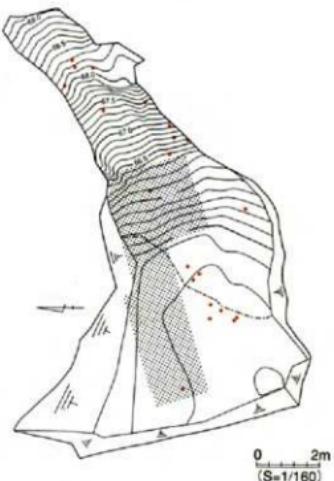
山茶碗



土師器（伊勢型鍋）

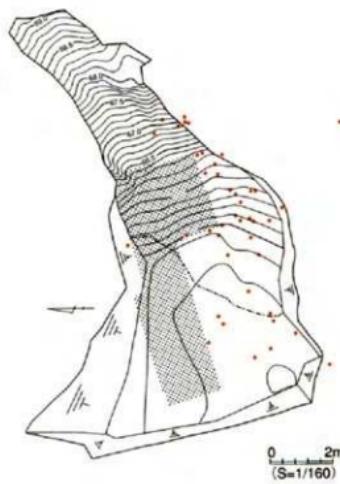
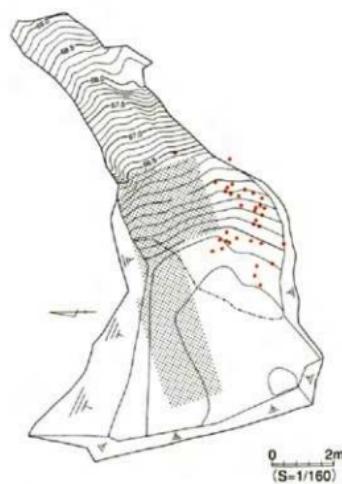
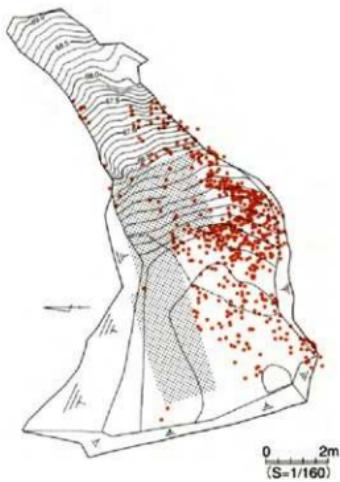
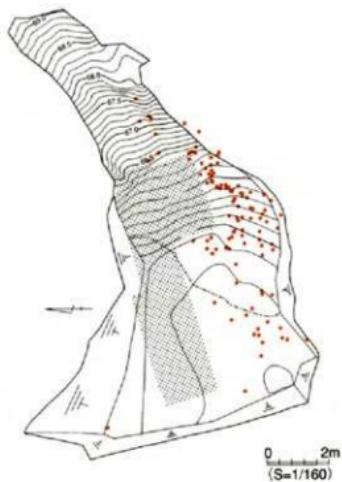


陶器



磁器

図49 時代別土器出土状況図③



打製石斧および打製石斧に伴う剥片

図50 石器器種別出土状況図①

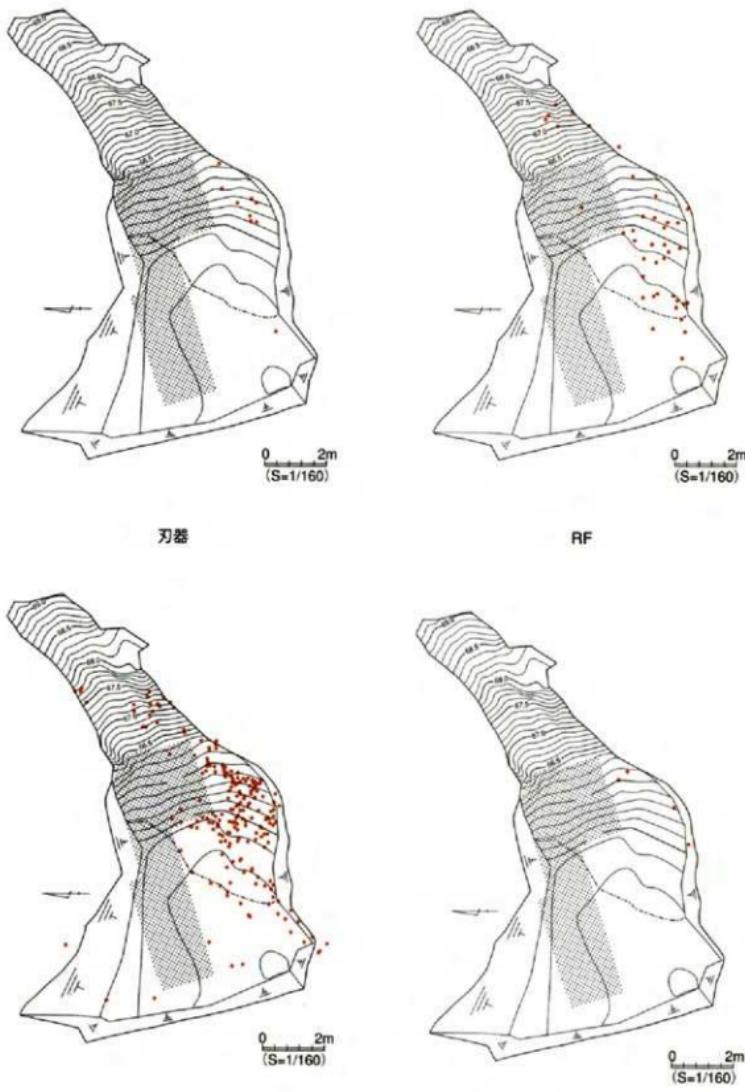


図51 石器種別出土状況図②

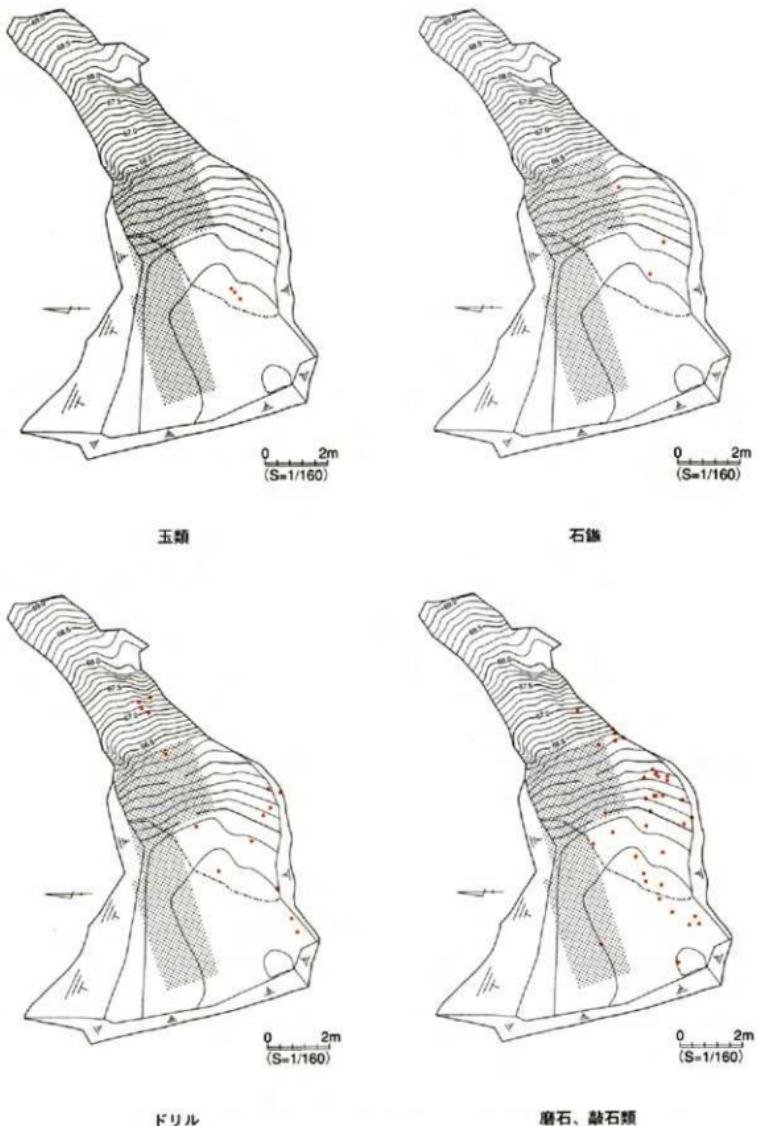


図52 石器器種別出土状況図③

#### 4 縄文時代早期の石器について

ここでは時期認定ができる早期後半（Ⅶ層）と早期前半（Ⅷ～X）の石器のうち、量的に安定する早期前半（Ⅸ～X）群について説明する。

##### ①器種組成及び器種について

早期前半の石器の内訳は、石鎌5点（0.3%）・石錐15点（0.9%）・刃器18点（1.1%）・RF55点（3.3%）・UF266点（15.8%）・ビエス・エスキュー3点（0.2%）・剥片1051点（62.3%）・碎片47点（2.7%）・石核・分割蝶121点（6.9%）・石錐1点（0.4%）・磨石A（側辺に磨面を持つタイプ）7点（0.4%）・磨石B（表・裏面に磨面をもつタイプ）7点（0.4%）・円石1点（0.1%）・敲石25点（1.5%）・疊器2点（0.1%）・石皿9点（0.5%）・砥石2点（0.1%）・打製石斧4点（0.2%）・泥岩製剥片45点（2.7%）・磨製石斧3点（0.2%）である。以下、器種ごとに説明を行う。

狩猟・漁獵具として石鎌・石錐が出土している。石鎌は脚が長く、外反する<sup>10</sup>。1点を除き、完形である。石錐は打欠石錐1点のみの出土である。早期前半の石錐の報告例は少ないが、当遺跡において早期前半にともなう<sup>11</sup>。

植物質食糧採集・調理加工工具は、打製石斧・石皿・磨石・敲石がある。打製石斧は、河原石を素材とし、形状をあまり変形させることなく刃部・基部を整形するものが多い。石皿は自然疊の平坦面をそのまま使用しており、岩痕・擦痕・敲打痕といった使用痕の形成は弱い<sup>12</sup>。磨石は側辺に磨面を持つタイプと表・裏面に磨面をもつタイプが同量出土している。側辺に磨面を持つタイプは早期の多いが、このうち、1点は断面が三角形でその縁辺を使用する特殊磨石（穀磨石）である。

加工工具として磨製石斧・楔形石器・疊器がある。磨製石斧は打製石斧と同様に河原石を素材とし、形状をあまり変形させることなく、刃部・基部を整形するものが多い。疊器は多様な形態があるが、刃部を形成するもの他に、円疊素材で両端に潰れ痕が観察できるものがある<sup>13</sup>。概観すると、各器種は早期前半の特徴を有している。

組成<sup>14</sup>については、図53・図54で早期前半の遺跡の石器との比較をした。比較する遺跡は、当遺跡と同じような岩陰規模で川側に位置する港町岩陰遺跡、集落跡であり石材原産地に近い上ヶ平遺跡、集落跡である富田清友遺跡である。これをみると、剥片と製品の割合やスクレイパー・RF・UFといった剥片石器の割合は、港町岩陰遺跡と類似する。しかし、当遺跡における狩猟・漁獵道具は少なく、植物質食糧採集・調理加工工具や加工工具の割合が多い傾向にある。この傾向は集落跡である富田清友遺跡と類似する。

##### ②石材組成について

早期前半（Ⅸ層からX層）の石器石材を16に大別し（表3）、さらに原疊面の形状（円疊・角疊）を観察し、石器素材の獲得方法を以下の3タイプに整理した（石器類の出土量は、点数・質量を計測し、石材別に図56にまとめた）。

第1に、遺跡の前を流れる武儀川から採取される円疊素材のもの（石材番号1、2、4～7、13～15）である。1（安山岩）、2（安山岩質火砕岩）、4（ドレライト）、5（流紋岩質溶結凝灰岩）、6（砂岩）は磨石・敲石・円石に多く利用される。7（泥岩）は打製石斧に多く利用される。13～15（チャート）は剥片・石核が多い。その大部分は粗悪な素材で、目的的に剥片を作出した資料は少ない。製品としては、石鎌、スクレイパー、石錐がある。

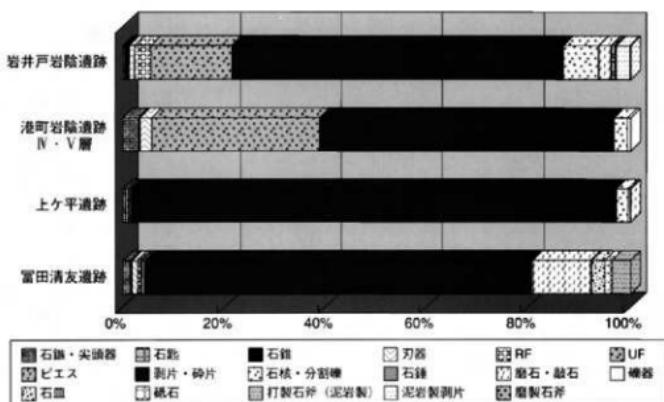


図53 早期前半の石器組成図1（石核・剥片を含む）

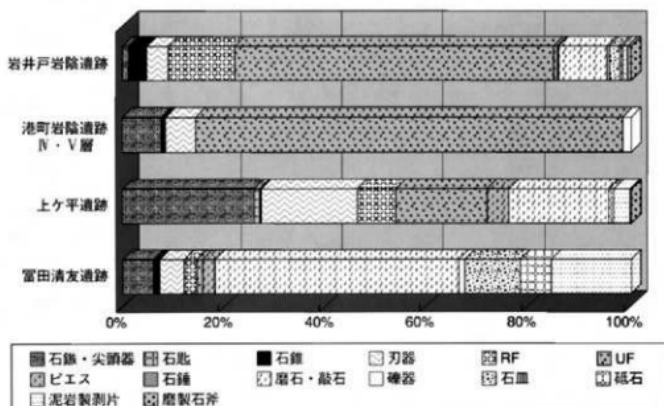


図54 早期前半の石器組成図2（石核・剥片を含まず）

第2に半径10km以内の尾根を隔てた洞戸・美濃方面（板取川および長良川）で採取される円礫素材のものである。9（安山岩）、11（細粒凝灰岩）、12（頁岩）がある。9は長良川上流域を供給源とする石材で長良川中流域で採集可能である。磨石に利用される。11・12は板取川で採取できるもので剥片が多い。出土量はチャートより少なく、また、石核・剥片の割に製品は少ない<sup>10</sup>。

第3に半径10km以外の地域から採取される角礫・円礫素材のもので、8（下呂石）や10（サスカイト）がある。剥片・製品のみで石核はない。サスカイトは3点出土した（円礫1点、角礫2点）が、いずれも剥片である。下呂石はRF1点（縫面なし1点）、剥片8点（円礫3点、角礫3点、縫面なし

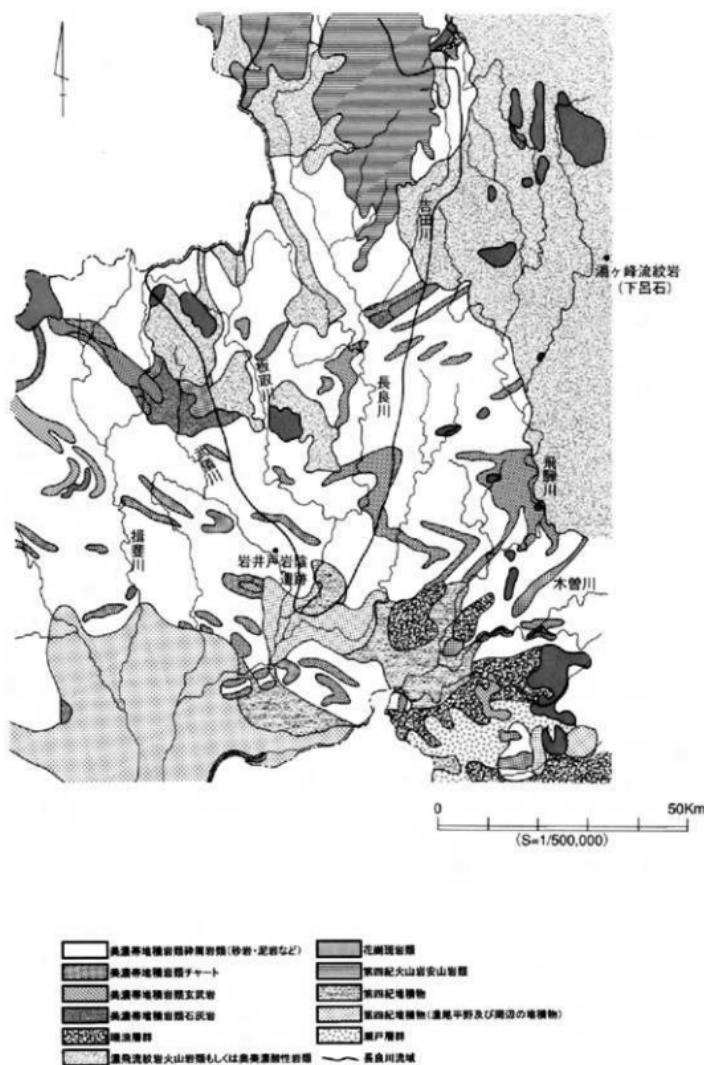


図55 長良川流域周辺の地質図

2点) 破片5点(縫面なし5点)が出土した。円鏃は原縫面に爪を残すものが多いため、金山付近採取と思われる<sup>15)</sup>。

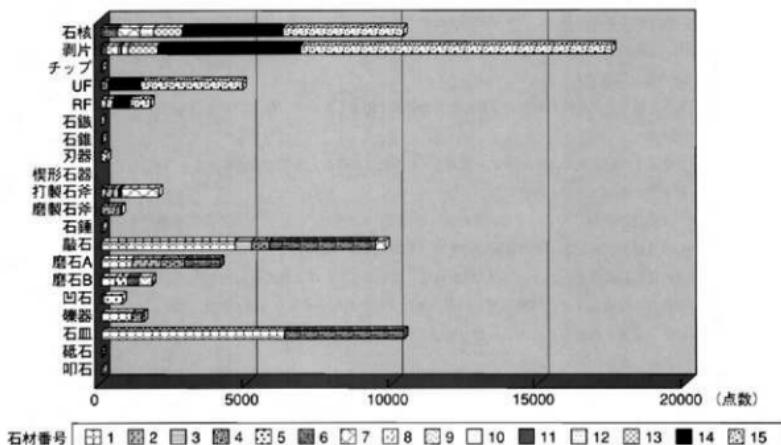


図56 早期前半の石材組成図

## 5 結語

岩井戸岩陰遺跡の堆積状況は安定して堆積し、その直上層のアカホヤ火山灰の堆積によって早期の石器群を明確に区分することができる。縄文早期の遺物が非常に多く、石器組成をみると、剥片に比して製品の割合が少ない。また、石器はチャート製の河原石を素材とするものが大半であり、石材は前を流れる武儀川で調達可能である。石器出土状況は、雨垂れラインの内側を中心に岩陰内外にまんべんなく出土しており、岩陰の側壁等に掻き出される状況は確認できなかった。このような出土状況と剥片の多さは、石器製作するために一時的に使用した場を想定できる。しかしながら、石材組成や石器組成からは一概にいうことはできない。石材は長良川・板取川流域で確保できる石材が一定量出土している。また、少量ではあるが、サスカイトや下呂石が出土している。石器組成は狩猟・漁労用具に偏らず、一般集落で出土する磨石・敲石・石皿・石錐が出土する。このことから、岩陰が単なる石器製作としての場ではなく、多様な用途に利用された事例といえる。

弥生時代になると、遺物は、岩陰内を中心に出土する。古墳時代は、須恵器と玉類が雨垂れ付近岩陰内南側に、中世以降は、集石造構上面からまとまって出土している。一般に、弥生時代～古墳は墓、奈良時代以降は祭祀の場として岩陰内を利用することが多いことをふまえれば、これらの行為の場を想定しうる。しかしながら、こうした行為は同時期に存在する周辺の集落遺跡との関係の中で理解する必要がある。周辺での発掘事例の少ないとから、今後の発掘調査等の考古学的な成果を待って各遺物の組成のありかたを評価する必要がある。

## 注

- 1) 遺物の計測方法は《宇野1992》に従ったが、手づくね底形の土師器の場合は、残存率が1.0/12以下の破片はすべて1.0/12に切り上げてカウントした。また、山茶碗については、口縁部のみでの型式認定が困難なため、底部についても3/12、6/12、9/12、12/12の単位でカウントした。なお、計測・分類に際して小野木学の助言と協力を得た。
- 2) 藤根久氏のご教示による。なお、このタイプの流紋岩の地質は板取川流域の洞戸村に存在する。河川縦探集の結果では、板取川のほか、遺跡の前を流れる武儀川でも採取できることを確認した。また、岩井戸岩陰遺跡XII層の礫層および遺跡西側100m付近の段丘礫層でも一定量確認した。
- 3) 亞流の遠賀川系土器で、本遺跡の付近では美山町九合洞窟で出土している（鈴木2001）。
- 4) TK47型式と思われる。
- 5) 中濃地域は5型式までは南部系山茶碗が広く流通し、6型式は南部系と北部系は両者が多く共存し、7型式以降は北部系が優位になる傾向がある（小野木1997）。
- 6) 伊藤正人氏、水野浩之氏のご教示による。水野氏によれば、名古屋市内において江戸時代後期のものは、ほとんど岐阜県養老産のものを使用しており、それ以前は、チャートや石英質の円窓を打削して使用しているものが多いようである。当遺跡出土の火打ち石は養老産に近いため、江戸後期に使用されたものと考える。
- 7) 打製石斧も同様のことが言える。打製石斧と同様の泥岩素材の測片が層面から多く出土した。これらは泥岩製の打製石斧の製作時に生じた剥片と思われるが、打製石斧は山層からV層にかけて多く出土しているため、層位的には同様の傾向を示さない結果となった。
- 8) 集石遺構2の部分は遺物が多量に出土したため、数点をまとめて1点としてトータルステーションを用いてとりあげている。そのため、分布上では、集石遺構2が周辺に遺物が少ないように見えるが、出土量は多い。
- 9) このタイプの石器の類例として同町武芸八幡遺跡、下呂町上ヶ平遺跡があげられる。
- 10) 早期押型文にともなう石鉢は少ない。確実に早期前半の打欠石鉢といえるのは、高山寺貝塚第3貝塚資料の中の1点である。この段階には、打欠石鉢を利用した網漁が想定できるが、今後他の遺跡での同時期の類例を得て再検討する必要がある（2002大下）。
- 11) 石皿は9点あるが、このうち使用痕が明瞭に観察できるのは1点のみである。他の8点は、明瞭に使用痕が観察できるとはいえないが河原縞を含まない層からの出土した搬入縞である。石皿として利用された可能性が大きいため、右側に含めた。
- 12) このタイプは複形石器に含めるべきという意見がある（2002大下）。
- 13) 石器の分類基準は報告者によって異なるため、石器相成はあくまでも傾向として表を載せた。なお、対象は報告されているもののうち、概ね時期認定できる資料である。
- 14) ただし、製品の少なさは容易に素材を獲得できる板取川沿いの洞戸村高見遺跡・底津遺跡でも同様の傾向が見られるため、採集場所による違いよりは、むしろ石材による違いと見るべきかもしれない。
- 15) 下呂石の円錐・角錐の識別及び供給地については、齊藤基生氏の指導を受けた。

## 参考文献

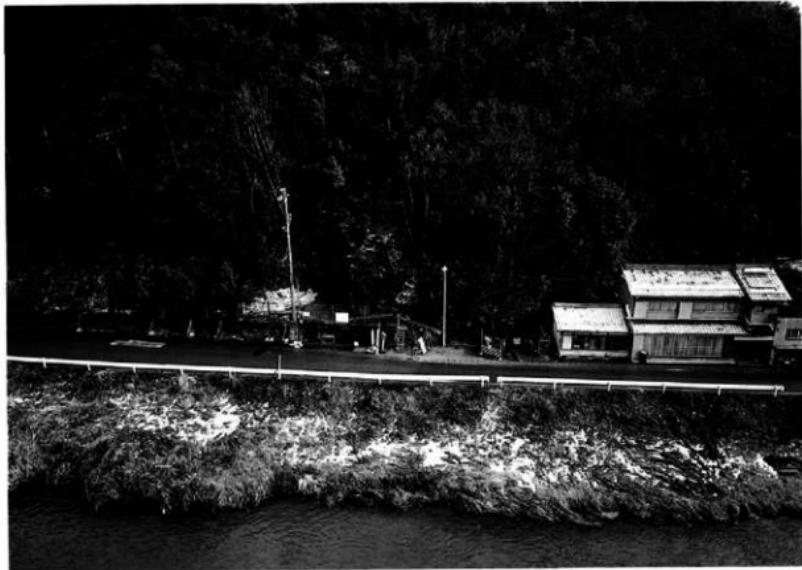
- 赤塚次郎 1990 「V 考察」「廻間遺跡」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集)、  
(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」「松河戸遺跡」(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集)、(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 岩田 修 2000 「第2章第1節 地形・地質環境」「上ヶ平遺跡」Ⅰ  
(財)岐阜県文化財保護センター
- 内堀信雄 1999 「城之内遺跡-長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査-」  
岐阜市教育委員会
- 内堀信雄 1999 「城之内遺跡-北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査-」  
(財)岐阜市教育文化振興事業団
- 宇野隆夫 1992 「食器計量の意義と方法」「国立歴史民族博物館研究報告」第40集、  
国立歴史民族博物館
- 大下明 2002 「近畿地方とその周辺地域における押型文土器期の石器群について」「関西  
縄文文化研究会2002年度研究大会プレ発表資料」
- 大下明・久保勝正 1998 「V. 石器・石製品」「鴻ノ木遺跡」(下巻編)  
三重県埋蔵文化財センター
- 小野木学 1997 「堀田城之内」(財)岐阜県文化財保護センター
- 小野木学 1997 「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」  
「美濃の考古学」第2号 美濃の考古学刊行会
- 小野木学 2000 「頸」「南遺跡」(財)岐阜県文化財保護センター
- 北村和宏 1996a 「尾張の「伊勢型鍋」「第4回東海考古学フォーラム1996 鍋と壺 その  
デザイン」東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 北村和宏 1996b 「尾張の羽釜」「第4回東海考古学フォーラム1996 鍋と壺 そのデザイ  
ン」東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 工楽普通・鈴木公雄ほか 1998 「高蔵式土器」「日本土器辞典」雄山閣
- 佐野康雄・小野木学 1995 「飛瀬・底津遺跡」岐阜県文化財保護センター
- 澤村雄一郎 1997 「まとめ 各器種の概要」「北小木古窯跡群・大沢13号古窯跡」  
(財)岐阜県文化財保護センター
- 鈴木元 2001 「荒尾南遺跡Ⅰ」「大垣市埋蔵文化財調査報告書」第10集  
大垣市教育委員会
- 関高校社会研究部 1959 「関市周辺の先史遺跡」
- 田口昭二 1983 「美濃城」(考古学ライブラリー17)、ニューサイエンス社
- 趙哲済 1983 「遺構検出面の便宜的な呼称」「長原遺跡発掘調査報告書」Ⅲ  
大阪市文化財協会
- 寺村光晴 「玉造とその流通」「ものづくりの考古学」、東京美術
- 成瀬正勝他 2000 「砂行遺跡」(財)岐阜県文化財保護センター
- 長谷川幸志・小野木学 1998 「高見遺跡」(財)岐阜県文化財保護センター
- 八峰 興 2001 「柱状高台考」「中世上器研究論集・中世上器研究会20周年記念論集-」
- 八賀哲夫・岩田修 2002 「上ヶ平遺跡」Ⅱ(財)岐阜県文化財保護センター
- 早川正一・梶山勝他 1973 南山大学『文化人類学研究会会報』vol.7 No.1  
「岩井戸岩陰遺跡調査報告」南山大学文化人類学研究会考古学部
- 藤澤良裕 1994 「山茶輪研究の現状と課題」「研究紀要 第3号」三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良裕 1998 「瀬戸市史 陶磁史篇一~六」瀬戸市
- 藤田英博・高木宏和 2002 「美濃(飛騨)地域」「弥生土器の様式と編年 東海編」木耳社
- 町田勝則 1993 「第3章第3節(2)石器」「北村遺跡」(財)長野県埋蔵文化財センター
- 水野祐之 2001 「名古屋市の火打石隨考」「名古屋市見晴台考古資料館研究紀要」第3号  
名古屋市見晴台考古資料館

- 武芸川町史編纂委員会 1979 「武芸川町史」武芸川町
- 武芸川町郷土史研究会 1986 「武芸川の石造物」
- 武芸川町郷土史研究会 1998 「武芸川町古墳調査報告」
- 村瀬泰啓 2002 「畠田清友遺跡」(財)岐阜県文化財保護センター
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心にして—」『九州歴史資料館研究論集』4
- 矢野健一 1993 「押型文土器の起源と変遷—いわゆるネガティブな梢円文を有する押型文土器群の再検討—」『考古学雑誌』第78巻 第4号
- 吉田英敏 1979 「港町岩陰遺跡発掘調査報告書」(美濃市文化財調査報告第1号)、  
美濃市教育委員会

# 図 版



1 岩井戸岩陰遺跡遠景（西から）



2 岩井戸岩陰遺跡全景（西から）

図版 2



1 遺跡遠景（西から）



2 遺跡近景



3 テフラ分析部分土層



4 土層堆積状況



5 第1号集石遺構



6 第2号集石遺構

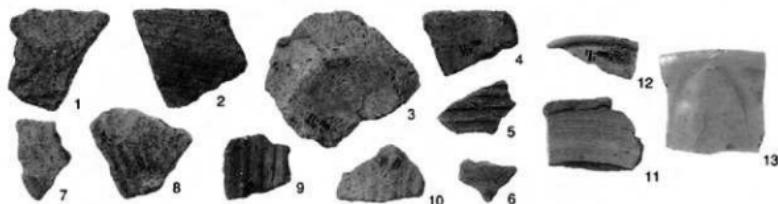


7 岩陰の様子

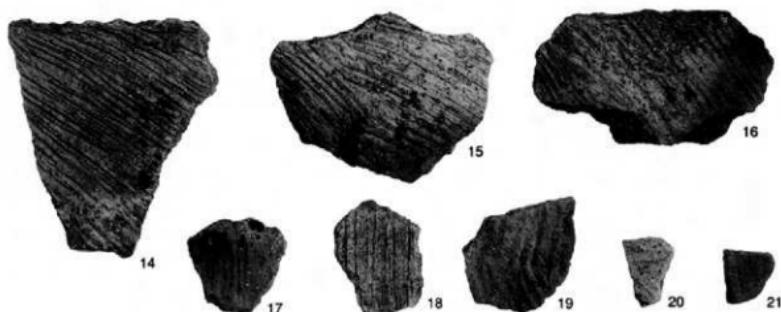


8 岩陰北側のトレンチ

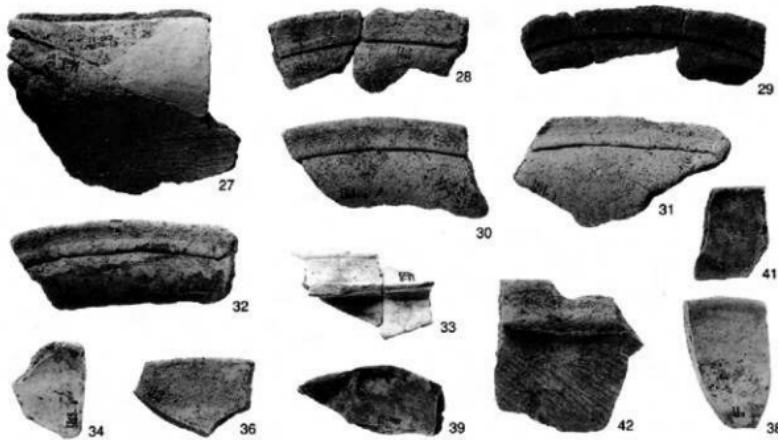
図版 3



1 トレンチ出土の遺物



2 II層出土の遺物① (II期)



3 II層出土の遺物② (IV期)

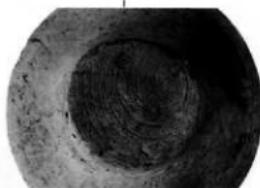
図版 4



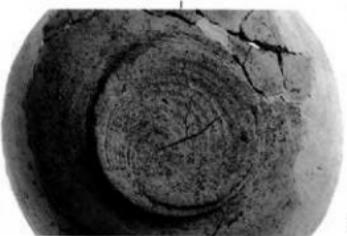
23



25



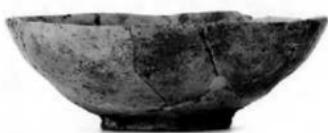
23



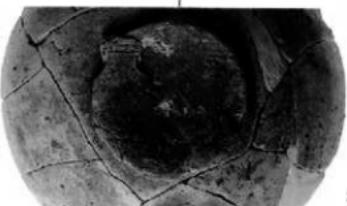
25



24



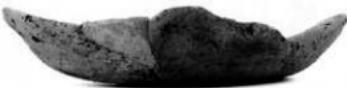
26



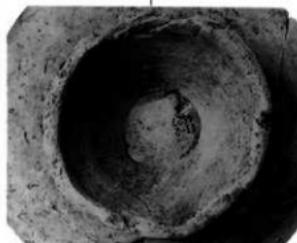
26



24



35



24

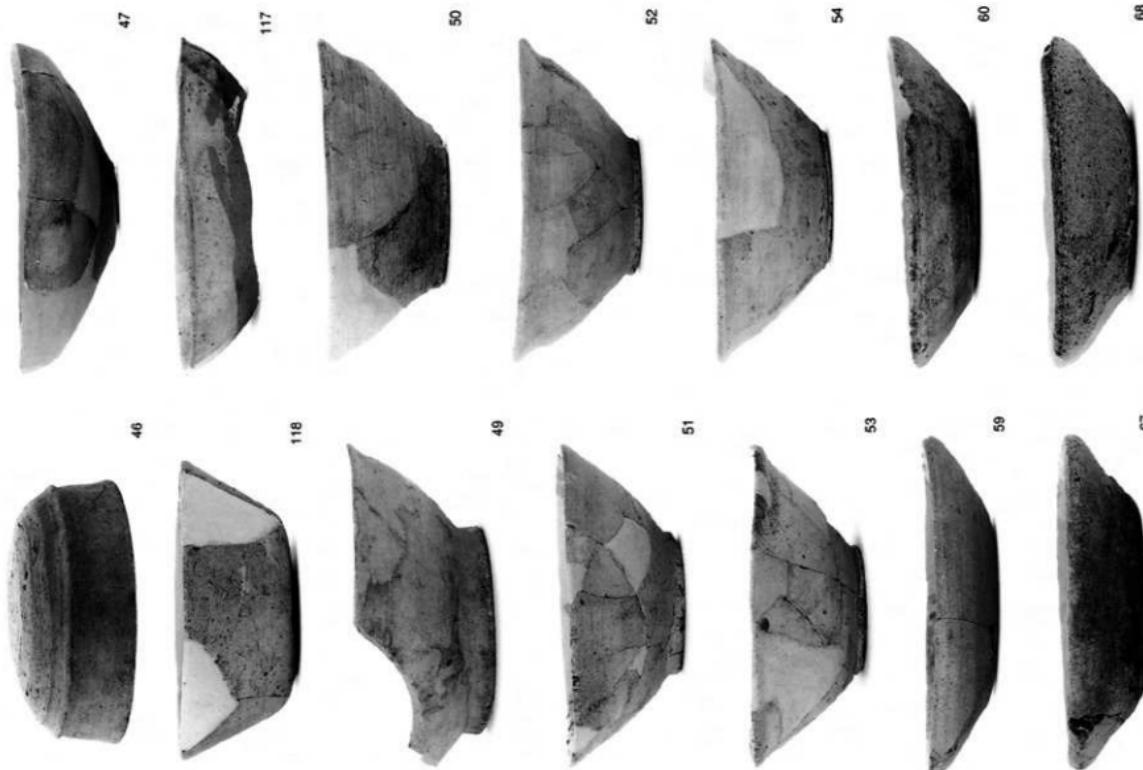


37



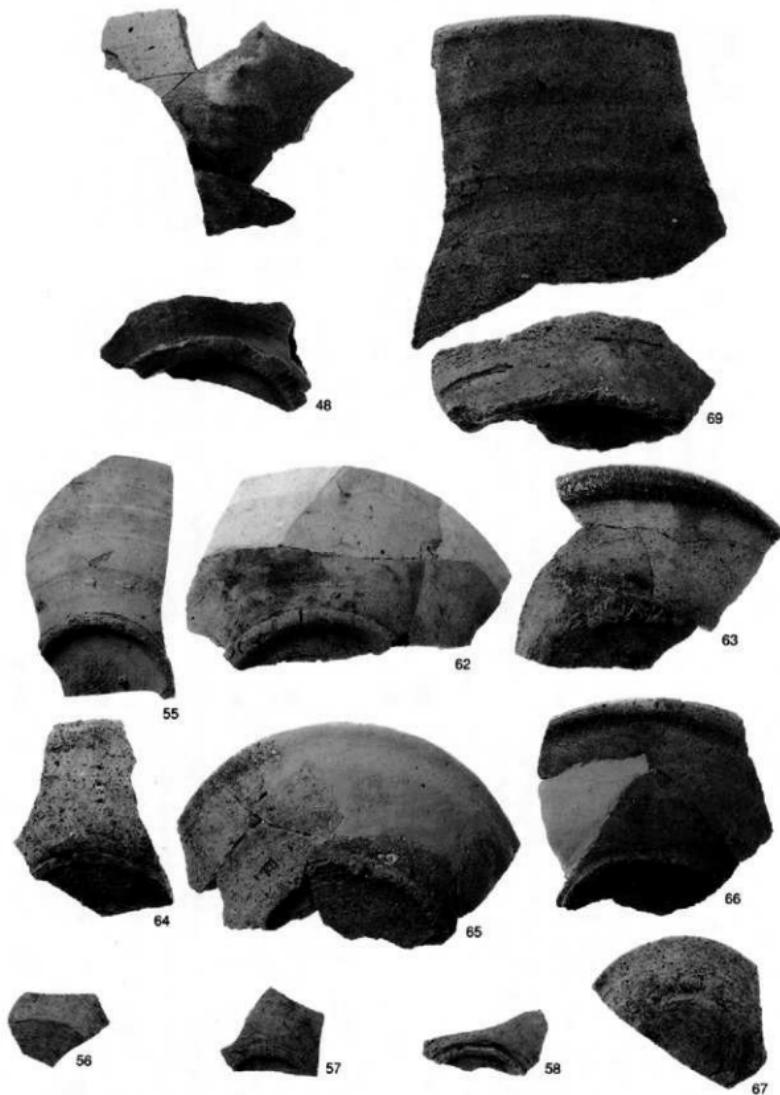
40

II 層出土の遺物③ (IV期)

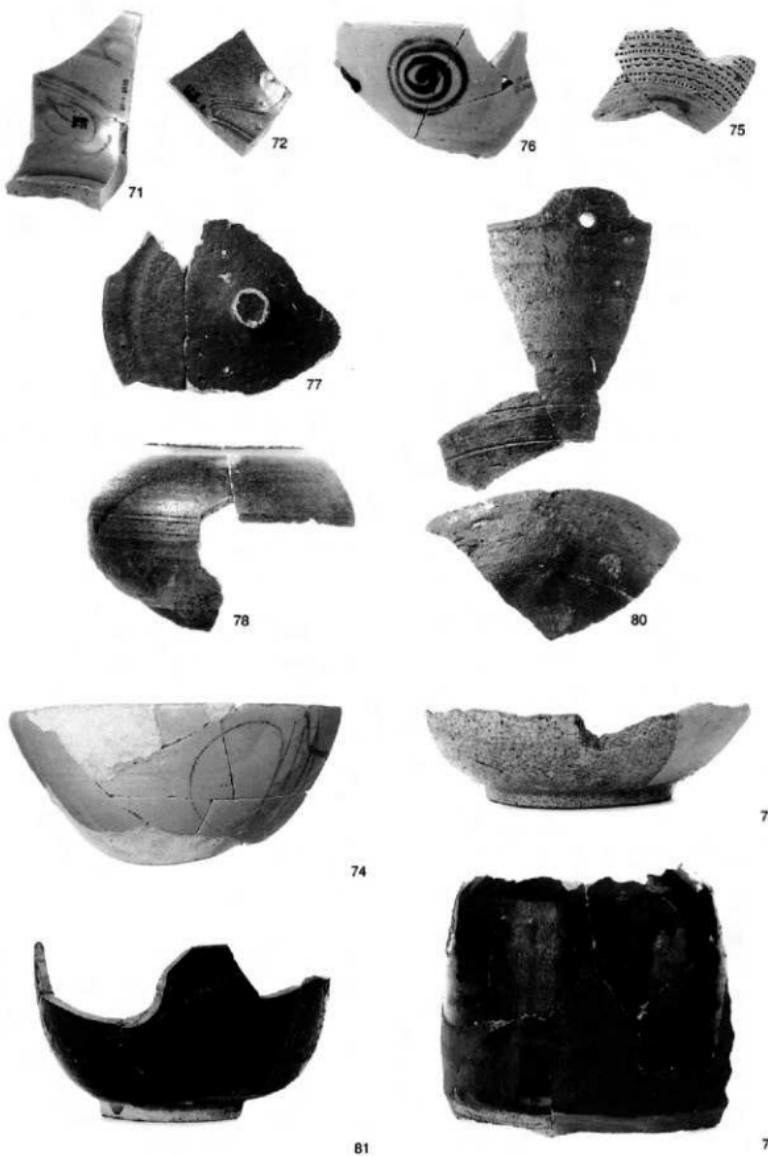


II 層出土の遺物④（Ⅲ～Ⅳ期）

図版 6

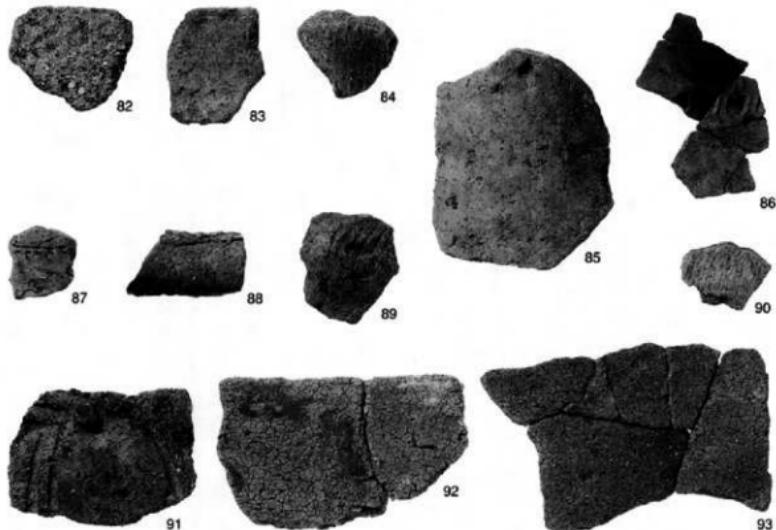


II層出土の遺物⑤ (IV期)

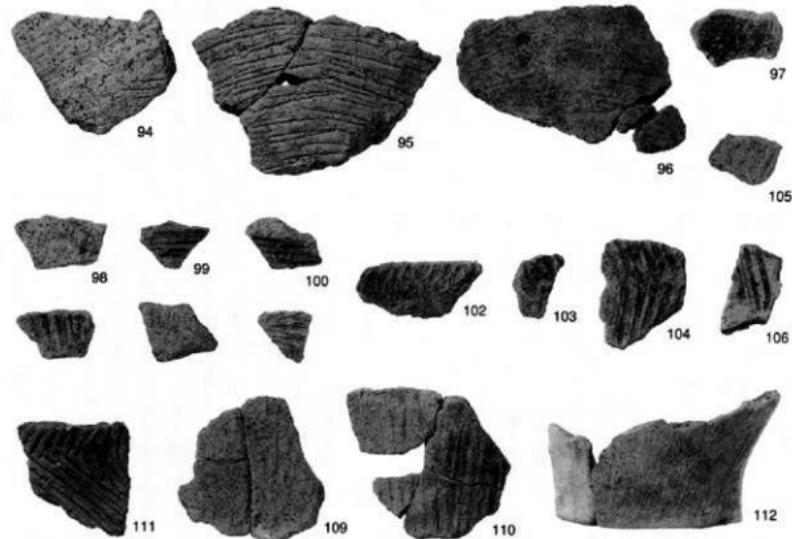


II層出土の遺物⑤(V期)

図版 8



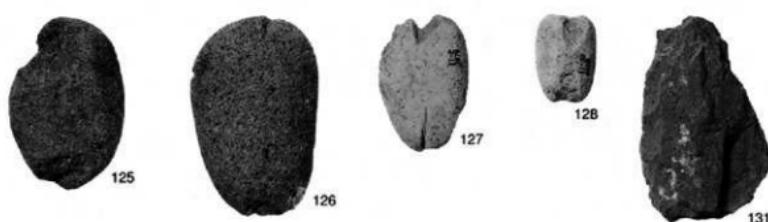
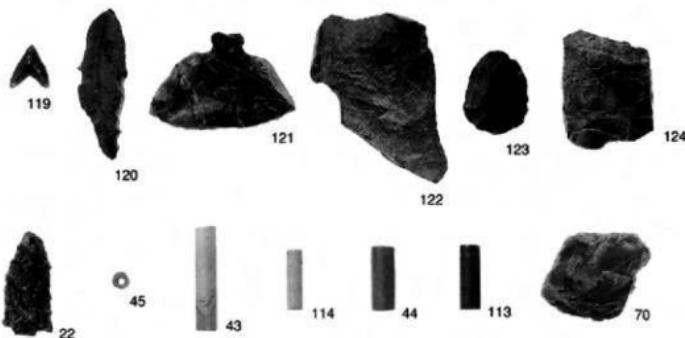
1 III層出土の遺物①(Ⅰ期)



2 III層出土の遺物②(Ⅱ期)

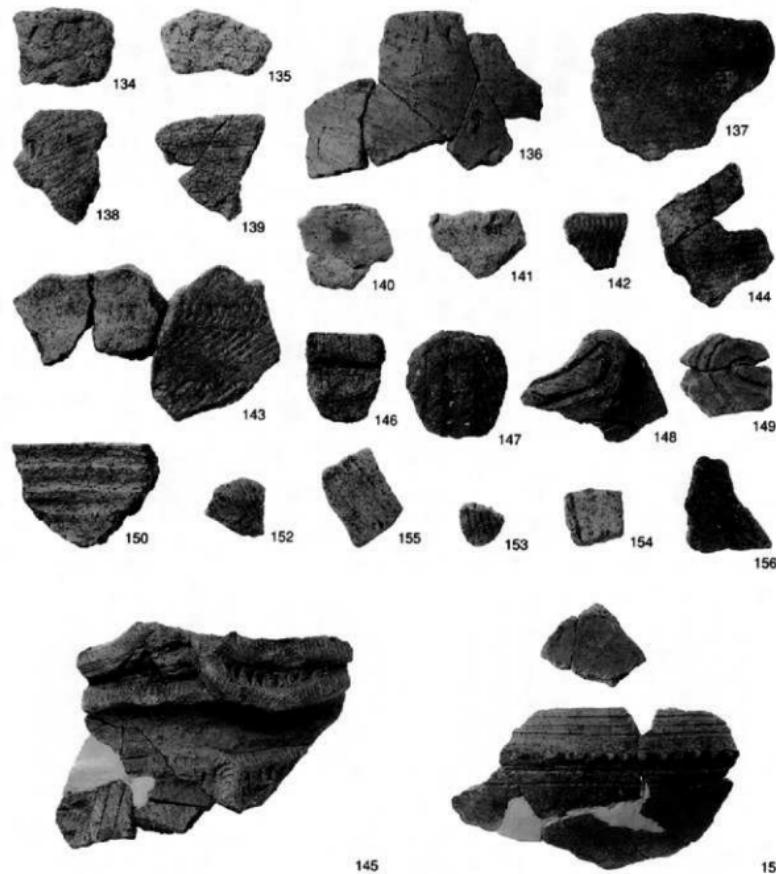


1 III層出土の遺物③(Ⅲ期)と岩陰北側の遺物



2 III層出土の遺物④(Ⅰ期)

図版 10



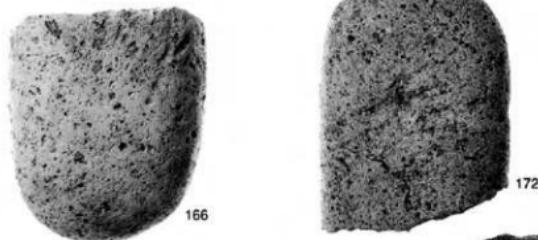
1 V層出土の遺物（Ⅰ期）



2 VII層出土の遺物（Ⅰ期）

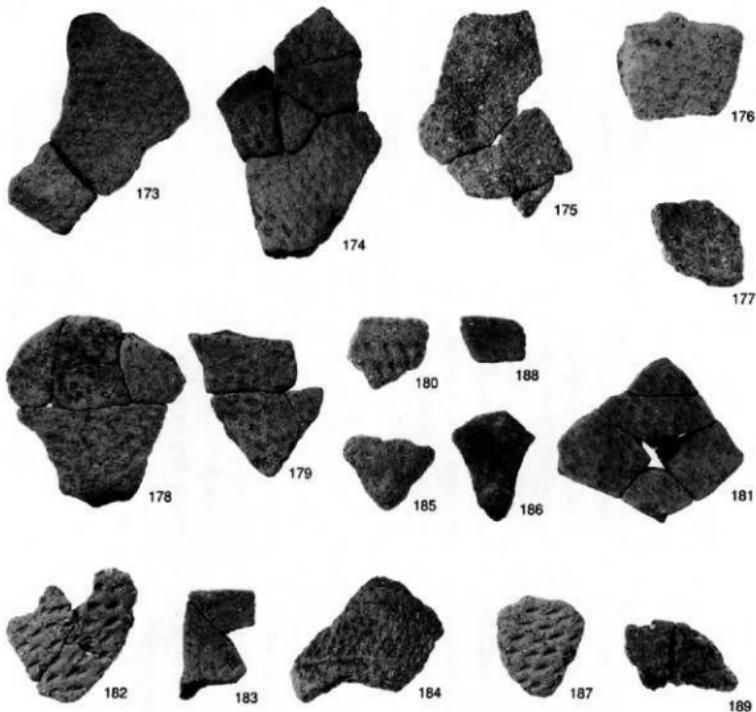


1 IV～V層出土の遺物①（Ⅰ期）

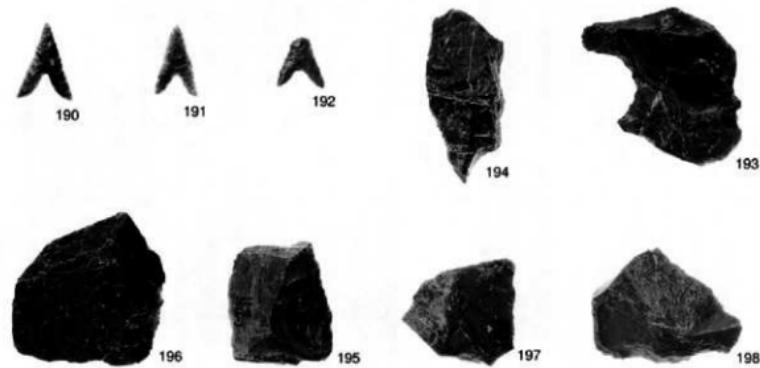


2 IV～V層出土の遺物②（Ⅰ期）

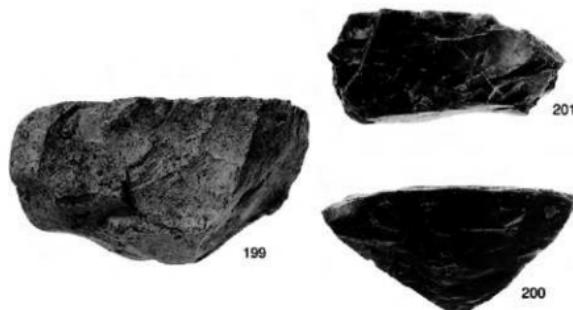
図版 12



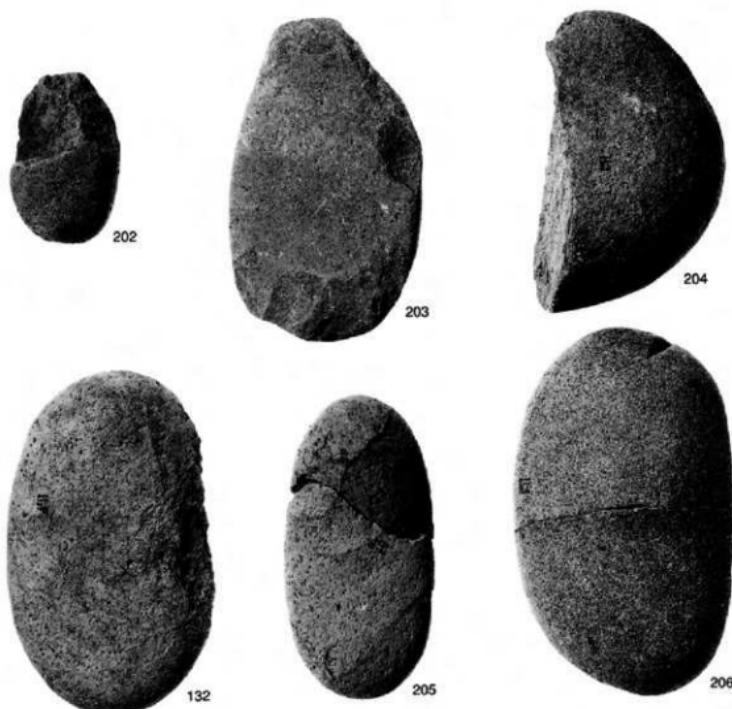
1 層出土の遺物① (Ⅰ期)



2 層出土の遺物② (Ⅰ期)

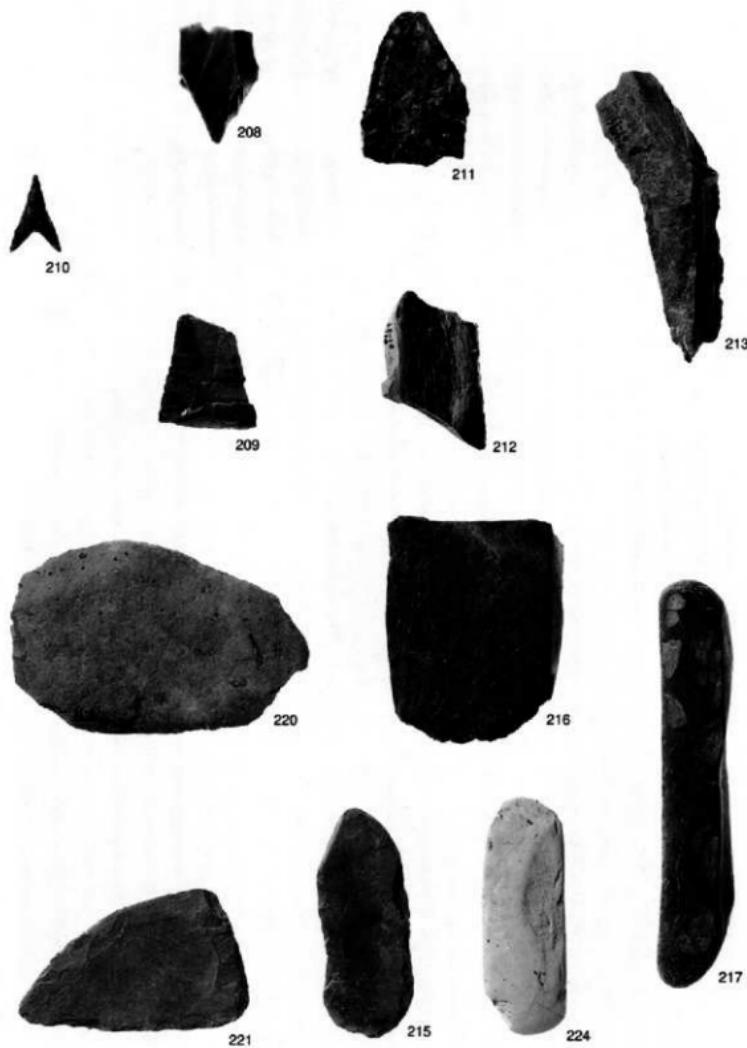


1 7層出土の遺物③（Ⅰ期）



2 7層出土の遺物④（Ⅰ期）

図版 14



IX～X層出土の遺物①（Ⅰ期）



218



214



219



222



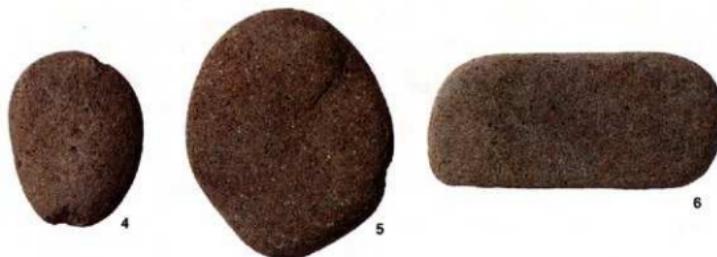
225



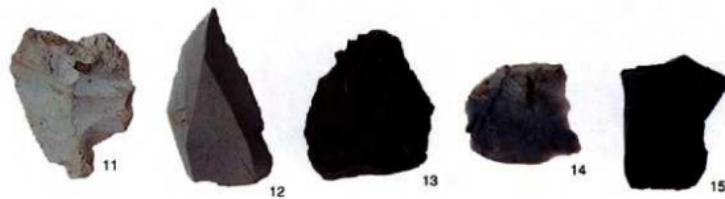
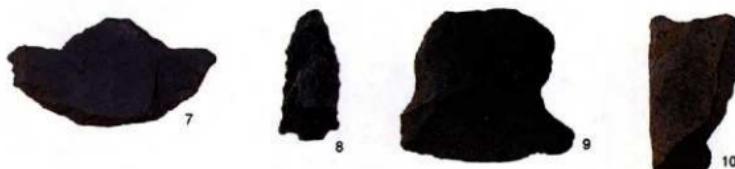
223

IX～X層出土の遺物②（I期）

図版 16



1 石材識別表の石材 1



2 石材識別表の石材 2

## 報告書抄録

ふりがな	いわいどいわけいせき						
書名	岩井戸岩陰遺跡						
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第81集						
編著者名	三島誠						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058(237)8550						
発行年月日	西暦2003年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在名	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	調査原因
岩井戸岩陰 遺跡	岐阜県武儀郡 武芸川町谷口字岩井戸、 小知野字西岸	21463	01203	32°50'10" 136°50'8"	20011003 ~ 20020131	75m <sup>2</sup>	一般国道 418号道路 改良に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項	
岩井戸岩陰 遺跡	その他の 遺跡	縄文			縄文土器 石器		
		弥生			弥生土器	岩陰内部を利用 した祭祀の場	
	古墳			須恵器 石製品			
		中世	集石遺構		土師器 灰釉陶器 山茶碗		

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第81集

## 岩井戸岩陰遺跡

2003年3月20日

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター

岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 株式会社コームラ